

看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科

看護実践研究指導センター年報

令和元・2年度



CHIBA UNIVERSITY

巻頭言

全国の看護系大学、医療機関をはじめ他分野の方々の協力と参画により、令和元年度・2年度も看護学教育研究共同利用拠点として、諸事業を行うことができました。年報にて事業報告を致しますとともに、関係の皆様にご心からお礼申し上げます。

令和元年度は、「看護学教育研究共同利用拠点」の再々認定に向けた審査の年であり、当センターのこれまでの事業の成果を評価するとともに、変化する社会とそこで期待される看護職の役割、そのような看護職育成に必要な看護学教育のあり方を展望し、新たな事業計画を策定し申請を行いました。それが「“Society5.0 看護” 創出拠点-ピア・コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略」事業であり、無事再々認定を受けることができました。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染の拡大の影響により、「国公立大学病院副看護部長研修」「看護管理者研修」「看護学教育指導者研修」「看護系大学FD企画者研修」につきましては、やむなく開催中止いたしました。参加をご希望されていた皆様並びに開催を見込んで組織の人材育成計画を立てておられた皆様には、大変ご迷惑をおかけしました。心よりお詫びを申し上げます。また、「看護学教育ワークショップ」につきましては、初めてのWeb開催とし、盛会のうちに終了することができました。こちらにつきましても、ご参加、ご協力いただきました皆様に深くお礼を申し上げます。

この新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンデマンド配信による講演やメディアを活用した同時双方向でのグループワーク研修を実施したことで、オンラインによる利点を実感するとともに、その欠点を補うことが今後必要になると考えました。そこで、当センターのこれまでの研修内容・方法を見直し、本センターが担う事業の方向性を明確にしました。今後は、時代の変化に即して、これまでの知識提供型の集合研修の在り方を大きく転換し、「利用者相互のピア・コンサルテーション型研修」を新事業の柱に掲げ推進してまいります。

この方針転換に伴い、現名称「看護実践研究指導センター」の「指導」が、新事業の核となる理念である「ピア・コンサルテーション」にそぐわないため、令和3年4月1日より、名称変更をする予定です。新名称は、「看護実践・教育・研究共創センター」となります。この名称は、当センターが提供する機会を活用する全国の看護職やその所属組織が協働して、実践・教育・研究を含む看護学を開発していく拠点という活動理念を表現したものです。

当センターは、実践・教育・研究の良循環を通して、山積する社会的課題の解決に看護学の立場から貢献し、国民の健康の増進に資するものとなるよう、今後も活動を続けていきますので、皆様のご活用をよろしくお願いいたします。

令和3年3月吉日

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
センター長 和住 淑子

目次

I. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター概要.....	1
1. 設置概要.....	1
2. 目的.....	2
3. 活動基本方針.....	2
II. 令和元年度・令和2年度事業概要.....	3
1. 看護学教育の継続的質改善（CQI）モデル開発と活用推進プロジェクト.....	3
1) 目的と計画.....	3
2) 個別事例研究による看護学教育のCQIモデルVer. 2の開発.....	4
3) 看護学教育ワークショップの企画・開催.....	7
4) ワークシートの冊子体及び電子ブックの活用推進.....	10
5) フォローアップ調査.....	11
6) ネットワーク型CQI相互支援体制の構築.....	13
2. 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業	
―学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究―.....	14
1) 背景.....	14
2) 調査研究の目的.....	15
3) 調査研究の進め方.....	15
4) 事業成果.....	17
3. “Society5.0 看護” 創出拠点	
―ピア・コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略―.....	24
1) 目的と計画.....	24
2) 課題解決型研修計画〔看護系大学教員向け・看護管理者および中堅看護者向け〕の作成.....	25
3) ピア・コンサルテーションを活用した課題解決型研修への参加ニーズ調査.....	25
4) 課題解決型研修〔看護系大学教員向け・看護管理者および中堅看護者向け〕の計画決定.....	27
4. FD支援.....	28
1) 看護学教育ワークショップ.....	28
2) 看護系大学 FD 企画者研修.....	28
3) 看護系大学への個別支援.....	32
5. SD支援.....	34
1) 国公立大学病院副看護部長研修.....	34
2) 看護学教育指導者研修.....	43
3) 看護管理者研修.....	47

6. 共同研究.....	51
1) 共同研究1：教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える 看護学 教員向けFDコンテンツの開発と評価.....	51
2) 共同研究2：看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する 実証研究	53
3) 共同研究3：公的病院におけるELNEC教育プログラムの開発 (ELNEC: End of Life Nursing Education Consortium)	59
4) 共同研究4：FDコンテンツ開発（国際） ー10年後を見据えたグローバル人材育成と国際交流推進ー	61
5) 共同研究5：合理的配慮を要する学生の臨地実習にむけたFDプログラム開発 (※令和元年度で終了)	66
6) 共同研究6：組織の現状を踏まえた研修企画を支援する方法の開発.....	69
7. 情報ネットワーク化.....	72
III. 各研究部における研究内容.....	73
1. ケア開発研究部.....	73
2. 政策・教育開発研究部.....	74
IV. 看護実践研究指導センター活用実績.....	75
V. スタッフ紹介.....	76
VI. 資料.....	78
1. 教育・研究活動実績.....	78
1) 研究活動.....	78
2) 教育活動（学外）	90
2. 職員配置.....	93
3. 看護実践研究指導センター運営協議会記録.....	94
4. 看護実践研究指導センター運営委員会記録.....	99
5. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程.....	103

I. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター概要

1. 設置概要

1) 昭和 57 (1982) 年 4 月 1 日 全国共同利用施設として設置

看護学が独自の教育研究分野を確立しつつあった昭和 50 年代半ば、高齢社会の進展、医療資源の効率的運用等の実践的課題に対応する研究、指導体制の確立がせまられていた。そのような背景のもと、千葉大学看護学部で全国共同利用施設として、附属看護実践研究指導センターが設置された。看護系大学の教員等、看護学分野の調査研究に従事する者、看護職員の指導的立場にある者の利用に供することを目的として、共同研究、専門的研修等が実施されてきた。

2) 研究部の構成

設置当初は、継続看護研究部、老人看護研究部、看護管理研究部の 3 研究部から構成されていたが、より柔軟で時代に即した活動が展開できるよう、平成 19 (2007) 年 4 月から、政策・教育開発研究部、ケア開発研究部の 2 部構成となり、現在に至る。

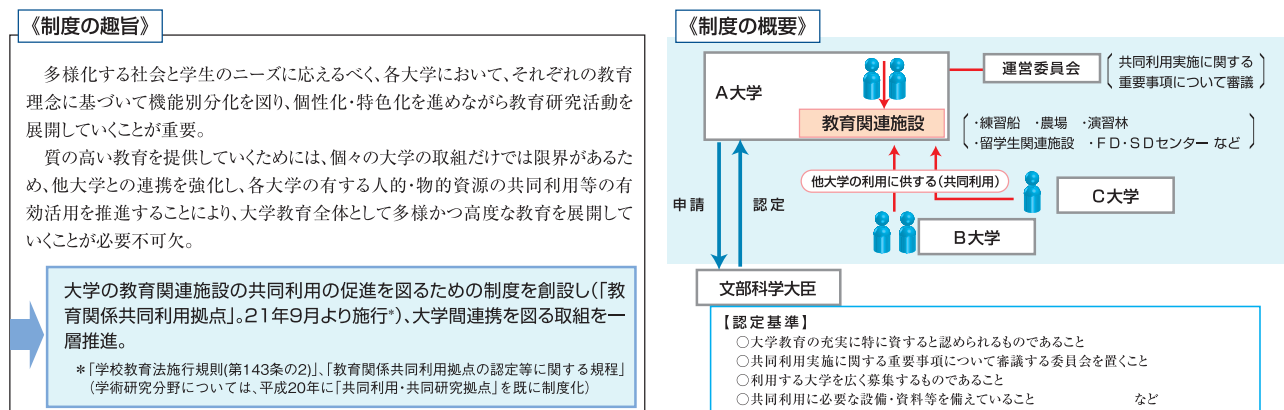
3) 平成 21 (2009) 年 研究科附属へ

看護学研究科の部局化に伴い、附属看護実践研究指導センターも研究科附属となった。

4) 看護学教育研究共同利用拠点の認定

平成 22 (2010) 年度に文部科学大臣より、教育関係共同拠点*として認定され、「看護学教育研究共同利用拠点」として活動している。平成 27 (2015) 年度に再認定され、第 2 期の活動中である。看護学分野では唯一の拠点である。

*教育関係共同利用拠点制度



2. 目的

社会が期待する看護の価値の創造に向けて、実践－教育－研究をつなぎ、全国の看護系大学および地域の関連施設の機能の充実・発展をめざす。

3. 活動基本方針

- 1) 各看護系大学、関係機関等の自律的な活動を支援する。
- 2) 大学間、利用者間の相互支援を重視する。
- 3) 看護学教育の質保証のための FD 支援、SD 支援を実施する。
- 4) 当センターと利用者の双方向の良循環をつくり、活動を推進する。
(利用者は最先端の情報や課題を持ち寄り、当センターは必要なニーズを把握、事業の企画と運営を行い、利用者が参画する)

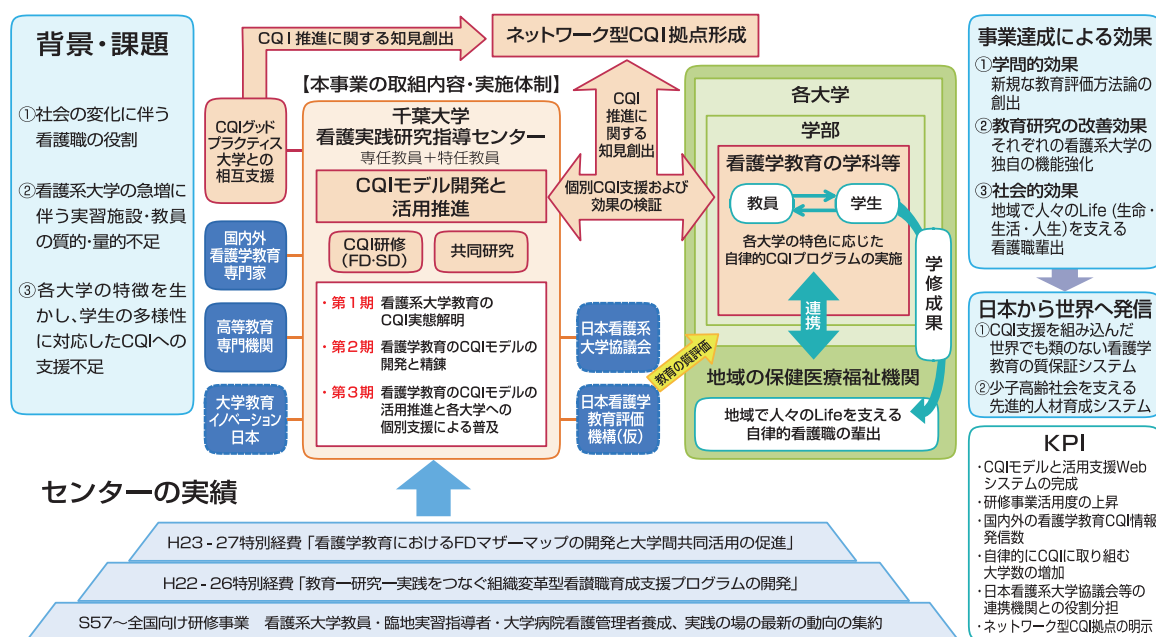
Ⅱ. 令和元年度・令和2年度事業概要

1. 看護学教育の継続的質改善（CQI）モデル開発と活用推進プロジェクト

1) 目的と計画

本プロジェクトの目的は、地域で人々のLife（生命・生活・人生）を支える看護職を輩出するために、看護学教育の継続的質改善（CQI:Continuous Quality Improvement）モデル開発および活用推進により、全国の看護系大学の自律的・持続的機能強化を支援することである。その結果、国がめざす「効果的な医療提供体制の構築」の課題を推進し、地域で人々のLife（生命・生活・人生）を支える看護職を輩出することにつながる と考える。

令和元（2019）年度は、4年間のプロジェクトの最終年度であり、CQIモデル開発をVer.2にすすめ、看護学教育ワークショップ等で活用推進を実施するとともに、大学間相互支援ネットワークを意識した支援体制の構築を行った。



	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
事業フェーズ	第1期：看護系大学教育のCQI 実態解明	第2期：看護学 教育CQI モデル開発	第3期：CQI モデルの活用推進	
CQIモデル開発	●CQI 全国調査 ●CQI 事例研究準備	●CQI 全国調査 ●CQI 事例研究 ●CQIモデル試案作成	●CQI モデルの活用説明会実施 ●活用協力校の募集、選定、ルール決定と共有 ●CQI モデルの精練・完成	●CQI モデル活用支援の効果検証 ●CQI推進者研修プログラムの開発 ●全国CQI 調査の実施と分析
CQI支援	●FDマザーマップ活用効果検証 ●CQI 研修事業 ●CQIコンテンツ開発 看護学教育ワークショップ(10月)	●各大学要請対応型CQI 支援 ●FDマザーマップ活用型FD支援 CQI 研修の拡充+FD&SDコンテンツ 看護系大学FD企画者研修(7月～3月) 看護学教育ワークショップ(10月)	●CQI モデル活用型CQI支援 ●各大学要請対応型CQI 支援 ●FDマザーマップ活用型FD支援 看護系大学FD企画者研修(7月～3月) 看護学教育ワークショップ(10月)	●CQI モデル活用型CQI支援 ●各大学要請対応型CQI 支援 ●FDマザーマップ活用型FD支援 看護系大学FD企画者研修(7月～3月) 看護学教育ワークショップ(10月)
ネットワーク型CQI相互支援体制の確立 事業評価と発信				

2) 個別事例研究による看護学教育のCQIモデルVer.2の開発

<目的>

以下を明らかにするために、看護学教育のCQI (Continuous Quality Improvement) に関する事例研究を開始した。

- (1) 看護学教育のCQIモデルver. 1の効果を検証する。
- (2) 看護学教育のCQIを推進するために必要な戦略活動を説明するモデル図 (以下、実行モデル) を開発し、CQIモデルver. 2を開発する。
- (3) 組織的に看護学教育のCQIに取り組む者に必要な能力を明らかにする。

なお、本研究における「看護学教育のCQI」とは、看護系大学の教員が実施している自大学の看護学基礎教育課程における教育の質改善活動のうち、組織的に行っており、回答者が継続的な質改善につながる取り組みと判断しているものをいう。

<研究方法>

看護系大学を対象とした個別事例研究であり、インタビュー、ワークショップ時のワークシートやCQI実施の関連資料をデータ収集した。看護学教育のCQIモデルver. 1をどのように活用できたのか、またその後のCQIの推進状況についてインタビューし、個別のCQIのプロセスを描き、推進要因、阻害要因、CQI推進に必要な能力を明らかにした。本研究は令和元年度に実施した。

<結果>

(1) 対象者の概要

10大学から協力を得た。設置主体は、国立大学 1校、公立大学 2校、私立大学 7校であった。開学からの年数は、1-5年 2校、5-9年 3校、10-14年 2校、15-19年 3校 (平均値 10.1±6.23年、中央値10.5年) であった。インタビュー対象者の職位は教授 6名、准教授 3名、講師 1名であった。

(2) CQIモデルver. 1の効果

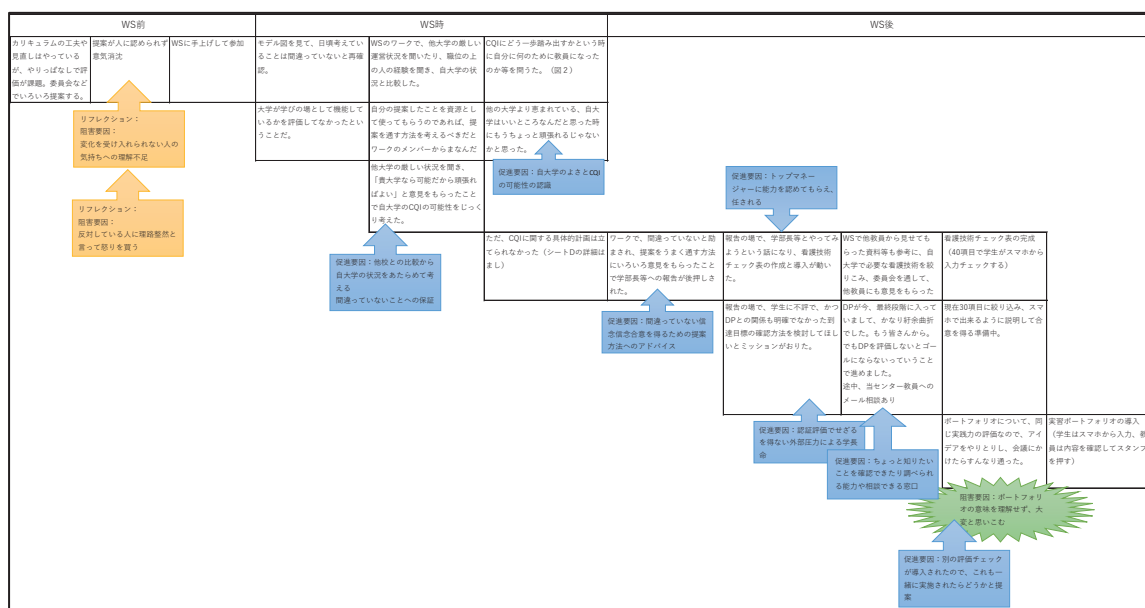
CQIモデルver. 1の効果の検証として、事例ごとに、看護学教育CQIモデル活用の効果について、新たな気づき、視点の変化、大学の捉え方の変化、自分自身の思考のプロセスの観点から分析した。対象者全員が、CQIモデルver. 1を用いて、自大学の現状分析を進める中で、自大学の強みに気づき、エネルギーを得ているとともに、明確さの差はあるものの、何かしらの方向性を見出していた。

(3) CQIのプロセス・促進要因・阻害要因

実行モデル図の開発に向けては、事例ごとに、CQIの推進に関わる、阻害要因、推進のきっかけとなる出来事などを端的に図示し、CQIのテーマを分析するとともに、促進・阻害要因を抽出した。

A大学の分析結果について述べる。A大学の課題は、カリキュラムの工夫はしても評価がされてこなかったことであった。対象者は、委員会などで提案してきたが、他教員に受け入れられず意気消沈していたところで、自ら参加したワークショップで

ークショップでは、CQIモデル図を見て自分が考えていたことに間違いはないと信念がもてた。また、他大学教員とのグループ討議を通して自大学の状況を改めて考え直し、自大学の課題とともに良さとCQIの可能性を認識できた。ワークショップ後は、それらを後押しにして、学部長をはじめ他教員の立場や状況を読みながら働きかけ、下案を作り学生の学びに基づいた教育評価方法の具体的な提案を繰り返した。結果、CQIの成果としてITを利用した教育評価システムが構築できた。



なお、他大学も同様に分析を行った。対象大学の継続的質改善（CQI）のテーマの一部抜粋を表Aに示した。

表 A 導かれた継続的質改善（CQI）のテーマ

大学名	CQI のテーマ
A	学生の学びからの教育評価システム構築
B	積み重ね型学習である看護学教育における教員間協働連携—負担感改善への見える化
C	よりよい変化を持続させるトップ主導の学内合意形成システムの構築
⋮	⋮
J	自大学の価値を自覚し、地域と共有・発展に向かう FD への転換

(4) プロセスの特徴

10対象事例のプロセスの特徴の類似・相違性の比較から、複数の対象者が経るCQIのプロセスの特徴として、4つの観点を見出した。

(5) CQI推進者に必要な能力

CQI推進者に必要な能力については、全大学のデータを集めて、質的統合法（KJ法）を用いて分析した。データから「看護学教育のCQI推進者に必要な能力とは何か」

を視点に、45枚の元ラベルを作成した。元ラベルは、5段階のグループ編成を経て、6つの最終ラベルに統合された。

その結果、CQI推進者に必要な能力の全体像は、「CQI推進の原動力」と「CQI推進に必要な知識」に立脚した「CQI推進者としての覚悟」であり、さらにそのためには「CQIチームに働きかけるスキル」が求められた。また、「全教員に必要なマネジメント・リーダーシップ」の一方で「組織でのマネジメント・リーダーシップ」が必要であった。そして、それらを背景にした「CQIチームに働きかけるスキル」が要となり、その結果「CQI推進の原動力」「CQI推進に必要な知識」が増して、CQIが推進されていくことが明らかとなった。

(6) 実行モデル図案の検討

全大学分の比較、相違性に基づき、実行モデル図の検討を行い、図案を作成した。

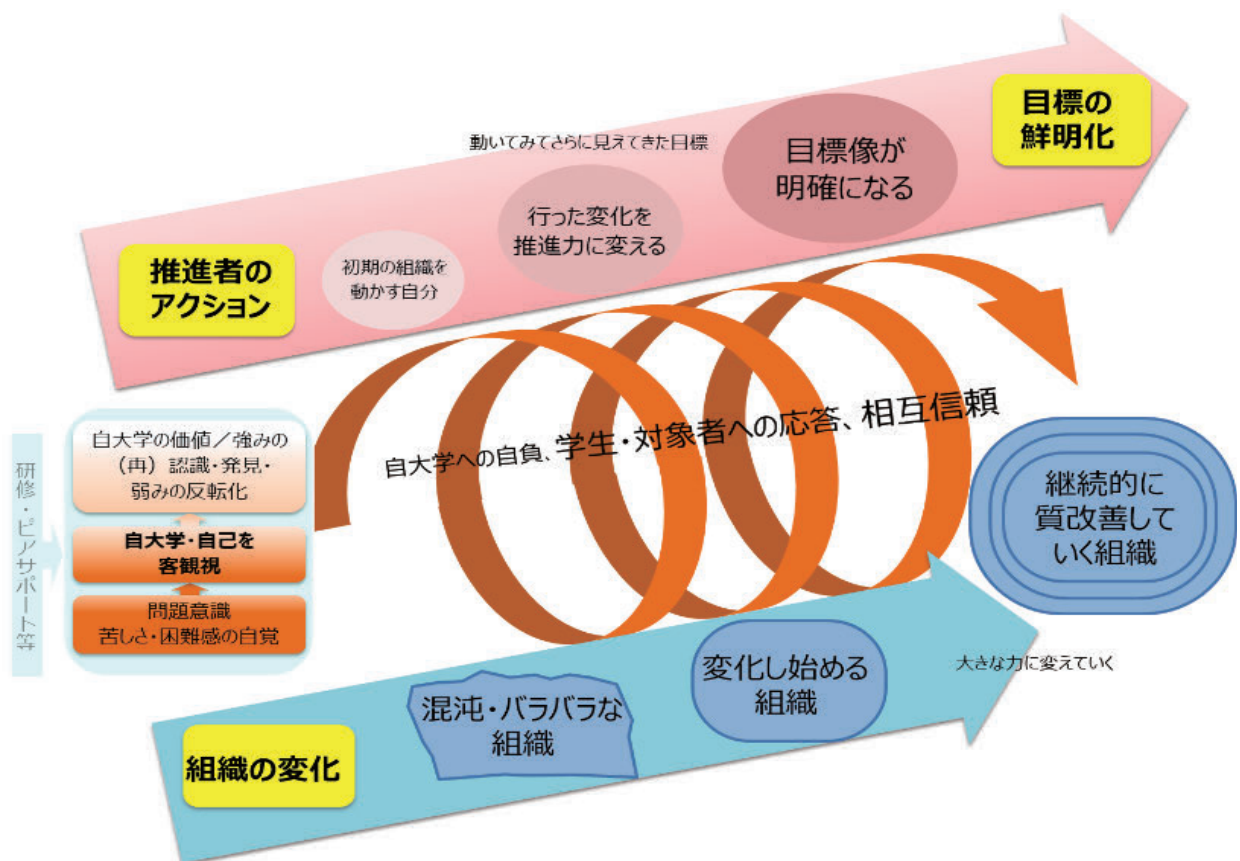


図 CQIの実行モデル図案

3) 看護学教育ワークショップの企画・開催

《令和元年度看護学教育ワークショップ》

(1) テーマ

多様なCQIをささえる大学間相互支援ネットワークの力

(2) 目的

参加者が自大学で看護学教育の継続的質改善（CQI）を推進することに向けて、CQIの実践者から学び、必要な能力を把握するとともに、大学間相互支援を通して各大学における多様なCQIのありようを考えること、今後の大学間相互支援のネットワークを広げることを目的とする。

(3) 実施方法

①期 間 令和元年10月28日（月）～10月29日（火）2日間

②会 場 千葉大学けやき会館（千葉市稲毛区弥生町1-33）

③参加要件 グループワークを実施する全日程参加者は、看護系大学において組織的な教育の質改善(CQI)を推進する教員で、原則として准教授以上

④主 催 看護学教育研究共同利用拠点

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

⑤参 加 費 講演・報告の部のみ5,000円、全日程20,000円

（往復旅費、宿泊費、昼食代含まず）

(4) プログラム概要 ※ 全日程参加者はワークシートAとBの記載を事前課題とした。

10月28日 (月)	《来賓挨拶》 文部科学省 専門職 高久奈津子			
	午 前 【講演と報告の部】	《報告1》 「CQIモデル開発とその成果」 千葉大学大学院看護学研究科 附属看護実践研究指導センター長 和住淑子	《講演》 「大学教育における 内部質保証の動向」 大学基準協会 事務局長 工藤潤	《報告2》 「CQI実践事例」 鳥取大学医学部 保健学科 教授 深田美香
	午 後 【ワーク 第1日目】	《ワーク1》「自大学の現状分析(シートB・Cを用いた討議)」		
	終了後	交流会		
10月29日 (火)	午 前 【公開座談会】 《CQI実践者4名 からの話題提供と ディスカッション》	「若手教員・中堅教員から発信する ボトムアップ型CQIアイデアの構想」 山形県立保健医療大学看護学科 講師 山田香		「学生の学びの評価に関するCQI」 大阪医科大学看護学部 准教授 土肥美子
		「全領域で運営する 地域包括ケア実習に向けたCQI」 鳥取大学医学部保健学科 教授 深田美香		「新設大学でのカリキュラム ポリシーの共有に向けたCQI」 福岡看護大学 学長 窪田恵子
	午 後 【ワーク第2日目】	《ワーク2》「シートDの作成(個人ワーク)」 グループメンバーへの計画宣言とコメントのフィードバック (グループ討議)		
		《全体討議まとめ》 全日参加者のCQIの課題を俯瞰し、全国の看護系大学に必要なCQIの様相と期待される成果(地域で人々のLife(生命・生活・人生)を支える看護職を輩出する)に向け課題検討		

(5) 実施体制

千葉大学運営組織・グループワークファシリテーター

大学院看護学研究科長、センター教員会議および実行委員会

(6) 実施概要（ワークショップ報告書の総括より）

看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement：CQI）モデルの開発と活用推進のプロジェクトに2016年度から取り組み、2019年度は最終年度にあたる。ワークショップは、プロジェクトにおいては、モデル開発の成果を紹介する場、モデルやワークシートへの意見交換の場となってきた。昨年度のワークショップでは、開発したモデルとワークシートを使用して、グループワークでの他大学との比較、相互の学びの場となった。その結果、疲弊気味の参加者がエネルギーを得ていることが確認でき、2019年度は、さらに多様な立場のCQIの推進者から学び、必要な能力を把握するとともに、大学間の相互支援のネットワークを広げる場とすることをねらいとした。

昨年度と同様にモデルVer. 1を使用したグループワークからは、モデルの有用性や必要性を再確認できたことに加え、今回、公開座談会の実施を加えたことで、新たな気づきもあった。モデルやワークシートを使った相互支援として、昨年度に続き、2019年度のワークショップでもグループワークを行った。領域や職位に関係なく、利害関係のない看護系大学教員同士が相互支援することによって、自大学を俯瞰し、CQIに向かう思考の方向性を丁寧にたどることによって、CQIとしてやるべきことが見えてくる。一方、今年度はじめて企画した座談会は、CQIで取り組みたい事項に焦点をあてて、参加者同士が具体的な活動やアイデアの意見交換をするために実施した。

学生の学びの評価、ポリシーの共有、地域包括ケアシステムを背景とした実習の構築、若手・中堅教員からのアイデア発信などがテーマの座談会では、質疑応答や、実践のアイデア、活動報告が活発にあり、まさに大学間の相互支援のネットワークが目に見えるようであった。また、質問を通して、共通理解しておくべき知識の周知もまだまだ必要だとあらためて実感した。

本プロジェクトでは、前提の一つとして、「絵に描いた餅ではなく、現実的で実行可能なCQI活動を導きだすことのできるモデルにする」を挙げているが、今回の公開座談会からは、絵に描いた相互支援のネットワークではない、活用性の高いネットワーク体制が必要だと考えられた。情報を求める発信に対して、可能な人がタイムリーに情報を返すことができるスピードと利便性が必要であること、一方で、看護系大学で共通理解しておくべき知識にアクセスできるための支援の必要性にもあらためて気づいた。

ワークショップを通して、看護系大学の教員の多忙さと、その中で、真摯に教育の改善に取り組もうとする姿勢に敬意を抱くとともに、看護系大学の相互支援の重要性をあらためて認識し、残り期間でプロジェクトをすすめていきたい。

《令和2年度看護学教育ワークショップ》

(1) テーマ

看護学教育支援におけるICT活用の可能性

(2) 目的

講演では、参加者が看護学教育支援におけるICT活用の経験や実践知を共有し、ICT活用の可能性について示唆を得る。全プログラムの参加者では、講演で得られた示唆に加えて、自大学の現状分析にもとづき、WEB会議によるグループワークに自ら参加する経験もいかして、自大学における看護学教育へのICT活用の可能性、課題を検討できることを目的とする。

(3) 実施方法

①講演WEB配信期間 令和2年10月21日（水）～11月10日（火）

グループワーク（WEB会議：全プログラム参加者のみ） 令和2年10月27日（火）

②参加要件 グループワークを実施する全プログラム参加者は、看護系大学において組織的な教育の質改善(CQI)を推進する教員で、原則として准教授以上

③主 催 看護学教育研究共同利用拠点

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

④参加費 講演のみ5,000円、全プログラム20,000円

(4) プログラム概要 ※全日程参加者はワークシートAとBの記載を事前課題とした。

10月21日 (水) ～11月10日 (火)	《講演：WEB配信》	
	・「ICTを活用したグループワーク～コロナ禍での模索のプロセスと課題」 宮城大学看護学群 教授 大塚真理子 ・「ICTを活用したシミュレーションラーニングの実際」 東京医科大学医学部看護学科長 阿部幸恵 ・文部科学省「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う対応について」の解説 文部科学省高等教育局医学教育課 看護教育専門官 高橋良幸	
10月27日 (火)	《グループワーク（全プログラム参加者のみ）》	
	10:10 ～ 11:40	・ワークのすすめ方の確認（担当センター教員）と自己紹介 ・事前に共有した資料にもとづき、一人ずつ、他のグループメンバーから質問や意見を受け、気づきを増やす。 ＜CQI ワークシートBの2）、3）を活用＞
	13:30 ～ 15:00	・午前中の意見交換をいかし、自大学における看護学教育へのICT活用の可能性、課題を検討する。 ・気づきや考察を深め、ありたい姿（長期的目標像）を描き、課題を検討する。 ・その過程を通して、自大学のICTの活用可能性について考察を深める。 ＜CQI ワークシートC、Dを活用＞

(5) 実施体制

千葉大学運営組織・グループワークファシリテーター

大学院看護学研究科長、センター教員会議および実行委員会

(6) 実施概要（ワークショップ報告書の総括より）

新型コロナウイルス感染症の影響により、看護系大学では、年度当初から、これまで対面で行っていた教育支援方法を変える必要に迫られた。しかし、そのような社会状況に直面しても看護学教育の本質を見失わず、様々な工夫で教育が行われている。これを契機に、教育におけるICT化をすすめた例もあることから、本年度のワークショップでは、看護学教育におけるICT活用の可能性をテーマとした。

また、今回のワークショップの企画・運営自体が、『ICT活用の可能性』を検討するプロセスとなり、主催者側の我々も大いに学ばせていただく機会となった。

オンデマンド配信で行った講演の部は、300人を超える方に視聴していただくことができ、多忙な全国の看護系大学の教員にとって、WEBでの講演のメリットを実感した。

グループワークは、WEB会議システムを用いたため、参加者の疲労も考慮してワーク時間を短くしたが、参加者同士の経験や知識による相互支援が可能であることが確認でき、何等かの形態で実施された各大学の遠隔授業やICT活用の経験を共有する場となった。さらなる要望や改善はあるものの看護系大学教員が、参加者同士の相互支援をICT活用ですすめる一步になったと考える。

当センターでは、令和2年度から、“Society5.0看護”創出拠点ーピア・コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略ーのプロジェクトを開始した。本プロジェクトは、最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける人間中心の新たな健康支援方略を検討し、看護学教育への反映、社会への発信を目指すことを目的としている。すべての看護系大学がそれぞれの置かれた場においてその力を発揮することにより、人々が健康に暮らす地域社会の実現に貢献できると思う。それを支えるのが、ピア・コンサルテーション、すなわち、目的を共有し、利害関係のない研修参加者が、グループワークを通して、相互に刺激し支援し合うことであり、今回のワークショップでのグループワークは、まさにこれにあたる。最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける人間中心の新たな健康支援方略の解明と実装に向け、今後とも、看護系大学教員の相互支援の場づくりを推進していきたい。

4) ワークシートの冊子体及び電子ブックの活用推進

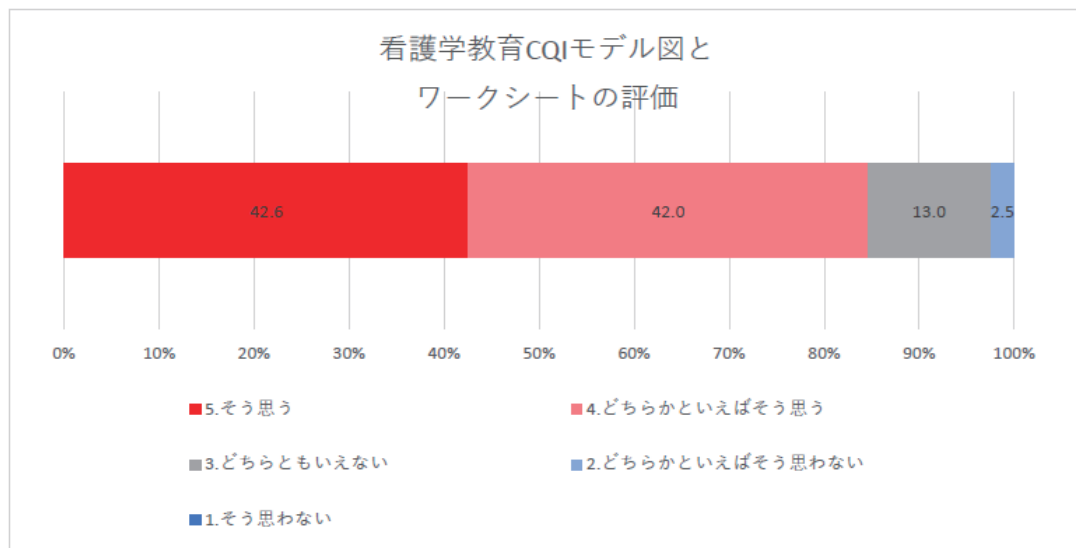
看護学教育のCQIモデルの活用促進とさらなる開発のために、Ver.1までのモデル図を示し、活用のためのワークシートを紹介するために、冊子体及びHPから閲覧できる電子ブックの活用推進を行った。<https://www.n.chiba-u.jp/center/book2/>

Ver.2については、活用者の意見を確認後、ワークシート等に反映していく予定である。

n=36

(3) ワークシート 式	明瞭性	15	17	3	1	0	4.28	0.73	4	5	2
	適切性	17	15	3	1	0	4.33	0.75	4	5	2
	有用性	13	15	7	1	0	4.11	0.81	4	5	2
	全項目	45	47	13	3	0	4.24	0.76	4		

		度数分布						平均	標準 偏差	中央	最大	最小
		回答数	5	4	3	2	1					
(1)(2)(3)	明瞭性	42	50	11	5	0	4.19	0.79	4	5	2	
	適切性	52	44	11	1	0	4.36	0.70	4	5	2	
	有用性	44	42	20	2	0	4.19	0.79	4	5	2	
	全項目	138	136	42	8	0	4.25	0.76	4	5	2	
	%	42.6	42.0	13.0	2.5	0.0	324					



今後は、本モデル図とワークシートを使用したCQIの結果、何に成果を得たのかを確認していきたい。実行モデル図案はまだ出来上がったばかりであるため、使用し、参照した皆様からご意見をいただき、適宜修正していきたい。

6) ネットワーク型CQI相互支援体制の構築

当初、ネットワーク型CQI相互支援体制をWEB上に構築し、関心のある人同士が相互支援しあえる場をつくる計画であった。しかし、大学のセキュリティ強化の一環で、実施できなくなった。そこで、SIG (Special Interest Group)の小集団のメーリングリストをつくることとした。

SIGは、特定のテーマについて興味や関心のある人々のグループのことで、メーリングリストは、SIGのテーマごとに開設する。当該のテーマに関して、各大学が困っていることや悩んでいること、あるいは、先行して実践している自大学の取り組み内容や工夫、知恵などについて、自由に、情報や意見を交換することによって、各大学のCQI推進を、相互に支援し合うネットワークとなることを意図した。

開設の試みとして、以下の7つのSIGテーマを設定した。

- (1) 若手・中堅教員発信のCQI
- (2) 学生の学びの評価に関するCQI
- (3) 地域包括ケアを学ぶ科目に関するCQI
- (4) 自大学のポリシー共有に関するCQI
- (5) FDマザーマップ活用に関するCQI
- (6) 臨地実習の改革に関するCQI
- (7) 新カリキュラム構築に関するCQI

2018年度・2019年度の看護学教育ワークショップの参加者に参加を呼びかけ、延べ80名強で開始した。

2. 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業 —学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究—

1) 背景

近年、地域包括ケアシステムの構築が進むにつれ、患者の療養の場は、病院から、ケア施設や自宅へと大きく変化しつつある。病床の機能分化も進み、看護の対象者の多くは、病院の病棟ではなく、外来、地域のケア施設などの非医療機関、自宅に存在するようになった。それに伴い、看護職に期待される役割も、従来の病院に入院している患者への看護のみならず、外来通院しながら自宅で療養する患者を支援する役割、地域のケア施設などの非医療機関で介護・福祉職と連携しながら看護を展開する役割、患者の自宅へ訪問し看護を提供する役割、さらに、各地域のニーズに即したケアサービスのあり方を探索し、新たなケア資源を開発し、地域包括ケアシステムを発展させる役割へと、ますます拡大してきている。

看護学教育の第一義は、「看護の対象者がどのような場にいたとしても、その人のより健康的な生活の実現に向けて看護の必要性を見抜き、必要な看護を提供できる能力を修得」させることにある。学士課程を卒業した学生が、人々が看護を必要としている場でその力を発揮し、社会に貢献していくためには、学士課程教育において、社会の変化に即して拡大しつつある看護職の役割を自律的に果たす能力を修得する必要がある。このような学生の修得すべき能力の統合に重要な臨地実習に焦点をあてて、看護系大学の学生および教員の現状をみると、以下のような状況があることがわかる。

学生については、社会人経験を有する学生、あるいは合理的配慮を必要とする学生等、学生の多様性が増大している。したがって、教員は各々の学生が、看護職としての自らの特性と能力に気づき、発揮するように、指導力および実習施設との調整力等の教育力を高める必要がある。一方、看護系大学の急増に伴い、大学教育の経験の少ない教員が増加し、教員の流動性も比較的高く、中には、欠員を抱えている大学、あるいは世代交代期の大学もある。これは、教育組織の構築途上あるいは再構築の段階にあることを意味しており、今後の教育環境に即して、1人ひとりの学生に対する教育の質を保証するための方略について、領域間、職位間等の合意形成の必要な時期にある。

こうした学生と教員の動向に、教育環境の変化を重ねると、以下の二つの達成すべき課題があることがわかる。

(1) 実習環境と教育対象である学生の変化に即して、教員および臨地実習指導者が、従来の実習の概念を変革し、組織的な教育力を高め、(2) 各々の学生が、少子超高齢社会を担う次世代の自律的な看護職として、より長期間活躍できるように、自己教育力開発およびキャリア開発の支援を強化する、という課題である。

このような課題に対し、実習環境の激変および看護学教育に対する社会的要請を見据えて、外来、ケア施設などの非医療施設、離島での実習を導入するなど、臨地実習指導体制の改革をはかる看護系大学も出始めてはいる。しかし、これらの改革は、それぞれの大学の置かれた地域の特性を踏まえた一部の教員の工夫やアイデアに留まり、看護学

教育として体系づけられ、他大学も参照できるような形式で公表されているわけではなく、各大学が十分に活用しうる支援体制も整備されていない。

当然ながら、社会の変化に即して拡大しつつある看護職の役割を果たすための能力を、学士課程教育において体系的に修得するためには、臨地実習指導体制の改革を含むカリキュラム全体の改革が欠かせない。しかし、学士課程カリキュラムについては、看護師国家試験受験資格に係る保健師助産師看護師学校養成所指定規則等の規制もあることから、画一的なものになりがちで、社会の変化に即した十分な改革ができているとは言い難い状況にある。また、変化する社会に即した学士課程カリキュラムの改革に向けては、看護学教育モデル・コア・カリキュラムをはじめとする各種外部指針が公表されている。しかし、もとよりカリキュラムとは、一律の形式で外部から強制されるものではなく、これらの外部指針を参照しつつ、大学の置かれた地域の現状等に応じて、大学の特性を十分に活かしながら、各大学および教員が、主体的に研究開発し、実施していくものである。さらに、新たな実習フィールド、新たな実習体制、実習方法の開発や、教育の成果である到達度評価については、卒業生や地域における多様なステークホルダーとのコミュニケーションを欠かすことができない。

したがって、看護系大学が、医療人養成にかかわる社会からの要請に応えるためには、社会の変化に即して臨地実習指導体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づいて教育を展開し評価する方略および体制を、各大学の内部において構築する必要がある。全国の看護系大学における方略および体制の構築の現状に対し、先行して取り組んでいる事例等の方略とその考え方を大学相互に活用し、支援し合いながら、より効果的・効率的に改革を進める必要がある。

2) 調査研究の目的

看護系大学が、社会の変化に即して、臨地実習体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づいて教育を展開し評価する体制を、自大学の内部に構築する方略を解明し、それを成果物として公表するとともに、看護学教育ワークショップ開催等の効果的な普及方策を考案して、全国の看護系大学に普及する。

3) 調査研究の進め方

本調査研究は、以下の3つの構成で行った。

〔研究1〕社会の変化に即した看護系大学の臨地実習指導体制の改革に関する全国調査

〔研究2〕社会の変化に即した学士課程教育の改革

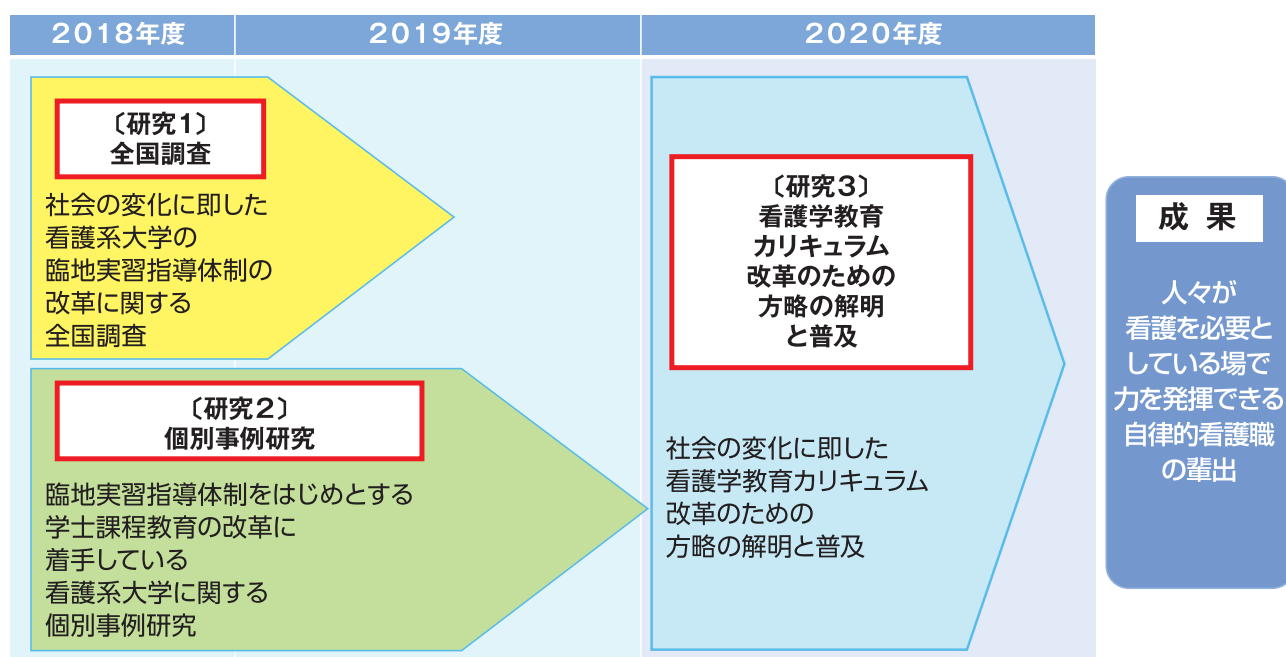
ー臨地実習指導に関する看護系大学の個別事例研究ー

〔研究3〕社会の変化に即した看護学教育カリキュラム改革のための方略の解明と普及

なお、本調査研究は、文部科学大臣認定の看護学教育研究共同利用拠点である本学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターが中心となり、地域特性や設置主体、附属病院の有無等の実習環境をはじめとする教育の諸条件の類型が異なり、各地域の役割期待に貢献してきた以下の看護系5大学と共同で実施する。このような実施体制により、全国の看護系大学の教育環境の類型の多様性に対応した成果をめざす。

地 域	大 学 名	学部・学科等名称	設置主体	附属 病院 の有無
東北ブロック	宮城大学	看護学群看護学類	公 立	無
中部ブロック	新潟青陵大学	看護学部看護学科	私 立	無
関東ブロック	横浜市立大学	医学部看護学科	公 立	有
中国ブロック	鳥取大学	医学部保健学科看護学専攻	国 立	有
九州ブロック	熊本保健科学大学	保健科学部看護学科	私 立	無

本調査研究委託事業における3年間の取組の全体像を、下記に示す。



図：本調査研究委託事業における3年間の取り組みの全体像

4) 事業成果

(1) 「研究1」社会の変化に即した看護系大学の臨地実習指導体制の改革に関する 全国調査

①研究目的

全国の看護系大学の臨地実習指導体制改革の進捗の実態と課題、教育の質保証に向けた支援ニーズを明らかにする。

②研究方法

- ・調査対象：2018年4月時点で開設されている全国の看護系大学の看護系学部・学科277課程（省庁立大学2校を含む）
- ・調査期間：2019年1月倫理審査委員会承認後～3月
- ・調査項目：2018年度に試案を作成し、専門家会議委員による精練を経て完成した調査票を用いた。調査項目は、設置年、設置主体、所在地域、教育理念、教育体制と教員の研究教育実績、学生数、卒業生の進路および就職先等の基礎データ、ならびに、(1)どのような地域社会、医療現場の変化に直面しているのか、(2)次世代の医療職としての学生が担い、変革すべき地域社会および医療現場のそうした変化をどのようにとらえ、どのように臨地実習指導体制を変革しようとしているか、(3)臨地実習における教育の質保証に向けて、どのような支援を必要としているのか、とした。
- ・調査方法：以下の手順で実施した。(1)看護学教育研究共同利用拠点である千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターのネットワークを用いて、センター長名で、全国の看護系大学の看護系学部・学科長等に郵送による協力依頼を行う。(2)看護系学部・学科長等が直接回答できない場合は、臨地実習指導に責任を持つ臨地実習関連委員会の委員長等、本調査に回答可能な教員へ依頼文の手渡しを依頼し、研究協力依頼を行う。(3)調査は、各大学の回答者に個別のアカウントを配布し、専用webで実施する。
- ・データ分析方法：各項目の単純集計を行い、その後、専門家会議委員による調査結果の検討と考察を実施した。専門家会議は、共同研究大学5大学に所属する教員と看護実践研究指導センター教員で構成した。専門家会議委員で調査結果を詳細に検討し、全国の看護系大学の臨地実習指導体制改革の進捗の実態と課題、教育の質保証に向けた支援ニーズに関して、分析し考察した。
- ・倫理的配慮：2019年1月に千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した（審査受付番号30-85）。最終的な調査協力の諾否は、専用WEB画面の「同意」ボタンで確認した。

③結果

- ・全看護系大学277校の教育責任者に研究協力を依頼し、92校（回答率 32.5%）から回答を得た。国立大学（省庁立を含む）14校（15%）、公立大学21校（23%）、私立大学56校（62%）であった。
- ・社会の変化に即した臨地実習指導体制の見直し・変更「あり」と回答した大学は49

校（53.3%）であり、見直し・変更の内容は「臨地実習施設の変更」が最も多かった。見直し・変更のきっかけは「大学全体の教育目的・目標や教育課程全体の変更」「『看護教育モデル・コア・カリキュラム』等の外部指針が出た」等であった。また、臨地実習指導体制の見直し・変更「なし」と回答した大学は43校（46.7%）であり、その理由は「見直し・変更の途上であるが、まだ実施に至っていない」が最も多かった。大学として得たい支援は「地域の小規模の施設で効果的な実習を行うための、教育内容や実習体制の検討」等があった。

④考察

約半数の看護系大学は、すでに何らかの臨地実習指導体制の変更に着手しており、まだ変更していない大学についても、変更の途上もしくはその計画があり、多くの看護系大学が地域社会の変化を受け止め、従来の病棟実習中心の臨地実習指導体制からの変革を試みている実態が明らかになった。今後は、先駆的事例の研究等により、各大学がその実情に即してより効果的な臨地実習指導体制を構築する方略を検討していきたい。

（２）〔研究２〕社会の変化に即した学士課程教育の改革

－臨地実習指導に関する看護系大学の個別事例研究－

①研究目的

社会の変化に即して臨地実習指導に関する改革を試みた実績をもつ看護系大学の取組みの内容を具体的に明らかにし、大学間で共有可能な知見を導き出す。

②研究方法

- ・研究対象：臨地実習指導に関する改革を試みた実績をもち、本研究への協力に同意の得られた看護系大学21校
- ・調査期間：2019年2月（倫理審査承認後）～ 2021年3月末日
- ・調査項目：大学の基本情報（看護系大学の設置主体、看護系学士課程として開校した時期、大学が所在する地域、看護系学士課程1学年の定員、臨地実習指導に関わる専任教員数、等）と、臨地実習指導も関する学士課程教育の改革の具体
- ・分析方法：各対象大学を個別事例として、以下の4つの問いに基づきデータ分析を行った。4つの問いは、「当該大学は、どのようにして、地域社会の変化を読み、新たな実習フィールドを開拓し、新たな実習体制・実習方法を開発し、自大学の学士課程カリキュラムを改革しているのか」「教育の成果である到達度評価はどのようにしているのか」「その過程においてどのように各種外部指針を活用しているのか」「どのような課題を有し支援を必要としているのか」である。個別分析の結果を全事例で比較し、各大学に特徴的な、見直し・変更の「きっかけ」、「工夫」、「メッセージ（他大学においても活用可能な教訓）」を導き出し、他大学が活用可能な形式で整理した。
- ・倫理的配慮：研究代表者の所属機関の倫理審査委員会の承認を受け実施した（審査受付番号30-91）。研究協力の諾否は文書により確認し、大学名や個人が特定できないように配慮した。

③結果

表a 調査対象大学の概要

大学	設置主体	学士課程 開校時期	地域	1 学年 定員	育成を目指す 看護人材像
1	公立	20年以上前	東北	80－100	大学所在地に限らず、全国の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
2	公立	20年以上前	東北	100－120	大学所在地に限らず、全国の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
3	公立	10-14年前	関東	100－120	大学所在地の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
4	私立	15-19年前	北陸	80－100	大学所在地の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
5	国立	15-19年前	中国 四国	80－100	大学所在地に限らず、全国の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
6	私立	15-19年前	九州 沖縄	100－120	大学所在地に限らず、全国の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
7	公立	20年以上前	九州 沖縄	80－100	大学所在地の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
8	国立	20年以上前	北海道	60-80	大学所在地の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
9	公立	20年以上前	東北	80-100	大学所在地の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
10	公立	15-19年前	東北	60-80	大学所在地に限らず、全国の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
11	私立	過去5-9年前	関東	60-80	大学と同一法人内や系列施設で働く看護職
12	私立	15-19年前	中部	120-140	大学と同一法人内や系列施設で働く看護職
13	私立	過去5-9年前	関西	60-80	大学所在地に限らず、全国の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
14	私立	過去4年以内	九州 沖縄	100-120	臨地実習施設で働く看護職
15	私立	10-14年前	九州 沖縄	100-120	大学所在地の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
16	公立	20年以上前	九州 沖縄	80-100	大学所在地の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
17	公立	過去5-9年前	九州 沖縄	80-100	その他（ヒューマンケアを提供できる高度医療を担う質の高い看護専門職者）
18	国立	20年以上前	関東	80-100	看護に関する教育・研究職
19	私立	過去5-9年前	関東	80-100	大学所在地に限らず、全国の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
20	私立	過去4年以内	関西	100-120	大学所在地の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
21	私立	10-14年前	中国 四国	80-100	その他（地域における急性期一般病院での臨床実践能力の育成）

・メッセージの分析結果

「メッセージ」は表bに示したように、「組織の在り方・運営」「地域に根差した実習」「学生の学びを高める教育」の3カテゴリーに分類できた。

表b メッセージの分類(一部)

カテゴリー	サブカテゴリー	メッセージ (一部)
組織の在り方・運営	領域横断的/全学的/組織的に取り組む	実習施設にも波及する中期計画の実質化
	教員が結束し認識を共有する	明確な大学のビジョンに向かって結束する
	小さなムーブメントを起こす	できるところからやってみよう
	財源を確保する	財源の確保
	先を読み柔軟に運用する	状況を先読みした経常的な評価から生まれる一歩先を行く変革と柔軟な運用
	教員異動を活かす	教員異動は組織変革のチャンス
	教員の専門性を有効活用する	大学院教員を学部教育に活かす
	既存のしぐみを活かす	既存のしぐみを活用する
地域に根差した実習	実習場を地域(病院看護職以外)にシフトする	看護師も地域の視点が重要であり、先駆的なフィールドがあれば遠隔地にも行く
	「地域貢献・住民支援によって学生が育つ」win-winで地域と繋がる	地元の特性、学生のレディネスに応じた、フレキシブルで自由度の高い実習
	「看護師教育によって学生が育つ」win-winで近隣地域病院と繋がる	地元ナースの養成コースは学生の教育課程をスタートし、看護職の生涯教育に繋がる
	実習施設を巻き込み指導力を向上させる	教員と(実習施設の)師長が同じ目的に向かう
	自大学内で完結しない	近隣大学や学校と協働した授業展開
学生の学びを高める教育	カリキュラム構築や科目の工夫をする	学生の声を拾った教育改善：カリキュラム、授業、臨地実習指導
	学生の学習支援に繋がる評価方法を取り入れる	領域ごとに学生が個々に目標自己管理シートを記入し、実習指導者との共有を図る
	実践的な判断思考力の教育に着目する	看護過程は、瞬時の臨床判断の積み重ねの中で学習可能
	学生同士、学生自身で自ら学ぶ土壌をつくる	自己教育力は、学生が多様な場に身を置き、多様な経験の中で身に着くことができる
	学生目線で実習環境を整える	学生にとって「近い、(交通費が)安い」実習場所の新規開拓
	シミュレーション教育を取り入れる	今どきの学生に対応した学習支援：特にシミュレーション教育の推進
	看護師としてのキャリアを意識づける	キャリアの意識付け
	保護者に向けた就学支援を行う	今どきの保護者に向けた修学支援
	聞き書き演習を取り入れる	聞き書き演習が育てるより添う看護の体験(傾聴すること、生活者として人を捉えること、生きがいや生きる希望をもつ人の理解)

④考察

臨地実習受入人数の制限や、入学してくる学生の臨地実習に向けたレディネスの低下など、一見臨地実習指導上「脅威」となるような出来事であっても、それが地域の潜在的な力、学生のもつ潜在的な力を見いだす契機となり、当該地域における自大学の存在意義や役割の自覚につながる事が確認できた。

この知見を共有することにより、地域社会で活躍できる看護職を育成することに寄与できると考える。

＊事例大学の変革の「メッセージ」を導いた「きっかけ」「工夫」は事例大学ごとに事例集としてまとめ、公表した。

(3)〔研究3〕社会の変化に即した看護学教育カリキュラム改革のための方略の解明と普及

①研究目的

看護系大学が、社会の変化に即して、臨地実習体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づいて教育を展開し評価する体制を、自大学の内部に構築する方略を解明し、普及する。全国の看護系大学への研究成果の普及を通して、最終的には、地域包括ケアシステムの構築が進む地域社会において、人々が看護を必要としている場で力を発揮できる自律的看護職の輩出、という成果を目指す。

②研究方法

- i. 〔研究1〕〔研究2〕の結果を踏まえ、専門家会議において、看護系大学が、社会の変化に即して、臨地実習体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づいて教育を展開し評価する体制を、自大学の内部に構築する方略を解明する。
- ii. 看護学教育ワークショップの開催を通じて、iの成果を普及し、各看護系大学が、社会の変化に即して、臨地実習体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づいて教育を展開し評価する体制を、自大学の内部に構築することを支援する。併せて、3か年の事業の成果を報告書にまとめ、全看護系大学へ配布する。

③結果

看護系大学が、社会の変化に即して、臨地実習体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づいて教育を展開し評価する体制を、自大学の内部に構築する方略について、以下を見出した。

方略1：個々の教員のもつ変化への対応力が、より発揮されるような体制づくり

〔研究1〕では、約半数の看護系大学が、すでに何らかの臨地実習指導体制の変更に着手しており、まだ変更していない大学についても、変更の途上もしくはその計画があり、多くの看護系大学が地域社会の変化を受け止め、従来の病棟実習中心の臨地実習指

導体制からの変革を試みている実態が明らかになった。〔研究2〕では、一見、大学にとって「脅威」となるような社会の変化や出来事であっても、教員は、その変化に柔軟に対応しながら、地域の潜在的な力、学生のもつ潜在的な力を見出していた。これらの結果より、看護系大学教員は、自覚的・無自覚的にかかわらず、社会の変化を敏感に感じ取り、その変化に対応する力を有していることがわかる。したがって、まず、個々の教員のもつこのような力が、より発揮されるような体制を構築することが、変革を推進する要であるといえるであろう。

方略2：困った状況や混乱を教育変革の契機ととらえる発想の転換

また、〔研究2〕では、「実習受入人数の制限」「学生のレディネスの変化」「地域の健康問題の顕在化」などの出来事に対して、従来通りの発想で対応しようとして一旦は困った状況に陥るものの、そこで発想の転換が起こり、「対象外ととらえていた施設に、学生の学びの可能性を見出し、新たな実習施設として開拓」「教員のあり様が学生の自己教育力を阻んでいたことに気づき、学生の将来の希望に即したカリキュラムや取得資格を見直す」「地域の健康問題解決への教員・学生が積極的に参画にすることで、新たな臨地実習の形態を見出す」などの創意工夫が生まれることが明らかになった。このことから、変化に直面した際の困った状況や混乱は、教育変革の契機であり、その状況を作り出している、地域社会も、そこに暮らす人々や医療機関も、そこに存在する大学も、学生も、教員自身も、自組織の理念の実現に向けた潜在的な力をもつ存在である、と認識できる発想の転換の重要性が示唆された。看護系大学のトップリーダーには、ぶれずに組織の理念を掲げ、困った状況や混乱の中で、各教員が、自身をとりまく状況を俯瞰し、自身や自大学の強みに気づき、その力を発揮する意志が形成されるような支援が求められる。

方略3：自大学の客観視・相対化による自大学や地域社会の潜在的な力の発見

各教員が、自身をとりまく状況を俯瞰する際に役に立つと思われるのが、〔研究2〕の成果をもとに作成した事例集である。この事例集には21の大学の多様な教育改革の実践のエッセンスが集載されている。看護系大学の置かれた条件は個々によって違うので、他大学の試みをそのまま自大学に当てはめても、うまくいくとは限らない。しかし、地域で暮らす人々の生活を支援する看護系人材の輩出、という共通の目的をもつ他大学の教育改革の実践を知るとは、自大学を客観視し、相対化することにつながる。その中で、自大学の強み、自身の強みを発見することができるであろう。

方略の普及

本研究において見出された上記のような方略を全国の看護系大学に普及する活動の一環として、令和2年度「看護学教育ワークショップ」を実施した。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、看護系大学では、年度当初から、これまで対面で行っていた教育支援方法を変える必要に迫られた。これを契機に、教育のICT化をすす

めた例もあることから、本年度のワークショップでは、看護学教育におけるICT活用の可能性をテーマとした。オンデマンド配信で行った講演、WEB会議システムを用いたグループワークの企画には、上記方略1～3を盛り込み、実施した。その結果、何等かの形態で実施された各大学の遠隔授業やICT活用の経験を共有することができ、参加者が、自大学の潜在的な力を再認識する場となった。

④考察

3年間にわたり実施してきた本研究の最終年度にあたる令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、看護系大学では、これまで対面で行っていた教育支援方法を変える必要に迫られた。特に、臨地実習は、医療機関への立ち入りが困難になり、運営自体が困難になった例も多い。まさに、社会の変化に即して、臨地実習体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づいて教育を展開し評価する必要性に、全看護系大学が直面することになった。しかし、そのような社会状況に直面しても、看護学教育の本質を見失わず、様々な工夫で教育が行われていることが確認でき、本研究で見出した方略1～3は今回の出来事においても活用可能であることがわかった。

変化に直面した際に我々が「困った」という感情を抱いたり、混乱したりするのは、これまでそれなりの成果を上げてきた既存のやり方が通用しない中でも、なんとか正しいことをしたい、と思うからであろう。本研究で明らかになった方略は、正しいことをしようとするのではなく、まず、何が起きているのかを考えること、そこから新しい発見をすること、失敗から学ぶことの重要性を示唆している。

「困りごとは、工夫の種であり、そこから知恵が生まれる」という発想で、学生の、教員自身の、そして地域に暮らす看護の対象となる人々の潜在的な力が発揮される方向で、社会の激変に即した教育改革に取り組んでいきたい。

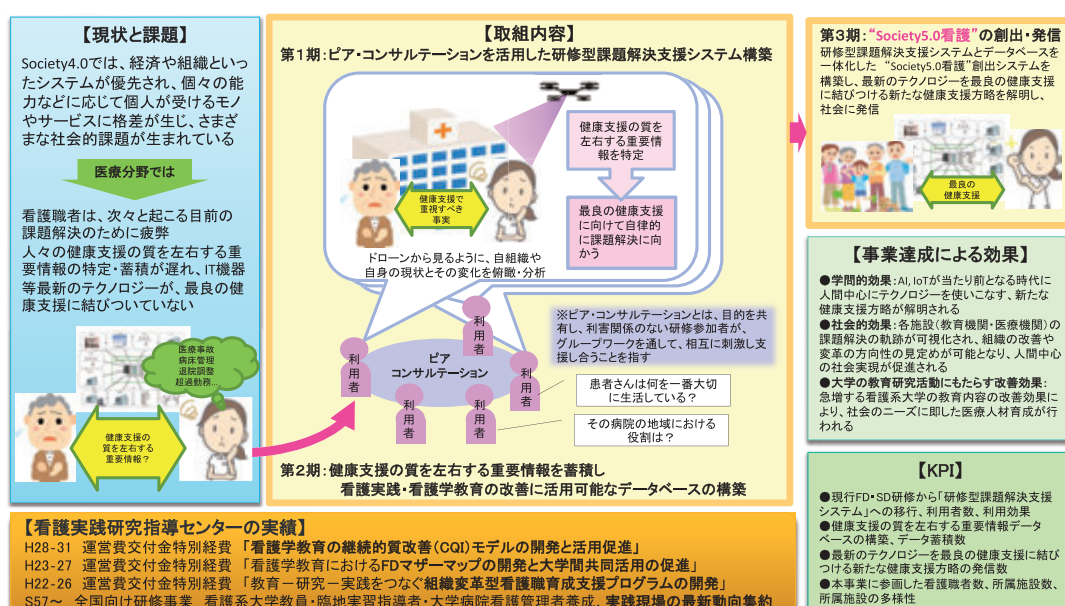
3. “Society5.0 看護” 創出拠点

ーピア・コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略ー

1) 目的と計画

本プロジェクトの目的は、医療分野におけるSociety5.0の実現に向け、最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける健康支援方略＝“Society5.0 看護”を創出・発信することである。

令和2（2020）年度は、5年間のプロジェクトの初年度であり、翌年までの2年間で行う事業フェーズ第1期：研修型課題解決支援システム構築フェーズとして、集合型研修からピア・コンサルテーション型研修への転換に必要なニーズ調査、及び課題解決型研修のプログラム構築を行った。



年度	R2(2020)年度	R3(2021)年度	R4(2022)年度	R5(2023)年度	R6(2024)年度
事業フェーズ	第1期 研修型課題解決支援システム構築フェーズ		第2期 データベース構築フェーズ		第3期 “Society5.0看護” 創出フェーズ
研修型課題解決システム構築	●現行FD・SD事業の実施 ●専門家会議による現行FD・SD事業の評価・分析 ●ピア・コンサルテーションを活用した研修型課題解決支援システム試案の作成 ●システム仕様書の策定	●研修型課題解決支援システム試案に基づくFD・SD事業の実施 ●専門家会議による評価・分析 ●研修型課題解決支援システム試案の修正 ●策定したシステム仕様書の修正	●研修型課題解決支援システムに基づくFD・SD事業の実施 ●専門家会議による評価・分析 ●必要に応じ、研修型課題解決支援システムの修正		
データベース構築	●研修参加者の課題解決プロセスにおいて特定された重要情報の収集、分析	●専門家会議による研修参加者の課題解決プロセスにおいて特定された重要情報の評価・分析 ●データベース試案の作成 ●データベース仕様書の策定	●データベース構築 ●蓄積データ数	●データベース構築 ●蓄積データ数	
“Society5.0看護”創出・発信	●研修参加者の課題解決プロセスの個別分析により、IT機器等最新のテクノロジーが、最良の健康支援に結びついていない現状の構造分析 ●研修参加者の課題解決プロセスの個別分析により、最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける健康支援方略の分析				●最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける健康支援方略の解明、発信
事業評価指標	●現行FD・SD研修から「研修型課題解決支援システム」への移行 ●「研修型課題解決支援システム」利用者数、利用効果(健康支援の質を左右する重要情報を特定し、最良の健康支援に向けて自律的に課題解決できたかを測定)				●“Society5.0看護”創出システムの構築 ●最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける健康支援方略に関する論文等の発信数

2) 課題解決型研修計画〔看護系大学教員向け・看護管理者および中堅看護者向け〕の作成

ピア・コンサルテーションを活用した研修型課題解決支援システムの構築に向け、以下のような研修計画を作成した。

【研修のコンセプト】

- その1：解決したい組織課題を持ち、看護の目的《対象者が自ら力を発揮しながら望む場所で生き、生活することを支援する》を共有している看護系大学教員（もしくは、看護管理者および中堅看護者）を対象とします。
- その2：利害関係のない研修参加者が、相互に刺激し、支援し合いながら、自組織や教員（もしくは、看護者）自身の課題を俯瞰的に見つめなおす機会を提供します。
- その3：看護の対象者・看護学生・看護教員（もしくは、スタッフ看護師・看護管理者）・所属組織・地域それぞれの力を発見し、それらが最もよく発揮された調和的な状態（ありたい姿・目標像）を思い描き、その目標に向かって課題を解決する方略を検討し、実行するプロセスを支援します。
- その4：成果とプロセスにおける教員（もしくは、看護者）自身の発展を共有する機会を提供します。
- その5：課題解決のプロセスを可視化し、次に取り組む教員（もしくは、看護者）のための教材コンテンツとして残します。

【研修期間】

受講決定より令和3年度末まで、6月開講予定とし、約9か月間。希望により年度単位での更新可能。

【研修内容】

- ・研修期間中に5回の研修参加者同士のオンライン・グループミーティング
- ・当センター教員および当センターが委嘱した支援教員によるメール、電話等による個別相談
- ・当センターがこれまでに開発したワークシートやモデル、動画コンテンツを提供

3) ピア・コンサルテーションを活用した課題解決型研修への参加ニーズ調査

作成した〔看護系大学教員向け・看護管理者および中堅看護者向け〕課題解決型研修計画案をもとに、参加ニーズ調査を実施し、対象者のニーズに合致した研修であることを検証する調査を実施した。

＜目的＞

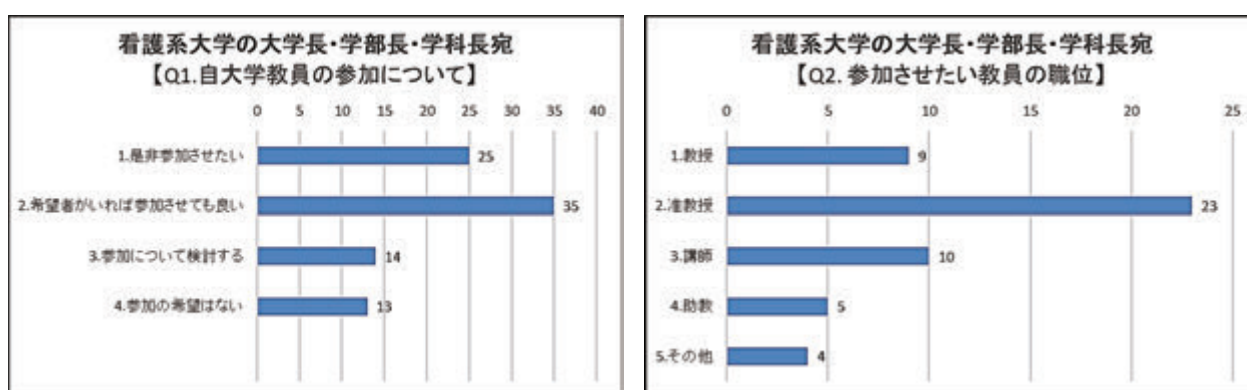
従来の集合型の研修形態を見直し、令和3年度から、参加者相互のピア・コンサルテーションを主体とした課題解決型研修への方針転換に伴い、看護系大学教員、看護管理者、中堅看護者を対象とした研修への参加ニーズを明らかにする。

<調査方法>

①290校の看護系大学の大学長・学部長・学科長宛て、及び、②250施設の看護部門の長宛てに、調査協力を依頼した。回答方法は、WEBまたはFAXを使用し回答を得た。

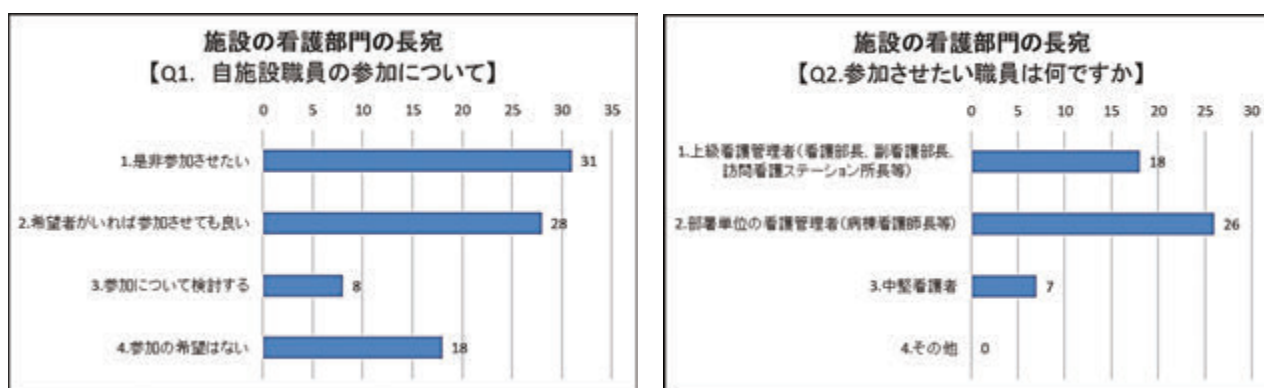
<結果>

①87校から回答が得られ、調査結果は下のグラフを参考。



個別意見として、「オンラインでの研修であり参加しやすい状況になったと思う。カリキュラム再編を迎え自学を見直すことにもつながるため参加したい」「研修に参加して、他大学の教員の話聞いて刺激を受け、自分なりの考えのもとに主体的に教育に取り組めるようになってもらいたいと希望している。そしてその成果を、自大学でも伝えていけるような取り組みを期待している」「10万円という受講料に躊躇するところが本当のところですよ」等があった。

②85施設から回答が得られ、調査結果は下のグラフを参考。



個別意見として、「『問題解決』ではなく『課題解決』であることは重要なポイントと考えます。課題を抽出するプロセスを丁寧に思考するサポートをお願いしたい」「受け身でうけるなら成果は見込めないと感じている。現状把握・分析を客観的にできる能力育成が必要であると思う。研修では、自己の課題への向き合い方、

自律して行動できる意欲が持てるようになってほしいと思う」「他施設、他分野の管理者とのコミュニケーションの機会により自施設の姿、課題に気づき見直す機会になることを希望」等があり、一施設からの参加人数を確認する質問が多かった。

4) 課題解決型研修〔看護系大学教員向け・看護管理者および中堅看護者向け〕の計画決定

ニーズ調査の結果から、課題解決型研修が看護系大学、及び、医療施設の看護部門、双方の教育ニーズに合致し、一定数の参加希望があることを確認した。個別意見から、看護系大学の教育予算が前年度決定されている点や研修システム利用料（受講料）の負担が大きいことが分かり、受講料を減額修正した。また、さらなる教育リソースの還元を目的として、看護学ワークショップで作成したオンデマンド教材を動画コンテンツを通して広く活用できるよう修正し、令和3年度から実施するプログラムを決定した。

4. F D支援

1) 看護学教育ワークショップ

《令和元年度看護学教育ワークショップ》

令和元年10月28日（月）～10月29日（火）千葉大学けやき会館にて開催。

《令和2年度看護学教育ワークショップ》

令和2年10月21日（水）～11月10日（火）講演動画（WEB配信）

令和2年10月27日（火）グループワーク（WEB会議：全プログラム参加者のみ）

詳細については、Ⅱ. 1. 3) 看護学教育ワークショップの企画・開催（7ページ）に掲載した。

2) 看護系大学 F D 企画者研修

《2019年度看護系大学F D 企画者研修》

（1）研修目的

地域包括ケアシステムの構築が進む中、次世代の看護職を育成する上で、地域のさまざまな保健医療施設と看護系大学の連携の重要性が高まっています。毎年約10校のペースで大学の新設が続く中、看護系大学教員には、変化する看護職の役割を踏まえ、看護を学問として体系的に教授する能力が強く求められています。

平成19年の大学設置基準の改正以来、各看護系大学では、すでにさまざまなファカルティ・ディベロップメント（以下F Dとする）が行われていますが、看護および看護学の特質を踏まえ、自大学の実情に見合ったF Dを体系的に企画・実施・評価することのできるF D企画者養成へのニーズが、ますます高まっております。

このような背景を踏まえ、「看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践教育指導センター」では、平成29年度から「看護系大学F D 企画者研修」を開催しております。本研修は、当センターの中核事業である「看護学教育の持続的質改善（CQI：Continuous Quality Improvement）モデルの開発と活用推進」事業の一環として開催するものであり、組織分析を通して自大学の課題を特定し、看護および看護学の特質を踏まえ、自大学の実情に見合った体系的なF Dを企画・実施・評価できるF D企画者（F Der）としての能力を身につけることを目的としています。

なお、本研修では、当センターがこれまでに開発した、「看護系大学におけるF Dマザーマップ」およびそれに関連する各種F Dコンテンツの活用方法についても学ぶことができます。教員の能力開発を通じた教育の質改善に自律的に取り組む意思のある看護系大学教員の方々のご参加をお待ちしております。

(2) 研修内容

期 間：以下の3期に分けて実施

研修Ⅰ 令和元年7月21日（日）10：00～12：00、13：00～16：00

研修Ⅱ 令和元年8月21日（水）～8月23日（金）

研修Ⅲ 令和2年3月14日（土）※新型コロナウイルス感染症の影響により中止

受講者：5大学10名（各大学2名）

受講料：1名につき 15,000円（消費税を含む）

内 容：研修プログラムを以下に示す。

研修Ⅰ 7月21日（日） 10：00～16：00

時間・場所	プログラム
10:00～10:30 ＜第二講義室＞	・センター長挨拶（和住） ・研修の趣旨説明（和住） ・参加者自己紹介
10:30～11:15 ＜第二講義室＞	【FD企画検討に活用できる当センターからの情報提供】 ○FDマザーマップの紹介（和住 15分） ・看護系大学におけるFDの現状と課題 ・FDマザーマップ活用ガイドVer. 3の紹介 ・マップを活用したFDニーズ特定の例 ○CQIモデルVer. 1とワークシートの紹介（黒田 20分） ○活用できるWEBサイト・資料の紹介（黒田 10分） ・FD支援データベース
11:30～12:00 ＜第二講義室＞	・センターHPに掲載されている活用可能な情報・資料 【大学別ワーク】 ・CQIモデルVer. 1とワークシートAを用いて、自大学・地域・社会全体の現状を俯瞰する。
12:00～13:00	昼食・休憩
13:00～15:00 ＜セミナー室1、2＞	【自大学の現状を踏まえた本質的FD課題の解明】 ・2つのグループに分かれ、参加大学間・担当教員と討議する。 ・ワークシートAを用いて自大学の現状を報告し、参加者間で多面的に分析する。 ・自大学の現状の背後にはどのようなFDニーズが潜んでいるのかについて検討する。 ・午前中の当センターからの情報提供等を参考に、自大学の現状を踏まえた本質的なFD課題の特定に向けて、他に収集すべきデータがないか検討する。 ・自大学のFDニーズを踏まえた、実行可能性・有用性のより高いFD企画するために、研修Ⅱまでに行うべきことを明らかにする。
15:00～15:10	移動・休憩
15:10～16:00 ＜第二講義室＞	【全体討議：気づきの共有、FD企画に向けたさらなる検討】 ・大学ごとの課題の整理に関する成果の共有 ・他大学との意見交換を通して、自大学のFD企画に向けた課題をさらに明確にする。（司会：和住、各担当教員参加） （1大学発表5分・質疑応答2分×5大学） ・研修Ⅲ日程調整、研修Ⅱオリエンテーション

研修Ⅱ

8月21日（水） 10：00～16：40

時間・場所	プログラム
10:00～10:30 ＜セミナー室9＞	【研修Ⅱオリエンテーション】（黒田）
10:40～15:00 ＜第二講義室＞	【看護学教育指導者研修の参加（講義聴講）】 ・「看護高等教育行政の動向」（杉田（文部科学省））
	昼食・休憩
	【看護学教育指導者研修の参加（講義聴講）】 ・「看護学教育の基礎」（和住）
15:10～16:40 ＜第二講義室＞	【看護学教育指導者研修の参加（講義聴講）】 ・「臨地実習指導の基礎」（黒田）

8月22日（木） 9：00～17：00

9:00～10:30 ＜セミナー室9＞	【研修Ⅰ後の進捗状況の報告と研修Ⅱの位置づけの明確化】 （司会：和住、各担当教員参加）
10:40～17:00 ＜第二講義室・ セミナー室1～5＞	【自組織の現状、FD企画のニーズに即して、看護学教育指導者研修に参加】 ・「自施設の現状を踏まえた指導過程のリフレクション」 （センター教員、千葉県立保健医療大学教授 河部房子 他） ・参加しない場合は、自大学の現状分析（担当：和住、野地）

※昼食・休憩 1H

8月23日（金） 9：00～17：30

9:00～16:45 ＜第二講義室・ セミナー室1～5＞	【自組織の現状、FD企画のニーズに即して、看護学教育指導者研修に参加】 ・「臨地実習場面の教材化」 （センター教員、千葉県立保健医療大学教授 河部房子 他） ・参加しない場合は、自大学の現状分析（担当：和住）
16:50～17:30 ＜セミナー室9＞	【研修Ⅱを踏まえて考える自大学の課題解決のためのFD企画】 自大学のFD課題について再検討し、自大学のFDニーズを踏まえたFD計画立案に向けた方向付けを行う。（必要に応じ各担当教員と話し合う）

研修Ⅲ（自大学での実践と個別支援・成果報告会）

研修Ⅱ終了後～随時

時間・場所	プログラム
自大学での 実践	【FD企画書の作成】 ・組織の現状分析を通して、自大学の課題およびFDニーズを特定する。 ・看護および看護学の特質を踏まえ、自大学の実情に即した、中長期的な計画を含むFD計画を立案する。 ・次年度に向けて、自大学で実行可能なFD企画書（フォーマット提示）を作成し、2月末日までに総務第二係センター研修担当宛に提出する。 ※FD企画書の作成までのプロセスは、窓口教員を通じて、当センターからの個別支援を受けることができます。

令和2年3月14日 ※新型コロナウイルス感染症の影響により中止

13:00～ 16:00	【成果報告会】※中止 ・各大学が、現状分析～FD企画書作成までの一連のプロセスについて報告する。 ・修了証書交付
-----------------	--

研修Ⅰ～Ⅲの合計時間：25時間

(3) 実施・評価

1 大学 2 名 1 組、計 5 大学 10 名の定員で受講者を募集としたところ、17 大学から応募があり、研修効果が高いと思われる 5 大学 10 名を選考して実施した。

研修Ⅰは、FD マザーマップ®等の看護学教育の体系的FDに資する情報提供の後、各大学の組織状況とそれに応じたFD企画についてディスカッションを行い、企画立案を課題とした。研修Ⅱは、看護学教育実習指導者研修へのファシリテーター参加形式の演習とし、前後に立案中のFD企画についての実施方略を含めた情報交換を行った。研修Ⅲでは計画、実施、評価の経過報告を行い、FDerとしての能力開発へのフィードバックを行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により集合型での開催を中止とし、各ファシリテーターによる個別相談・各大学へのコメントの返送を行った。



写真 FD 企画検討に活用できる
当センターからの情報提供



写真 研修Ⅰ後の進捗状況の報告と
研修Ⅱの位置づけの明確化

研修終了時に実施した、受講者による研修評価アンケート結果の概要を以下に示す。

自大学・学部・学科等の実情に即した体系的な FD を企画・実施・評価する上で、活用したことや学びになったと思われたこと

- ・自組織を分析するということが大変重要であることを学んだ。学生数も多いのでそれに追われる傾向があるが、教育の質をあげるためには各教員が組織人としての自覚と連携が必須である。
- ・今回の研修においての大きな学びは、まず、自大学の実情に見合ったFDを体系的に企画するために、自分たちの大学の課題とめざす方向性を明確にできたことであると思います。看護学教育のCQIモデルを活用し、ご指導いただいた先生方のご助言や他大学の先生方との話し合いの中で自分たちの課題と進むべき方向性が明確になりました。

本研修への参加によって、所属大学・学部・学科等の教員組織に影響があったと思われること

- ・FDマザーマップを活用したニーズ調査を実施したことで、教員が客観的な自己評価とFD上の課題認識を促すことができたと考えます。自大学は若手に限らず全ての職位でFDへの関心が高く、研究と教育、およびその両立に関してFDニーズがあることが把握できたことで、自施設の特性に応じたFD企画を検討することができました。組織の構成メンバーは変化することから、定期的な調査が組織力の調整に必要なだと考えました。

本研修に参加した他大学の教員や、他大学の状況から学んだこと

- ・大学の開設年度（または組織の発達段階）によってFDニーズが異なることを改めて認識できました。人や環境は常に変化することから、いまある資源でよりベターを目指して調整していく必要があります。「できない」理由を数えるのではなく、「今よりましにするために何ができるか」の発想が大切で、正解はなく作り上げていくものであることを再認識しました。構成員が共有すべき価値観（地域における自大学の役割等）がFDに不可欠であることも理解しました。

《令和2年度看護系大学FD企画者研修》

新型コロナウイルス感染症の影響によりやむなく中止とした。

本研修は、平成29年（2017年）度より3回実施した。毎年、5大学10名の定員を大幅に超える応募があり、看護系大学教員のニーズが高いと考えられる。受講した参加者は、CQIモデルを活用し自大学・地域・社会全体を俯瞰しつつ、参加している他大学の教員や担当教員と討議することで自大学のFDニーズを踏まえた企画を検討できていた。

これまで、同時開催の看護学教育指導者研修へのファシリテーター参加形式の演習も組み込んでいたが、参加大学のFD課題が臨地実習に関するものではない場合もあり、必須ではないと考えられた。今後は、同じようなFD企画を担当している他大学の教員との討議を中心にしながら、看護系大学教員の研修ニーズに応じていきたい。

3) 看護系大学への個別支援

センター問い合わせメール、教員への直接依頼等で、下記のような個別支援を行った。

《令和元年度》

- ・国立A大学：2019/04/23～11/14 計8回 CQIワークシートの活用可能性、FD講師派遣
- ・私立B大学：2019/05/09 計2回 FDマザーマップ活用を検討中 運用方法の問い合わせ
- ・公立C大学：2019/06/11, 2020/01/22：FDマザーマップVer. 3冊子体の送付希望
- ・私立B大学：2019/06/27 計2回 FDマザーマップ支援データベースへの登録、登録に

伴う情報管理

- ・ 公立D大学：2019/07/03 次年度の看護学教育指導者研修の開催有無、時期などの問い合わせ
- ・ 公立E大学：2019/08/26 FDマザーマップを修士論文で使用するための手続き
- ・ 私立F大学：2019/09/10 FDマザーマップ支援データベースへの登録
- ・ 私立H大学：2019/09/17 FDマザーマップ支援データベースへの登録中 連絡先の変更
- ・ 国立A大学：2019/12/17 FD研修会講師派遣 黒田准教授
- ・ 私立I大学：2019/12/23～01/23 計8回 FDでのCQIモデルの使用許諾、FDにおけるCQIモデルの使用可能性、講演依頼
- ・ 私立J大学：2019/12/23 FD研修会講師派遣 和住教授
- ・ 私立K大学：2020/01/09 FDマザーマップの使用許諾、現状分析結果の報告範囲
- ・ 私立I大学：2020/03/16予定だったが、新型コロナウイルス感染予防のため延期 FD研修会講師派遣「実習指導の見直しに向けた継続的質改善(CQI)モデルの活用」黒田准教授

《令和2年度》

- ・ 私立A大学：2020/06/23 計2回 FDマザーマップ活用を検討中 運用方法の問い合わせに対し、データベースの登録及び活用方法のご案内
- ・ 私立B大学：2020/11/28・2020/12/11 計2回 FDマザーマップ運用方法の問い合わせ、FDマザーマップのチェックファイルの不具合問い合わせに対し、不具合の修正
- ・ 私立C大学：2020/09/01 「看護学教育指導者研修」開催問い合わせに対し、今後の研修についてご案内
- ・ 公立D大学病院：2020/11/02 センター講習会受講証明書の再発行依頼に対し、証明書再発行
- ・ 私立医療法人E病院：2020/12/28 以前の「看護学教育指導者研修」の内容について問い合わせに対し回答
- ・ 私立F大学：延期中の研修講師依頼の再延期

5. SD支援

1) 国公立大学病院副看護部長研修

《2019年度 国公立大学病院副看護部長研修》

国公立大学病院副看護部長研修は、平成18（2006）年度から現在に至るまで、当センターの独自事業として実施しており、14年目を迎えた。研修開催に至った経緯は、国立大学病院看護部長会議からの要請として、大学病院の看護部長をサポートする副看護部長に対し、上級看護管理者としてマネジメント能力向上を図るための研修の必要性が求められたことに端を発する。「国公立大学病院副看護部長の看護管理研修に関わる実践的教育プログラム開発」に関する調査研究の成果を踏まえ、具体的な大学病院の副看護部長研修の実践的教育プログラムが開発され継続して開講されている。

（1）研修目的および目標

研修の目的は、わが国の医療の現状を踏まえて、大学病院の上級管理者として自施設の組織変革に向けたビジョンを明確にし、その実現に向けた計画を立案・実施・評価することを通して、上級看護管理者として必要な実践能力を高め、大学病院の看護の充実を図ることである。

研修の目標は、次の10項目である。

- ①日本の医療を取り巻く現状を理解する。
- ②大学病院における組織のあり方を理解する。
- ③人間および人間関係を構造的に把握するための知識を得る。
- ④自施設の組織変革に向けた課題を構造的に把握するための方法を知る。
- ⑤自施設の組織変革に向けたビジョンを明確にする。
- ⑥効果的な企画立案技術を身につける。
- ⑦効果的なプレゼンテーション技術を身につける。
- ⑧自施設の組織変革に向けた課題を抽出し、関連情報の分析を通して実践計画を立案できる。
- ⑨他の医療施設における組織運営の実際を知り、自施設の組織変革に役立てることができる。
- ⑩関連部門の理解と協力を得ながら立案した実践計画を展開し、その成果について事実に基づき評価することができる。

（2）研修の形態および内容

研修の対象者は、国公立大学病院副看護部長とし、副看護部長に就任後経験2年以降の者とした。定員は20名である。

研修の特徴は、実践力を高めるために、研修期間を以下の3期に分けた分散研修方式をとったことにある。集合研修は下記の日程で実施され、10ヶ月間にわたる。個別プロジェクトのコンサルテーションを含み、受講料は12万円である。

研修1：令和元年5月28日（火）～5月31日（金）4日間

研修2：令和元年9月 3日（火）～9月 6日（金）4日間

研修3：令和 2年3月 2日（月）～3月 3日（火）2日間

各研修の間の期間には、自施設においてより具体的な計画の立案や、その実施および評価を行い、その間にも、センター教員から継続した指導を得ながら、また他の研修生の大学病院を相互に訪問する他施設訪問により、比較検討しながら、実践力を高められるようシステム化されている。

研修の内容は、研修1では、医療政策、医療情報学、組織論・組織分析、教授システム学、医療倫理、病院経営、情報収集と分析に関する理論（方法論Ⅰ）などから構成され、講師は各分野の第一人者および本研究科の教員が担当した。昨年度より、地域包括ケアの推進のために日本訪問看護財団理事からの訪問看護に関する講義を実施し、時代のニーズにこたえてプログラムへと発展させた。

研修2では、情報収集と分析に関する理論（方法論Ⅱ）、課題抽出・分析演習、企画立案演習、コミュニケーション・人間関係論演習、プレゼンテーション演習等、個人ワークおよびグループワークを組み合わせ、外部研修講師およびセンター教員の指導のもと各自が実践計画の立案を行った。昨年度に引き続き、センター教員のグループワーク演習の時間を多くとり、各自の実践課題を深めた。

研修3では、実践報告会を行なった。2日間にわたり、全員が自施設で実施した実施計画に基づく実施結果および評価について学会形式で発表を行い、研修生、教員等との質疑応答により内容を深めた。

文部科学省大学病院支援室専門官による好評が行われた。報告書は、研修生の同意を得て「教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援データベース」へ登録される。2006～2019年度の累積は270件みられ、ホームページから閲覧できる貴重なデータベースとなっている。

<https://www.n.chiba-u.jp/center/training/manager.html#soshiki>

研修 1



開講式



医療政策の動向/高橋洋子専門官



病院経営/小山秀夫先生

研修 2



情報収集・分析に関する理論
/山浦晴男先生



組織改革のための企画立案
/川崎つま子先生



企画立案演習

(3) 研修の評価

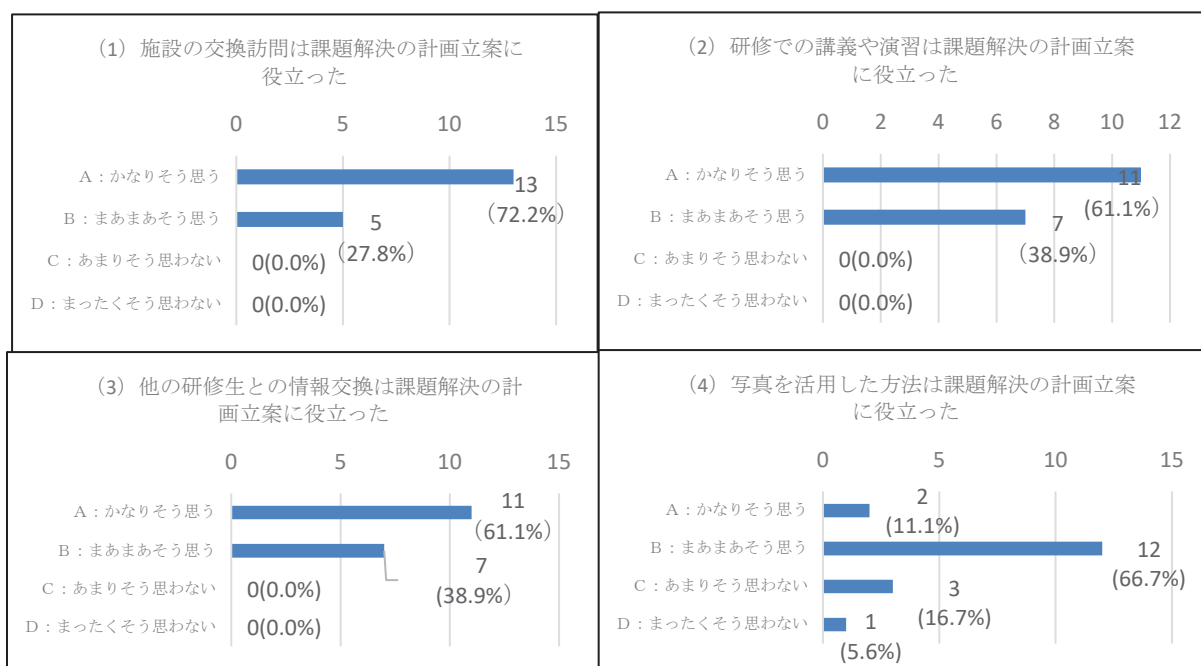
研修の全体評価を、研修3の終了後にアンケートにて実施した。アンケートは、倫理的配慮のうえ、無記名とし回答は自由意思によるものとした。

①参加者の背景

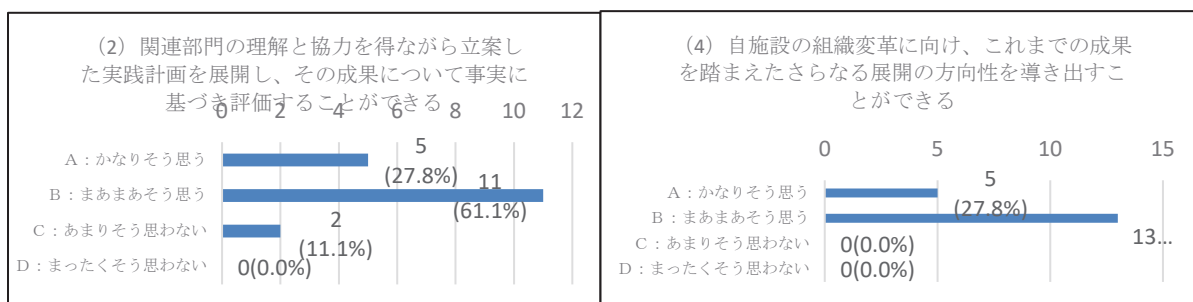
研修受講者は20名のうち、回答のあった受講者は18名であった。所属施設の設置主体は、国立12名、公立1名、私立5名であった。副看護部長経験年数は、平均2年9ヶ月であった。年齢は、40歳代3名、50歳代15名であった。受講動機は、「自ら希望」が3名、「上司にすすめられて」が15名であった。

②研修内容について

研修内容について5項目で「かなりそう思う」～「全くそう思わない」の4段階により自己評価を行った。



③研修目標の達成について



研修内容の評価では、役に立った項目は、「情報交換」「実践報告会」「他施設訪問」「講義演習」等であった。目標達成状況は、「かなりそう思う」と「まあまあそう思う」を合わせると、8割以上を示していた。全国から集まった研修生との情報交換や他施設訪問、および実践報告書の内容については高い評価が示された。

《自由回答欄から》

組織変革に向けた実践報告会の立案時や展開時に必要な支援は、また自施設内での支援体制、教員の支援体制について

- ・研修Ⅱで他施設の研修生とのグループディスカッションがとても役立ちました。自分にはない発想やアイデア、問題点などを発見するアドバイスをたくさん頂き、その後のレポートにおいても吉本先生からの的確なコメントを頂き、次のステップに進むことが出来たと思います。
- ・計画立案についてのGWは、質疑で多角的視点がえられたため、必要な支援であった。組織内で課題の共有をすることで取組みが進展した。自ら発信することで支援体制もつながる。
- ・演習において、自分の計画についてグループメンバーに説明し、計画の論理性や評価方法、評価指標などを検討できた。自施設にいと、実践ありきで進めることが、もう一度何のために、どのように実践し、どのように評価するのかを考えられることが必要な支援だと思います。
- ・研修での講義、演習の積み重ねによって自分の課題が明確になってきたと思います。自施設においても上司や他職種の協力により計画が進められました。
- ・教員の先生方には手厚いサポートをいただけたと思います。受講生である私側の問題で実践経過の中でやりとりできる時間がとれなかったことが残念であり申し訳なかったです。施設内では、課題が組織ニーズと一致したこともあり、他部門との連携協力を得ながらすすめることができました。
- ・自分自身の役割と課題設定が漠然としており、どう課題をしばっていくのか、本当に何を行うことが組織変革となり得るのか難しく感じた。焦点をしばること、明確にすることが教員の方の指導や同じグループの方の意見で少しずつできたように思う。大きな課題にしてしまったので、もう少し具体的な取り組みとなるような方向性をだせ

るとよかった。

- ・グループメンバーからその施設の状況を聞くことや、計画についてのアドバイスをもらったことが計画立案時にとても参考になった。実践計画書を提出した際に、担当教員から指導していただき追加修正できた。継続的に見てもらえているという安心感につながった。
- ・お世話になりました。写真を活用した課題解決方法については、事前の分析が充分にできていないままとりかかったので起きている事象の関係性や原因を捉える事ができませんでした。自分自身の準備不足が原因だと思います。研修Ⅱのグループ別にディスカッションした事はとても勉強になりました。野地先生のアドバイスが視野を広げて下さいました。
- ・師長として部署の変革を行うのではなく、副部長としてどう人を動かしていくのかということを学びました。この点については必要な支援であったと思います。またグループワークの中では、現状の把握分析の重要性を学びました。

【研修Ⅱ】終了後から【研修Ⅲ】までの間に、学んだこと、考えたこと、感じたこと

- ・今回の研修における課題は、今の自分にとってはとても大きなプレッシャーであり重責であったため、責務を果たせるのかかなり不安でした。しかし上司や同僚、部下の支えと協力もあり、1つ1つの問題を解決していく中で交渉力やコミュニケーション能力を考える良い機会となりました。また何より他部門の方々と一緒にやり遂げていく喜びや達成感も感じる事が出来、とてもよい経験になったと思います。4月の時点とは違う“業務担当副部長”として成長できたのではないかと自負しています。
- ・日々の仕事の中で、常に気にとめ、追い風を感じる必要があると思いました。途中、医師との考え方の相違により、計画を中止することを考えた時期もありましたが、方針や計画を伝え、周りの反応をみながら進めていくことで目標を達成することができました。管理というのは日々の小さな決断の積み重ねと感じていますが、状況に合わせて柔軟に計画を修正することが重要だと思います。今年度実践した内容を今後につなげていきたいと思っています。
- ・一番の学びは「他施設見学」でした。こちらは大変貴重な機会であったと思う。また、問題解決は日々の業務で実践しているが、紙面に計画を記載し、実施することで、自身の取り組む目的や目標を明確にすることができた。加えて、実際に行ったことを紙面に記載し、評価する作業は通常業務では、なかなか実践できていなかったため、大変よい機会となった。
- ・自分のテーマは特定行為研修の実施であった。計画を実践していく中で、グループワークや写真を活用した演習をすることで、看護の質を上げるための研修実施に近づける計画を実施することができた。自分で写真を整理したり、グループメンバーや教員の意見を参考にすることで大切な計画を実施できた。他施設見学では、他施設と自施設の状況の違いを確認した。そのことで、地域のニーズの違いや他職種の理解、協力体制の違い点、同じ点がわかり、今後の活動で何に力を入れると良いのか考えること

ができた。

- ・看護部を動かし変革していくことは、方向性と計画性を明確にしていけば時間はかかっても組織力もあり、できていく。病院の医師を変革するのには看護実践や日々の関係性でかわることもよくわかった。ACPは病院として取り組む課題ではあるが、目に見える形がなく、啓発も研修や事例検討を通して行うことが主となる。地道な活動となってしまう、大きく何かを動かすことには至らなかった。組織を動かすこと、今行うことのメリット、デメリットなどきちんと分析し、他者に伝えることなど講義では学んでいても実践するのは難しいと感じた。行動計画がきちんとしていないと流されてしまう。計画が大事だとあらためて感じた。
- ・研修ⅡからⅢまでは期間が長いため、計画実行が滞ってしまう部分もあった。他施設見学に行くことは計画立案・修正に役立ったため、11月に計画して良かったと思う。他施設見学を決めるにあたり、自分のテーマに沿った施設を見つけるのが難しいと感じた。
- ・看護職以外との連携調整に時間を要し、必要なデータ収集や思い描く資料が作成できないまま時間だけが経過した状況です。他部門を巻き込むことの難しさを感じました。
- ・自分の立場が現場での指導も行っているため、どうしても熱が入れば入る程視野が狭くなり、看護部管理室の副部長としての全体を見渡す事ができなくなる傾向がある。課題分析をしっかりと行わないと、課題解決のために誰を対象にどう取り組むかがずれてくるという事を改めて知りました。またそれを防止するためにも他の副部長や部長と普段からこまめに相談を行っておく事も大切だと感じました。（普段看護部管理室ではない所で業務を行っているため）
- ・研修Ⅱで、意見をいただいた内容をもとに計画を修正し、実践につなげた。私が取組んだ転倒転落防止活動については院内にワーキングや委員会があるため活動を進めやすかったのではないかと考える。看護の本質であるその人らしさを大切にするという点について再認識するとともに、当院での課題も浮きぼりになったのではないかと思います。JCI受審により患者安全の文化は定着しつつあるが、今後は患者の個別性や尊厳を大切に作る組織を作っていきたいと思う。
- ・他施設訪問はもっと早くに行えばよかったと感じました。取り組み方や展開の方法など、自己の活動に大きな影響がありました。ただ訪問は相手の事情もあり時期的に秋～年末は厳しいのかなとも思いました。

副看護部長研修全体について、感想やご意見

- ・大学病院の副看護部長2～3年目という同じ背景の方々と知り合いになれば、情報交換ができたことは有意義でした。研修Ⅲが中止となり、皆さんの実践報告が聞けず残念でしたが、今後も何かあれば連絡を取りたいと思います。ご指導いただいた先生方、ありがとうございました。
- ・研修での学びは勿論のこと、研修受講者全員とネットワークを構築することができ、

様々な意見交換をはじめ情報交換をすることができた。今後もこのネットワークを継続し交流を図っていきたい。

- ・他施設の参加者と交流ができた。丁度良い人数でした。千葉大学医学部附属病院の見学についても、お忙しい中、丁寧に説明をしていただき感謝します。
- ・漠然としていた課題が研修を進めていく中で焦点が絞られてきました。1年という短い期間でしたが研修を受けたことで、課題解決につなげて向かって行けたと思います。大変学びの多い研修となりました。ありがとうございました。
- ・病院の利益、看護師という一番大きな組織をどう生かしていくか、加算の考え方、など、他の施設の方々の考え方が学びとなった。働くということ、お金の動き、生産性をあげるためにどうするかも管理者として考えていく必要がある。それでも、何より人、そこで働く人が大切にされ、意欲をもって働ける環境を整え看護の質、患者さんのためによりよいケアを考えていくことが大事だと思いました。管理は大変で難しいけれど、人を幸せにするために必要なことだと感じました。3月の発表が中止となり残念でしたが、学ぶ機会をいただきましたことに感謝します。
- ・研修が講義・ワーク・発表と3部構成になっているのが良いと感じた。今回、発表が中止となったことは非常に残念であるが、担当教員からコメントがいただけたのが良かった（後日メールで）。全国から20名もの副看護部長が集まり、研修を共に受講し情報交換ができ繋がりが持てたことはとても有意義であった。初日に黄色いファイルを準備していただいた為、資料の整理がしやすく助かりました。
- ・組織変革する為の戦略計画の重要性や誰をどの様に巻き込むことで達成することができるのか、今回の研修で一番感じ学びました。今までの病棟運営とは違い、対象とするものの大きさや実践方法などに違いがあると感じました。自分の立場を考え行動することが必要であると改めて学ぶこともできました。講義では新しい知識も得ることができました。他施設の副看護部長との情報交換の中からも学ぶことができこれからも続けていきたいと思っています。
- ・自身の学びだけでなく、他施設の副部長とのネットワークが持てたことも大きなことでした。千葉大学の先生方から支援がある研修はとても貴重な研修だと思います。
- ・他施設の副看護部長と共に学ぶ機会を得ることができ、様々な課題について取り組まれていることを肌で感じる事ができた。中でも、人材確保や人材育成、地域包括ケアにおける大学病院が取り組むべき問題など共通する課題を持つ施設との情報共有も図ることができた。
- ・グループワークは大変有意義でした。他院の現状や他者の考えを聞くことにより自分の考えを再考することができました。残念なことに発表の機会はありませんでしたが、先生から、メンバー全員にコメントをいただき、メンバーの取り組み状況も把握でき自分自身のまとめの不足している点も知る機会となりました。大変ありがとうございました。
- ・一番大きかったのは全国の副看護部長さんたちとネットワークができたことです。メール等で相談もさせてもらえて参加して本当によかったと思います。

(4) 2019年度国公立大学病院副看護部長研修 時間割

[研修Ⅰ]

	I 8:50～10:20	II 10:30～12:00	III 12:50～14:20	IV 14:30～16:00	V 16:10～17:40	
5月 28日 (火)	10:00～ ※開講式 オリエンテーション		組織論・組織分析 慶應義塾大学名誉教授 SFC フォーラム代表理事 花田光世		医療政策の動向 文部科学省 高等教育医学教育課 大学病院支援室専門官 高橋洋子	意見 交換 会
5月 29日 (水)	医療情報学 京都大学大学院医学研究科 教授 中山健夫		医療安全 日本医療機能 評価機構 常務理事 橋本廸生	看護管理論(1) 公益財団法人 日本訪問看護財団 常務理事 佐藤美穂子	医療倫理 千葉大学大学院 看護学研究科 教授 手島恵	
5月 30日 (木)	成人教育と教授システム学 日本 BLS 協会 代表 青木太郎		病院経営(財務管理) 兵庫県立大学大学院経営研究科 特任教授 小山秀夫		看護管理論(2) NTT 東日本関東病院 副看護部長 木下佳子	
5月 31日 (金)	組織論・組織分析/ 公的病院における エント・オブ・ライフ 千葉大学大学院 看護学研究科附属 看護実践 研究指導センター 教授 野地有子	情報収集・分析に関する理論 (方法論Ⅰ) 情報工房 代表 山浦晴男		組織変革の ための評価 (看護評価学) 藍野大学学長 日本看護評価学 会理事長 菅田勝也	研修Ⅱに向けた オリエンテーション (～17:00 予定)	

[研修Ⅱ]

	I 8:50～10:20	II 10:30～12:00	III 12:50～14:20	IV 14:30～16:00	V 16:10～17:40
9月 3日 (火)	10:20 集合 研修Ⅱ オリエンテーション 《第二講義室》	プレゼンテーション演習 千葉大学大学院看護学研究科 教授 野地有子 《第二講義室》		企画立案演習 千葉大学大学院 看護学研究科 教員 (吉本、野地、和住、 黒田、銭) 《第二講義室・ セミナー室1～3.5》	医学部附属病院 見学研修 (希望者) 《医学部附属病院》
9月 4日 (水)	情報収集・分析に関する理論 (方法論Ⅱ) 情報工房 代表 山浦晴夫 《第二講義室》		課題抽出・分析演習 情報工房 代表 山浦晴夫 《第二講義室》		
9月 5日 (木)	組織変革のための 企画立案 東京医科歯科大学 医学部附属病院 副院長・看護部長 川崎つま子 《第二講義室》	コミュニケーション ・人間関係論演習 千葉大学大学院 看護学研究科 教授 野地有子 《第二講義室》	企画立案演習 千葉大学大学院 看護学研究科 教員 (吉本、野地、和住、黒田、銭) 《第二講義室・セミナー室1～3.5》		
9月 6日 (金)	企画立案演習 千葉大学大学院看護学研究科 教員 (吉本、野地、和住、黒田、銭) 《第二講義室・セミナー室1～3.5》			研修Ⅲに向けた オリエンテーション (～15:00 予定)	

[研修Ⅲ]

新型コロナウイルス感染症の影響により集合型での開催を中止とし、実践報告会抄録の郵送を行った。

《令和２年度国公立大学病院副看護部長研修》

１４名の受講者を決定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により実施することが出来なかった。

2) 看護学教育指導者研修

《2019年度看護学教育指導者研修》

(1) 研修目的

地域包括ケアシステムの構築が進む中、次世代の看護職を育成する上で、地域のさまざまな保健医療施設と看護系大学の連携の重要性が益々高まっています。本研修は、看護学生の看護実践を直接指導する臨地実習施設所属の看護職が、社会の変化に即した看護学教育を行う上で必要な視点を養い、臨地実習施設と看護系大学の更なる連携・協働により、社会が求める次世代看護職の育成に資することを目的とします。具体的な目標は以下の通りです。

- 看護学教育の本質および学生の看護実践能力を評価する視点について理解する
- 看護学教育における臨地実習の位置づけや目的および実習指導の基本について理解する
- 学生指導の基盤となる成人教育の基礎について理解する
- 看護高等教育行政・政策の最新の動向を理解する
- 受講者自身が現在直面している実習指導上の課題を広い視野でとらえて考察できる
- 看護学生の臨地実習体験を教材として活用するための視点と方法について、具体的な事例をもとに理解する

(2) 研修期間・研修内容

期 間：令和元年8月21日（水）～8月23日（金） 3日間

内 容：時間割を【表1】に示す。

受講者：45名

受講料：30,000 円（消費税を含む）

【表1】 2019年度 看護教育指導者研修 時間割

日 時	I	II	III	IV
	9:00～10:30	10:40～12:10	13:30～15:00	15:10～16:40
8月21日 (水)	10:00～ 看護学教育 指導者研修 開講式 オリエンテーション	看護学教育の 基礎 千葉大学大学院 看護学研究科 教授 和住淑子	臨地実習指導の 基礎 千葉大学大学院 看護学研究科 准教授 黒田久美子	看護高等教育 行政の動向 文部科学省 高等教育医学教育課 看護教育専門官 杉田由加里
8月22日 (木)	看護における 成人教育の在り方 埼玉県立大学 保健医療福祉学 看護学科 教授 鈴木康美	自組織の現状を踏まえた指導過程のリフレクション (17:00 終了) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教員 千葉県立保健医療大学教授 河部房子 他		
8月23日 (金)	臨地実習場面の教材化 (16:45 終了) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教員 千葉県立保健医療大学教授 河部房子 他			17:00～ 開講式

(3) 実施・評価

初日は看護高等教育行政の動向、看護学教育の基礎、臨地実習指導の基礎、看護高等教育行政の動向を学び、2日目からはグループワークを行い、上手くいかなかった教育指導実践の事例をいかに教育のチャンスとして教材にしていくかをグループで検討、その検討結果を使ってロールプレイングを行いながら学びを深めた。

今年度は地域包括支援センターや訪問看護ステーションからの参加者があった。地域包括ケアシステムの構築に伴い、今後はさらに医療機関以外での臨地実習が増加することが予測される。多様な臨地実習施設の指導者にとっても、本プログラムのニーズがあることがわかった。

また、「看護系大学FD企画者研修」の参加者にもグループワークに参加してもらった。教育指導実践の事例と一緒に検討し、ロールプレイも学生役や指導者役を担ってもらうことで、活発な意見交換ができ、臨地実習施設と看護系大学の更なる連携・協働の機会となっていた。



講義の様子



自組織の現状を踏まえた指導過程のリフレクション

研修終了時に実施した、受講者による研修評価アンケート結果の概要を以下に示す。

- ・ 43名からアンケートを回収した。
- ・ 受講者の職位は、スタッフ看護師19名、副師長（主任）17名、看護師長1名、その他3名、未回答3名であった。
- ・ 年齢構成は、20代6名、30代22名、40代14名、50代1名であった。
- ・ 項目別の評価結果は、図1に示した。ほとんどの項目で、「かなりそうである」、「まあまあそうである」の合計が、7割以上であった。

看護学教育指導者研修

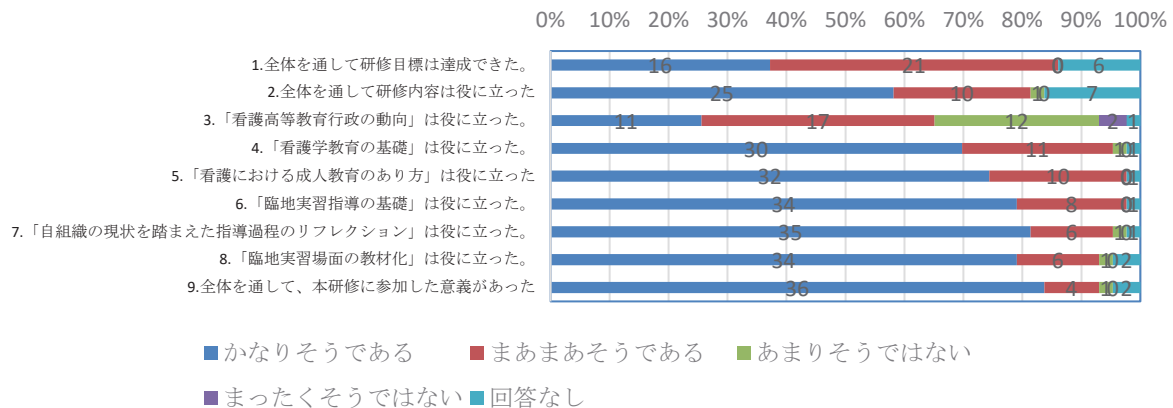


図1 終了時の研修評価アンケート結果

自由記載欄の主な記述は以下のとおりである。

- ・日々流れる業務の中でゆっくり学生指導について考えることはなかった。院内にプロジェクトはあるが、現場での困りを述べることのみで終わっている。今回指導過程のリフレクションと実習場面の教材化を学び、自身では気が付けなかった発見もあり多いに学びとなった。今後活かせるよう、そして実践にも移せるよう行動していきたい。
- ・今まで臨床指導を行うにあたり、なやんでいたことや困難に思っていたことを共有する良い機会になったと思います。指導を行う際に、大事なことをあれもこれもと伝えようとして本当に大切なことを伝えられていなかったのではないかと自身を振り返る良い機会になったと思います。
- ・学生指導についてこんなにも深く考える、学ぶ機会がなかったので3日間じっくりと向き合う事ができて当施設での学生指導のあり方を考えさせられた。1つの指導場面から様々な問題点があつて、そこから指導者も学ぶ事が多いのだと気がついた。また、様々な施設の同じような立場の方々と研修を行い、場所は違うが悩みは同じだったり情報共有ができ新たな気づきができた。
- ・今回の研修に参加するまで、学生指導を苦痛に感じている部分もありました。今回のグループワークにおいて各病院の現状や同じような悩みを持ちつつ指導している事を知れて心強く感じました。また、学生へのアプローチの仕方などグループワーク内で新たな発見も多く、学生指導、面白いなと今終えて思います。9月から実習がまた始まるので病院に戻り今回の学びを還元したいと思います。

《令和2年度看護学教育指導者研修》

新型コロナウイルス感染症の影響によりやむなく中止とした。

(4) 今後に向けて

本研修は、全国からの参加があり、定期的に参加者の応募をしている医療機関等が複数あり、ニーズが高い研修の一つである。

今年度の受講生からは、「ロールプレイを通して一度に多くのことを指導するのは難しいと感じ、一つにした」「自分自身の看護観がないと、指導にぶれが生じる」「指導者と一緒に学んでいく姿勢が大事」「グループワークが楽しかった」等の意見があった。演習を主体とした本研修では、看護教育に関する基礎的知識を得てから、受講者自身が振り返った経験をグループメンバーで共有することにより、多くの気づきや学びを得ている。様々な看護実践場面を適切に振り返り、教材化できるようになることは、臨地実習指導者としての力量を高める上で有用と考える。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で実施できなかったが、ICTを活用したシステムやサービスが普及してきたため、オンラインによる講義や演習を組み合わせながら、より効果的に実施できる方法を考え、全国の参加希望者のニーズに応えたい。

3) 看護管理者研修

《2019年度看護管理者研修》

(1) 研修目的

近年の医療制度改革では、住み慣れた地域で生活できるための医療への転換を目指して、病床機能分化が進められています。特に、急性期病院では、限られた在院日数で効果的に医療を提供し、速やかに地域での生活に戻ることができるよう支援する役割が求められています。本研修は、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターが、看護学教育研究共同利用拠点としてこれまでに構築してきた教育-研究-実践をつなぐ知見・ネットワークを最大限に活用し、全国の看護師長等現場の看護に責任を持つ職位にある急性期病院の看護管理者を対象として開催します。本研修を通じ、医療提供体制の変化に対応した複雑かつ重要な課題を組織的に解決する能力を開発し、看護本来の役割発揮を支援することを目的としています。具体的な目標は以下です。

- 看護行政・政策の最新の動向を理解する
- 医療経済に関する最新の動向を理解する
- 地域包括ケアシステムにおける急性期病院の役割について理解する
- 個人と組織のニーズの調和に焦点を当てた看護実践現場における人材育成について理解する
- 看護管理におけるデータ・文献の活用について理解する
- 看護界においてリーダー的役割を果たしている有識者の経験や知識に触れ、今後の看護職の役割発揮の方向性について考察できる
- 受講者自身が現在直面している看護管理上の課題を広い視野でとらえて考察し、課題解決のために必要な組織変革につながる実践計画を立案できる

(2) 研修内容

期 間：令和元年9月25日（水）～9月27日（金） 3日間

内 容：時間割を【表1】に示す。

受講者数：94名

受講料：30,000円（消費税を含む）

【表1】2019年度 看護管理者研修時間割

	9:00 ～ 9:20	I	II	12:30 ～13:40		III	IV
		9:20～10:50	11:00～12:30			13:40～15:10	15:20～16:50
9月 25日 (水)		10:30～ 看護管理者研修 開講式 オリエンテーション	急性期病院をめぐる 医療政策の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 大学病院支援室専門官 高橋洋子	休 憩	学 び の 確 認 と 共 有	医療経営管理 奈良県立医科大学 教授 今村知明	看護行政の動向 厚生労働省 医政局看護課 課長補佐 奥田清子
9月 26日 (木)	学 び の 確 認 と 共 有	看護管理における 研究の活用 慶應義塾大学 看護医療学部教授 深堀浩樹	特別講義 今、日本の看護職に 求められること 東京医療保健大学 副学長 坂本すが	休 憩	学 び の 確 認 と 共 有	地域包括ケアシステム における急性期病院の 役割 在宅ケア移行支援 研究所 宇都宮宏子オフィス 宇都宮宏子	看護管理における データ活用の方法 静岡大学大学院 創造科学技術研究部 特任教授 小林美亜
9月 27日 (金)	学 び の 確 認 と 共 有	看護管理実践のリフレクション (演習) 千葉大学大学院 看護学研究科准教授 黒田久美子		休 憩	学 び の 確 認 と 共 有	人材育成と キャリア開発 千葉大学大学院 看護学研究科教授 和住淑子	15:15～ 看護管理者研修 閉講式 (15:45終了予定)

(3) 実施・評価

今年度も昨年度と同様に、「ゐのはな記念講堂」と「講義・実習室」を研修会場として使用した。また、自施設の状況や受講者自身の問題意識を重ね合わせて講義を聞くことができるよう、各講義の前後に学びの共有と確認の時間を設け、参加者同士の交流の時間を設定した。

総勢9名の多彩な講師陣で構成された講義では、少子高齢社会における人々の健康と生活の充実のために、いかに現場の看護管理者の役割発揮が重要であるかを再認識するとともに、全国の看護管理者間の良いネットワークの形成ができた。



写真 講義の様子



写真 演習の様子

研修終了時に実施した、受講者による研修評価アンケート結果の概要を以下に示す。

- ・ 90名からアンケートを回収した。
- ・ 受講者の年齢構成は、30代4名、40代44名、50代40名、無回答2名であった。
- ・ 項目別の評価結果は、図1に示した。全ての項目で、「かなりそうである」、「まあまあそうである」の合計が、8割以上であり、特に「特別講義」の評価が高かった。

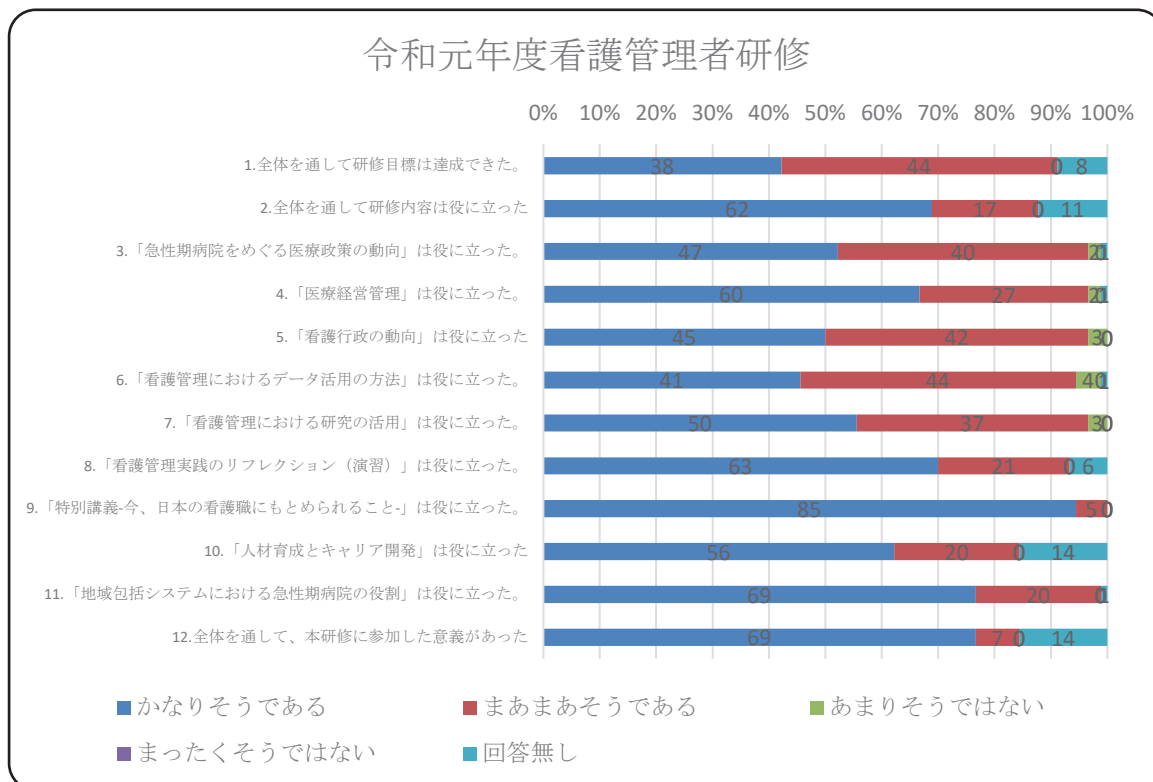


図1 終了時の研修評価アンケート結果

自由記載欄の主な記述は以下のとおりである。

- ・他施設・病院の状況もみえた。管理者のもつべき視点を学び、今後この学びをどうやって活かすかがカギとなっていると感じている。
- ・社会の動向に目を向け、自部署、自分の病院の役割について今後整理し、先頭をきってまとめられる管理者になりたいと思いました。
- ・看護について熱く語っている先生に久しぶりに会い少しモチベーションが上がった。
- ・これまでも何度か同じ様な研修は受けたが、急性期病院からの視点で考える機会はまだ外部の研修ではなかったので大変興味深く学ぶことができました。リフレクションを通じて、他施設の現状や問題を知り、共感したり、意見交換をすることができ、問題解決への良い気づきの場となりました。
- ・自施設の自部署の現状について、行政の動向や他施設の取り組みを聞くことで俯瞰してみても考える機会になりました。特にリフレクションでは部署・自己の課題について整理し、講義や他メンバーの意見を聞くことで本質に気づき、「明日からがんばろう」という意欲につながりました。
- ・最初1日目は行政についてで、難しいなと思っていたが3日間通してみると行政について知っておくことで2日目・3日目の講義がより理解できると思った。事例も数多くあり、とても心に残った。対話・患者や家族の気持ち、生ききるなどの言葉が心に残った。患者が生ききるために看護職に求められていることを学んだ。ビジョンをもちスタッフにビジョンを伝え対話していきます！

《令和2年度看護管理者研修》

新型コロナウイルス感染症の影響によりやむなく中止とした。

(4) 今後に向けて

研修評価アンケートに、「最初の1日目は行政についての講義で、難しいなと思っていたが3日間通してみると、行政について知っておくことで2日目・3日目の講義がより理解できると思った。」「リフレクションでは部署・自己の課題について整理し、講義や他のメンバーの意見を聞くことで本質に気づいた。」「リフレクションを通じて、他施設の現状や問題を知り、共感したり意見交換をしたりすることができ、気づきの場となった。」といった意見があった。講義と演習を取りいれている本研修では、管理者としての看護行政・政策、医療経済等の情報や知識を学び、受講者自身が直面している看護管理上の課題解決のために必要な組織変革につながる実践計画を立案している。研修会にて他の病院に勤務する同じ立場の看護管理者と意見交換できることは貴重な機会であり、課題解決の実践計画立案に有用であると考えます。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で実施できなかったが、ICTを活用したシステムやサービスが普及してきたため、オンラインによる講義や演習を組み合わせながら、より効果的に実施できる方法を考えたい。

6. 共同研究

1) 共同研究1：教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える 看護学 教員向けFDコンテンツの開発と評価

(1) 研究組織

山本 真実	(岐阜県立看護大学・准教授) 令和元年度 (浜松医科大学・准教授) 令和2年度
高島 尚美	(関東学院大学看護学部・教授)
飯岡 由紀子	(埼玉県立大学・教授)
和住 淑子	(看護実践研究指導センター・教授)
黒田 久美子	(看護実践研究指導センター・准教授)

(2) 研究概要および研究経過

①「看護学教育におけるFDマザーマップ®」とは

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターは、平成23～27年度にかけて、「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進」プロジェクトに取り組み、「看護学教育におけるFDマザーマップ®」を完成させた。「看護学教育におけるFDマザーマップ®」は、看護学教育の特質を踏まえた看護系大学教員に求められる能力が、〔基盤マップ〕〔教育マップ〕〔研究マップ〕〔社会貢献マップ〕〔運営マップ〕の5つのマップに体系的に配置され、教員の能力レベルは、「レベルⅠ：知る」「レベルⅡ：自立してできる」「レベルⅢ：支援・指導、拡大できる」という3段階に区分されている。

(<http://fd.np-portal.com/>)

②FDコンテンツの開発

「看護学教育におけるFDマザーマップ®」を実際に活用した大学からは「必要とされる能力が体系的にまとまっていてよい」「自大学のFDを見直す良い機会になる」等の評価を得た一方で、「実際にFDマザーマップ®をどのように活用すればよいのか」「具体的にはどのようなFD企画を立案すればよいのか」といった戸惑いの声も聞かれた。FDマザーマップ®の開発と同時に作成した「看護学教育におけるFDマザーマップ®活用ガイド」ではFDマザーマップ®の活用例を紹介してきたが、看護学教育の現場では、より具体的、実践的なFDツールが求められており、FDコンテンツ開発の必要があることがわかった。

③開発したFDコンテンツ

本プロジェクトでは、看護系大学教員として、日々の学生との関わりの中で、どのように対応したらよいか、困る場面に着目して開発した。一般に、このような状況に直面した場合、その対応は、教員個人に任されているが、教員間で対応が食い

違ったり、後から組織的な問題に発展したりすることもある。つまり、対応に困る状況に対する個々の教員の反応は、その教員個人のもつ教育観の現われであり、また、それだけではなく、組織のあり方にも影響を受けているといえる。

そこで、本FDコンテンツは、日々の学生との関わりの中で、教員が対応に困る典型的な場面を10事例とりあげ、教員として、組織として、どのような対応が考えられるか、その根拠は何か、等を教員間で自由に話し合えることを目的に開発した。この成果は、平成28年度に報告書としてまとめ、全国の看護系大学及び関係機関に配布した。

〔報告書〕看護学教育研究共同利用拠点、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター、「教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える看護学教員向けFDコンテンツ開発と評価」プロジェクト研究共同研究員、和住淑子、黒田久美子、高島直美、飯岡由紀子、山本真実：「看護学教育におけるFDマザーマップ®」対応型FDコンテンツ開発報告書、教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える－学生への対応に困った10事例を通して－、1～48、2017年3月

④開発したFDコンテンツの活用状況

平成29、30年度の2年間にわたり、実際に本FDコンテンツを活用してFDを実施した看護系大学が1校あった。具体的な活用状況は、事例集から大学の実情に即した事例を選択し、事例の提示する問題状況に対する教員としての自身の考えや対応について、グループ討議を行う、というものであった。企画者らが実施した事後評価アンケートでは、参加者から良い評価が得られていた。

⑤本コンテンツに関する今後の研究計画の検討

本FDコンテンツを活用してFDを実施した看護系大学の実績を踏まえ、平成30年度は、本FDコンテンツに関する今後の研究の方向性を検討した。FD企画者は、自大学の実情に即して、研修効果の期待できそうな事例を選んで活用していたが、組織の状況を踏まえると、効果的なFDとするためには、組織の実情に即した運用方法への支援が必要であることがわかった。そこで、次年度は、FD企画者に対し、FD運営に関して配慮したことなどについてインタビューを行い、本コンテンツの運用に関する研究計画を立案することとした。

2) 共同研究2：看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する 実証研究 《令和元年度》

(1) 研究組織

共同研究員	大友 英子	(東京大学病院・国際診療部部長)
	西山 正恵	(杏林大学保健学部・教授)
	池袋 昌子	(茨城キリスト教大学看護学部・教授)
	坂元 眞奈美	(鹿児島大学病院・副看護部長)
	相原 綾子	(千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員)
	炭谷 大輔	(千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員)
	近藤 麻理	(関西医科大学看護学部・教授)
	小寺 さやか	(神戸大学大学院保健学研究科国際保健学領域・准教授)
	溝部 昌子	(西南女学院大学保健福祉学部・教授)
	浜崎 美子	(康生会武田病院・看護管理者)
	別府 佳代子	(国立国際医療研究センター・看護コーディネーター)
	小粥 美香	(東京大学医科学研究所附属病院・看護師長)
	水野 雅子	(日本医科大学千葉北総病院・看護師長)
	橋爪 朋子	(福岡赤十字病院・看護師長)
	野地 有子	(千葉大学大学院看護学研究科・教授)

(2) 研究の概要

Society5.0が推進される中、様々な価値観の変換と多様性（ダイバーシティ）に直面している社会において、看護職の役割は人々のつながりを通して益々重要になってきている。本共同研究班は、新しい看護提供システムの研究と教育から、患者、家族、看護職と医療に携わる人々の安全と、健康課題に向き合う日々の看護実践の質の向上の視点から、「看護職の異文化対応能力」について取り組んでいる。ベッドサイドの外国人対応で困っている看護職の課題解決に役に立つ「看護職の異文化対応能力」を高めるシステム構築と教育プログラム開発が急がれる。

本年度の共同研究の概要は、わが国唯一の看護学教育研究共同利用拠点である千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターが、国内外の教育研究者と共に実施する共同研究の課題テーマ「看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究」のもと、nGlobe研修、ベーシックコース、アドバンスコース、エキスパートコースの3種類（4回）の研修を企画実施した。ドイツのシャリテ医科大学病院における、医療職の多文化能力トレーニング（IPIKA:IPIKA - InterProfessionelles und InterKulturelles Arbeiten in Medizin, Pflege und Sozialdienst）との共同研究としてすすめた。

本共同研究は、平成25年度より開始された継続プロジェクトであり、JSPS科学研究費補助金（基盤研究（A）代表 野地有子）を受け実施している。

(3) 本年度の成果

① nGlobe 研修 ベーシックコース

看護職の多文化対応の力研修__ベーシックコースを7月に千葉大学と関西医科大学の2カ所で実施した。

参加者は千葉大学会場90名、関西医科大学会場94名であり、参加者の所属所在地は右図に示した。



●開会式

●グループワーク



② nGlobe 研修 アドバンスコース

看護職の多文化対応の力研修__アドバンスコースを11月に千葉大学けやき会館で実施した。参加者71名であった。



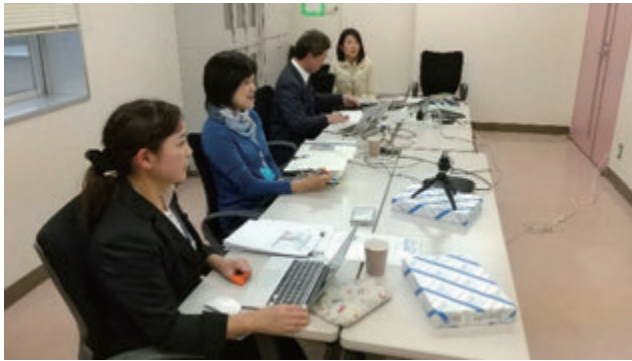
●パネルディスカッション
「医療通訳士と看護師の協働」



●ドイツ・シャリテ医科大学に
おける多文化対応について

③ nGlobe研修 エキスパートコース

看護職の多文化対応の力研修__エキスパートコースを2020年3月に千葉大学を実施本部とするWebinarで開催した。参加者63名であった。講師は、ウテ・ジーベルト博士で、講演テーマは、「ドイツ・シャリテ医科大学における多文化対応能力トレーニング・プログラム (IPIKA) の開発と内容」であった。ドイツと日本をオンラインでつなぎ、参加者との質疑応答も活発に行なわれた。



●千葉大学Webinar実施本部



●IPIKA開発者

ウテ・ジーベルト博士

本年度も、看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究を進め、3種類の4回の研修を実施した。社会実装に向けた研究を継続し、我が国の看護職のカルチュラル・コンピテンスが病院などの組織の核となることを目指す基盤的研究成果を得た。

(4) 次年度の計画

2020年に入り、新型コロナウイルス感染症が世界的な蔓延を引き起こしている。2020年3月に実施予定であった集合型のエキスパートコース研修では、ウテ・ジーベルト先生の訪日は叶わず、急遽Webinar研修として、ドイツと日本を結んで実施することになった。当日の参加者からは「暗いニュースばかりで不安な日々が続いていますが、充実した希望を感じられる午後になりました」との声が聞かれている。日を追って閉塞を深める世界情勢だが、新しいICTを活用した国内および国際展開を進める計画である。

これまで蓄積されたデータおよび知見の総括を行い、臨床および教育における活用と環境整備のための政策提言等を行い、看護国際化のガイドラインづくりを行う予定である。

《令和2年度》

(1) 研究組織

共同研究員	飯島 佐知子	(順天堂大学医療看護学部・大学院医療看護学研究科・教授)
	大友 英子	(東京大学病院・国際診療部師長)
	坂元 真奈美	(鹿児島大学病院・副看護部長)
	相原 綾子	(東京有明医療大学看護学部・助教)
	炭谷 大輔	(千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員)
	近藤 麻理	(関西医科大学看護学部・教授)
	小寺 さやか	(神戸大学大学院保健学研究科国際保健学領域・准教授)
	溝部 昌子	(西南女学院大学保健福祉学部・教授)

浜崎 美子 (康生会武田病院・看護管理者)
 別府 佳代子 (国立国際医療研究センター・看護コーディネーター)
 小粥 美香 (東京大学医科学研究所附属病院・看護師長)
 水野 雅子 (日本医科大学千葉北総病院・看護師長)
 谷井 真弓 (東京大学医科学研究所附属病院・看護師長)
 高橋 恵子 (NTT東日本関東病院看護部・看護長)
 宮越 幸代 (長野保健医療大学看護学部・准教授)
 藤田 さやか (姫路大学看護学部・講師)
 松岡 光 (国立看護大学校看護学部・助手)
 本杉 樹子 (一般社団法人健康事業支援機構海外支援部門・
 看護科長)
 若園 尚美 (名古屋大学総合保健体育センター)
 藤田 比左子 (千葉大学大学院看護学研究科・特任教授)
 野地 有子 (千葉大学大学院看護学研究科・教授)

(2) 研究の概要

令和2年度も引き続き、Society5.0の推進において、「看護職の異文化対応能力」について取り組んでいる。

本年度は、令和元年度のnGlobe研修受講生を中心に、新たに8名共同研究員を全国の看護系大学および医療機関から迎え総勢21名となった。わが国唯一の看護学教育研究共同利用拠点である千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターが、国内外の教育研究者と共に実施する共同研究の課題テーマ「看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究」のもと、オンラインで、nGlobe研修Ⅰ～Ⅵを企画実施した。ドイツのシャリテ医科大学病院における、医療職の多文化能力トレーニング (IPIKA: IPIKA - InterProfessionelles und InterKulturelles Arbeiten in Medizin, Pflege und Sozialdienst) との共同研究としてすすめ、nGlobe研修Ⅰ～Ⅴは、ドイツ・ベルリンとオンラインで同時双方向で実施した。またnGlobe研修Ⅵ「看護職のウェビナー事始め」は、次世代を担う若手看護職を対象に、Webinarの開催方法についてハンズオンで実施した。ICNのナイチンゲールチャレンジに登録参加し、のべ1,000人の参加が見られ、ICNほか国内、国際学会で報告した。

本共同研究は、平成25年度より開始された継続プロジェクトであり、JSPS科学研究費補助金 (基盤研究 (A) 代表 野地有子) を受け実施している。

(3) 本年度の成果

① nGlobe研修2020 看護職の多文化対応能力研修Ⅰ (Webinar 開催)

2020年3月14日 (土) 16時～17時10分

テーマ: ドイツ・シャリテ医科大学における多文化対応能力トレーニングIPIKA
 プログラムの開発

講 師：ウテ・ジーベルト博士（シャリテ医科大学）

② nGlobe 研修 2020 看護職の多文化対応能力研修Ⅱ（Webinar 開催）

2020年9月19日（土）16時～18時

テーマ：IPIKAプログラムのモジュールから

モジュール5 異文化環境における対立への対応

第1部 ウテ・ジーベルト博士（シャリテ医科大学）

第2部 ドイツの看護師との意見交換会（ユタ、カリア、トーマス）

③ nGlobe 研修 2020 看護職の多文化対応能力研修Ⅲ（Webinar 開催）

2020年9月26日（土）16時～18時

テーマ：IPIKAプログラムのモジュールから

モジュール6 病院における差別・格差から

第1部 ウテ・ジーベルト博士（シャリテ医科大学）

第2部 ドイツの看護師との意見交換会（ユタ、カリア、コジマ）

④ nGlobe 研修 2020 看護職の多文化対応能力研修Ⅳ（Webinar 開催）

2020年10月31日（土）16時～18時

テーマ：講義・演習 インターカルチャー・コミュニケーション

ー外国人患者の臨床とコミュニケーションー

講 師：ヴォルカン・アイカッチ博士（シャリテ医科大学）

⑤ nGlobe 研修 2020 看護職の多文化対応能力研修Ⅴ（Webinar 開催）

2021年1月23日（土）16時～18時

テーマ：IPIKAプログラムのモジュールから

モジュール4 多文化環境における医療倫理

第1部 ウテ・ジーベルト博士（シャリテ医科大学）

第2部 ドイツの看護師との意見交換会（事例検討）

（ユタ、カリア、コジマ、トーマス）

事例1 大友英子（東大病院）

事例2 浜崎美子（武田病院）

⑥ nGlobe 研修 2020 VI 看護職のウェビナー事始め

1 期	1 日目	2020 年	11 月 14 日	（土）	13 時～15 時
	2 日目	2020 年	11 月 21 日	（土）	13 時～15 時
2 期	1 日目	2021 年	2 月 13 日	（土）	13 時～15 時
	2 日目	2021 年	2 月 20 日	（土）	13 時～15 時
プログラム：	1 日目	基礎編			
	2 日目	理論・実践編			

講 師：藤田比左子（千葉大学大学院看護学研究科・特任教授）



(ICN2021 世界看護師大会における成果報告)



令和元年度および令和2年度 共同研究コンテンツ報告書 (センターHP・PDF資料)

(4) 次年度の計画

2020年以降、新型コロナウイルス感染症が世界的な蔓延を引き起こしている。2020年3月以降、本共同研究においても、海外および国内の対面による研修は実施できなかった。しかし、Webinar研修として、ドイツと日本を結び、オンライン研修と交流の長所を活かして実施することができた。新しいICTを活用し、その経験を共有し知見を積み重ねて、引き続き国内および国際展開を進める計画である。

次年度は最終年度になることより、これまで蓄積されたデータおよび知見の総括を行い、看護国際化のガイドラインを提言し、その活用可能性と有用性について検討を行う予定である。

3) 共同研究3：公的病院におけるELNEC教育プログラムの開発

(ELNEC: End of Life Nursing Education Consortium)

(1) 研究組織

共同研究員 Roger Strong (サンディエゴ・特任教授/ ELNEC開発者
サンディエゴ退役軍人病院・看護管理者)
近藤 麻理 (関西医科大学看護学部・教授)
小寺 さやか (神戸大学大学院保健学研究科・国際保健学領域・
准教授)
谷井 真弓 (東京大学医科学研究所附属病院・看護師長)
相原 綾子 (千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員) 令和元年度
(東京有明医療大学看護学部・助教) 令和2年度
野地 有子 (看護実践研究指導センター・教授/ ELNEC指導者)

(2) 研究の概要

本プロジェクトは、エンド・オブ・ライフ看護学への関心の高まりを背景に、センターの大学病院看護管理者への研修プログラムの特徴を活かして、公的病院における本テーマに関する教育プログラムの検討を行うために開始した継続プロジェクトである。米国のELNEC開発メンバーである、Dr. Roger Strong を共同研究員に迎え、米国本部よりELNEC指導者の認定を受けた共同研究員からなるプロジェクト研究員の構成であることから、ELNEC教育プログラムを中核に置いている。

(3) 令和元年度から令和2年度の成果

① Dr. Roger Strong (RN, PhD, ACHPN, FPCN) 氏からの最新情報提供

本プロジェクトの共同研究員であるStrong博士は、35年にわたる緩和ケアでの臨床実践と研究およびELNECを通して米国内はじめ国際的にエンド・オブ・ライフケアの教育に尽力し、本プロジェクトにもELNECの教材の最新版の提供ならびに助言がなされた。教材の使用許可は得ている。公的病院でエンド・オブ・ライフケアを提供するために、ELNECの9つのモジュールの中からモジュール5「文化とスピリチュアルな配慮」における議論用チェックポイントについて検討した。

② ELNECにみるエンド・オブ・ライフにおける文化とスピリチュアルな配慮

モジュール5「文化とスピリチュアルな配慮」には全8事例が収められている。各事例にあげられている議論用のチェックポイントの検討を行った。
議論用チェックポイントは事例ごとに3～6件みられ、総数は35件であった。その内容から5項目（情報収集、ケア計画策定、意思決定、看護師のかかわり、多職種チーム）であった。

□情報収集

- ・どのような強みと資源をもっているか
- ・追加情報として何が必要か
- ・家族にとっての文化的アセスメントの必須要素は何か
- ・病院や施設への入院・入所が、患者へ与えた影響は何か

□ケア計画の策定

- ・ケアの決定を左右する文化的影響は何か、文化面の懸念は何か
- ・ケア計画に含めるべき文化的要素は何か/ケア計画に加えることは何か

□意思決定

- ・患者、医療者双方の、意思決定に対する文化の影響はなにか
- ・文化的に適切なコミュニケーション
- ・エンド・オブ・ライフの意思決定について、どのような話し合いを開始すべきか
どのような質問をすべきか

□看護師のかかわり

- ・看護師は患者の民間療法にどう対処すべきか
- ・多数の見舞客があることの意義は何か
- ・家族や大切な人々へ、どのような特別な配慮をすべきか

□多職種チーム

- ・医療チームが考慮する目標は何か
- ・多職種チームの役割は何か
- ・多職種チームはエンド・オブ・ライフケア改善に何ができたか

4) 共同研究4：FDコンテンツ開発（国際）

－10年後を見据えたグローバル人材育成と国際交流推進－

《令和元年度》

(1) 研究組織

近藤 麻理	(関西医科大学看護学部・教授)
小寺 さやか	(神戸大学大学院保健学研究科・准教授)
溝部 昌子	(西南女学院大学保健福祉学部・教授)
相原 綾子	(千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員)
炭谷 大輔	(千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員)
野地 有子	(千葉大学大学院看護学研究科・教授)

(2) 研究の概要

本センターで開発した、看護学教育のためのFDマザーマップの活用推進のためのコンテンツ開発を目的とし、特に国際交流推進のためのコンテンツ開発に特化した共同研究に継続的に取り組んだ。本年度は、FDマザーマップを「グローバル人材育成と国際交流推進」の視点から検討した。

(3) 本年度の成果

看護学教育におけるFDマザーマップの、各マップを個別に「グローバル人材育成と国際交流推進」の視点から検討した。本年度は、5つのマップのうち、教育マップ、研究マップ、社会貢献マップ、運営マップの4つについて実施した。

(3)－1. 教育マップ

①留学生の生活支援、②留学生の学修支援、③学生の国際交流促進、④国際交流の組織的取り組みについて、各教育機関の立場や環境の特性をいかした、教員、留学生、学生の能力がいかに育まれるかについて検討し、活動例をあげた。

(3)－2. 研究マップ

①研究者マインド、②研究遂行能力、③研究マネジメント・調整能力、④研究発信の意義と理解、⑤国際化について、そのアウトカムとなる研究活動の国際展開に関する文献を参考とした。研究成果の普及や協力関係の構築には、地理的近接性がプラスに作用していることが示唆された(文献2)。

(3)－3. 社会貢献マップ

①社会貢献のあり方、②看護活動のイノベーション、③地域貢献について、大学や地域における国際交流活動の社会貢献の評価の重要性について検討した。報告書や実績書などに、国際交流の社会貢献の成果を書き入れていく努力が求められる。

(3)－4. 運営マップ

①組織と個人の理解、②組織文化の創造、③課題解決に向けた組織マネジメント、④組織変革時のリーダーシップ・メンバーシップについて検討した。看護系大学が、

グローバル人材育成を目的とした大学の国際化や国際交流においてその力を組織的に発揮していくためには、大学組織の適切な運営が不可欠である。解決すべき組織的課題、マンパワーと予算不足があげられる。国際教育交流にかかわる業務例を表1に示した。リスクマネジメントについては、昨年度報告した。

国際教育交流に係る業務例

	海外からの学生受け入れ	自大学からの学生派遣	学内の国際化推進関連
教育的側面	・プログラムの提供（病院・施設見学等） ・チューター活動（歓迎会、送迎等） ・履修指導 ・各種オリエンテーション ・日本語教育・日本文化の紹介	・オリエンテーション ・単位認定・互換 ・語学能力向上、異文化理解のためのサポート	・授業の提供 ・チューター活動 ・種々のプログラムの提供 ・グローバル人材教育 ・セミナー・ワークショップ等の国際共同開催
実務・実践	・学生のリクルーティング ・協定校とのやりとり ・プログラムの立案・スケジュール管理 ・宿舍運営（宿泊手配を含む） ・奨学金／授業料関係 ・カウンセリング／アドバイジング ・在籍管理 ・在留資格関係	・危機管理 ・カウンセリング／アドバイジング ・学生募集・選考 ・協定校とのやりとり ・奨学金 ・旅行代理店との調整	・種々のプログラムの運営 ・プログラムのレポート ・MOU関連 ・広報活動 ・他部署との連携 ・学外関係機関との連携
研究・研修	・留学生の受入れ戦略立案 ・自学に受け入れた学生に関する調査 ・他国の留学交流事情調査、研究	・グローバル人材育成 ・海外経験の効果検証 ・協定校に関する情報収集	・プログラム実施の効果検証 ・授業評価 ・学内外への報告、発表 ・自己研鑽（学習、ネットワーキング）

文献3) を一部改変

看護系大学において国際化を推進するためには、能力開発を教員個人の自発的な取り組みに任せるのではなく、組織としてFDの必要性を認識するとともに、達成目標を組織全体の共通理解とすることが大切である。今後、リーダーを中心として、教員の異文化コンピテンス向上を目的とした意図的かつ包括的なFDコンテンツを開発していく必要がある。

（４）次年度の計画

FDマザーマップを活用した「国際交流に関するFDニーズ」の高いことから、継続してコンテンツの開発と充実をすすめる予定である。次年度は、基盤マップについて「グローバル人材育成と国際交流推進」の視点から検討し、本年度の検討を統合しては、5つのマップの検討成果をとりまとめる。特に、COVID-19(Coronavirus disease 2019)の世界的パンデミックの影響による国際交流のチャレンジについても、実践的に取り組む計画である。

文献

- 1) 文部科学省：大学の国際化について．2019年3月26日
- 2) 文部科学省：論文の引用・共著関係からみる我が国の研究活動の国際展開に関する分析．2019年11月（<https://doi.org/10.15108/rm285>）

- 3) 渡部留美：グローバル人材育成に携わる国際教育交流担当者の現状と職能開発．留学交流，77：1-10，2017

《令和2年度》

(1) 研究組織

近藤 麻理	(関西医科大学看護学部・教授)
小寺 さやか	(神戸大学大学院保健学研究科・准教授)
溝部 昌子	(西南女学院大学保健福祉学部・教授)
相原 綾子	(東京有明医療大学看護学部・助教)
炭谷 大輔	(千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員)
野地 有子	(千葉大学大学院看護学研究科・教授)

(2) 研究の概要

本センターで開発した、看護学教育のためのFDマザーマップの活用推進のためのコンテンツ開発を目的とし、特に国際交流推進のためのコンテンツ開発に特化した共同研究に継続的に取り組んだ。本年度は、基盤マップについて「グローバル人材育成と国際交流推進」の視点から検討し、昨年度の検討を統合しては、5つのマップの検討成果をとりまとめた。特に、COVID-19(Coronavirus disease 2019)の世界的パンデミックの影響による国際交流のチャレンジについても、実践的に取り組み、報告書「10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進 コンテンツ報告書Vol. 4」をまとめた。



令和元年度および令和2年度 共同研究コンテンツ
報告書 (センターHP・PDF資料)

(3) 本年度の成果

看護学教育におけるFDマザーマップの、各マップを個別に「グローバル人材育成と国際交流推進」の視点から検討した。本年度は、基盤マップについて検討し、昨年度の検討を統合しては、5つのマップの検討成果をとりまとめた。また、Withコロナ時代の国際交流の実際と課題について緊急課題として検討した。

(3) - 1. 国際交流の推進 × 基盤マップ

①教員活動に対する自己評価

本要素には、①自己の経験や能力、看護職の社会的役割、自大学の置かれた状況等をふまえ、自己の教員活動を評価し改善する意義と方法を知る、②教員活動を持続的に改善するためのFDや学習資源の存在について知るがある。①の自己の経験には、国際交流の経験のインパクトは大きい。また、②の学習資源として、自大学や国内だけでなく、広く海外の多様な学習資源やICTを活用して日々取り入れていきたい。

②看護系大学教員としてのキャリア開発

本要素には、①自己の経験や能力、看護職の社会的役割、自大学の置かれた状況、ワークライフバランス等をふまえ、柔軟に自己の学習ニーズやキャリアパスを検討する必要性を知るがある。キャリア開発には、一般的にいわれるキャリア・アップに加えて、キャリア・ストレッチの考え方も重要となってきた。日本社会は、これまで年功序列の社会通念が主流であったが、海外ではキャリア開発の選択肢が多く、キャリアを積み上げるだけでなく、自分らしく横に広げていくことができる。国際交流により、多様な事例を目の当たりにすることができる。

③看護専門職としての倫理観

本要素には、①看護専門職としての倫理観を言語化することができる、②看護・看護学教育において生じやすい倫理的問題を知るがある。看護専門職としての倫理観の言語化には、たとえば患者の権利をめぐる環境が、国によって違う、歴史によって変化する、社会の受け入れによる違いなどのあることを知り、意見交換しながら成熟させていくことが出来る。看護・看護学教育において生じやすい倫理的問題を知ること、その対応方法を含んだ事例検討などの意見交換が有用である。海外における多様な環境における異なった対応方法について意見交換を通して知り、自身の気づかなかった偏見（アンコンシャス・バイヤス）にも目を向ける機会となり、看護専門職としての倫理観を豊かに醸成できる。



実践例) Webinarによる看護専門職の国際交流

ドイツのシャリテ医科大学病院の看護師と日本の看護師の意見交換会_nGlobeセミナー2020

テーマ：医療倫理に関する事例検討

内 容：日本から2事例発表して、ドイツの看護師を交えた意見交換を行った。

(3) - 2. Withコロナ時代の国際交流の実際と課題

Withコロナ時代の国際交流の実際と課題について、本プロジェクトチームが参加したセミナーのまとめを手がかりに検討した。

①JANPU国際交流推進委員会企画、Web国際交流推進セミナー

「Withコロナ時代の看護学教育における国際交流・連携の実際と課題」

2021年2月20日13:00-15:30 (Zoom)、参加申し込み数290、Zoom参加者最高206

- ・海外大学との対等な関係を構築できる人がまず必要
- ・様々な制度を活用しながら少しずつ形を整え、持続可能な仕組みにもっていく
- ・持続可能というのは、資金面と関わる人にとって魅力的であること
- ・関わる人とは、来る学生、行く学生、受け入れた施設、受け入れにかかわった教員

②2020年度第5回千葉大学アカデミック・リンク/ALPSセミナー

「COIL(海外連携で行うオンライン協働学習)による国際交流教育の新たな展開」

2021年3月9日14:00～16:00 (Zoom)

- ・COILの始まりは多様であり、また取り組み方も多様である
- ・COILはカリキュラムに組み込まれた設計が必要
- ・ダイバーシティ&インクルージョンの実践

③「日米研究インスティテュート最終シンポジウム

U.S.-Japan Research Institute Last Symposium」セミナー

2021年3月12日13:00-17:30 (Zoom)

- ・目的に応じたICT活用のベストミックスをさぐる
(対面型、ハイブリッド型、オンライン型)
- ・ビジョンの明確化
- ・外国人留学生の獲得が大事
- ・現地の人との交流をいかに進めるか
- ・国の異なる学生同士の課外活動の展開もできる
- ・オンライン実施の際の時差の問題 (時差の少ない国や地域のメリット)
- ・オンラインにより障害者の参加や途上国もホストになれるなどの新たな展開への期待

5) 共同研究5：合理的配慮を要する学生の臨地実習にむけたFDプログラム開発 (※令和元年度で終了)

(1) 研究組織

飯岡 由紀子 (埼玉県立大学大学院研究科・教授)
遠藤 和子 (山形県立保健医療大学保健医療学部・教授)
小川 純子 (淑徳大学看護栄養学部・准教授)
松岡 千代 (佛教大学保健医療技術学部・教授)
吉本 照子 (看護実践研究指導センター・教授)

(2) 本研究の背景

2016年4月、障害者差別解消法および改正障害者雇用促進法の施行により、看護系大学も、学生による障がいをも有する根拠の提示と意思の表明をもとに、各々の状況に応じた「教育上の合理的配慮(合理的配慮)」を提供し、学修機会を保障することが必要である。教育現場ではさらに「本人の自覚がない、あるいは障がいの有無が明確ではない学生への修学支援(教育上の調整)」がもとめられる。

看護学教育における臨地実習では、実習施設の患者・家族、実践者および学生全員の安全・安心を確保し、実習施設の看護の質および他の学生の教育の質保証等も考慮して修学支援を行う必要がある。こうした多様な要因を学生の個別性に即して調整し、学生全員の実践力の到達目標の達成および的確な自己評価に基づく支援要請とキャリア開発を支援するには、教員および実践者の教育能力の開発(FD)、また新たな教育方法の開発や専門的な支援体制の構築が必要である。しかし、臨地実習における合理的配慮あるいは教育上の調整の考え方と教育方法に関する報告はまだ少ない。

そこで、看護系大学に共通する合理的配慮あるいは教育上の調整の課題解決に向け、2015年度から4大学の教員とセンター教員が協力し、「FDマザーマップレベル(レベル)」対応型のFDプログラム開発に取り組み、2018年度までに、レベルⅠ「合理的配慮を必要とする学生および支援方法に関する理解」、レベルⅡ「個別事例への教育実践力強化」のFDプログラムの有効性と実用可能性を確認した。

(3) 2019年度の研究状況

レベルⅠ、レベルⅡ「個別事例への教育実践力強化」のFDプログラムのチラシ配布等による広報を推進し、2機関(①行政機関、②私立大学)の依頼に対応して実施した(①2019年12月2回実施、参加者各37名、教員・実践者、②2020年3月予定)。

多様な看護学教育分野の臨地実習における合理的配慮あるいは教育上の調整に関する教員の対応と認識の構造(2017年調査)について分析した結果、教員は自分にとって「通じない」と感じる学生への対応で“困る”と感じ、学生の学ぶ権利の

保障と患者の安全の保障、あるいは学生を庇護したい気持ちと教員としての責任感との間で葛藤しており、組織的対応の必要性を認識していた（遠藤ら, 2019）。全国の看護系大学の実態調査から（2018年実施）、担当教員に対する組織的支援の必要性が抽出された（飯岡ら, 2019）。レベルⅢ「組織的支援」のFDプログラム内容とワークシートを検討し、試案を作成した。

教育上の調整の考え方の基盤となるテクニカルスタンダードや学生・教職員への組織的支援のあり方について、看護学以外の医療系教職員とともに検討するために、第74回医学教育セミナーとワークショップ（岐阜大学医学教育開発研究センター主催）にて、ワークショップを企画した。医学、リハビリテーション分野の教員の参加申し込みもあったが、台風により中止となった。2020年度に内容を再検討し実施する予定である。

本研究は2019年度で終了し、今後、論文を公表し、本センターFD支援データベースに登録する。

学会発表

- ◆ 遠藤和子, 小川純子, 飯岡由紀子, 吉本照子, 松岡千代：教育上の配慮が必要な学生の臨地実習における看護教員の対応とゆらぎ. 日本看護科学学会学術集会講演集, 39th-suppl, 2019.
- ◆ 飯岡由紀子, 松岡千代, 吉本照子, 小川純子, 遠藤和子：臨地実習における教育上の調整にかかわる組織的支援に関する看護系大学の実態調査. 日本看護科学学会学術集会講演集, 39th-suppl, 2019.

ワークショップ「臨地実習における教育上の調整が必要な医療系学生への支援を考える」

医学教育開発研究センター
岐阜大学 医学教育開発研究センター

HOME > FD・研修 > 医学教育セミナーとワークショップ・事後研修 > 第74回医学教育セミナーとワークショップ・医療系大学版

概要

教員
スタッフ
院内 看護部
院外 看護部
他学教育機関関係者

FD・研修

医学教育セミナーとワークショップ・事後研修
その他のFD・セミナー

教育

大学講・研究

国際交流

国際共同研究
海外臨床実習プログラム
国際共同ワークショップ

学務事務

関連組織

日本看護科学学会
日本看護学会IT
日本看護学会看護教育学会
看護コーディネーター研究会
看護系大学ネットワーク全国委員会 (2019)

リンク集

交通アクセス

ワークショップ3

臨地実習における教育上の調整が必要な医療系学生への支援を考える

企画	吉本照子（千葉大学）、飯岡由紀子（埼玉医科大学）、遠藤和子（山形県立保健医療大学）、小川純子（徳島大学）、松岡千代（看護大学）
日時	10月12日（土）13:00～16:30・13日（日）9:00～12:30（7時開始）
会場	WA棟2階 研修室6・7
対象	本テーマに関心のある医療系教職員
定員	45名
アポイントポイント	9.5

概要

医療系大学には、臨地実習をする際の学生の状況に合わせた「教育上の配慮的対応あるいは調整（教育上の調整）」の場として学生に学習機会を提供し、多様な能力の発揮を支援することが求められています。看護学教育における臨地実習では、実習施設のケア対象者・家族、看護職員および学生全員の安全・安心を確保し、実習開始の準備段階、他の学生の教育の確保等も考慮して教育上の調整を行う必要があります。こうした教育上の調整に困難を感じる看護系教員・看護職員も多い状況に対し、企画者は看護系教員および看護職員を対象としたFD・SDプログラムを開発しました。今回、第一部（10/12）では、企画者が開発したFD・SDプログラムを紹介し、対人関係が難しい学生等の事例に関するグループワークなどを体験していただきます。第二部（10/13）では、教育上の調整の基盤となるテクニカルスタンダードや学生・医療系教職員への組織的支援のあり方について、初陣シンポジストとともに考えたいと思います。

このワークショップは看護学教育での実践を紹介させていただきますが、どの医療系看護教職員の皆さんにもご参加いただけます。

第74回 医学教育セミナーとワークショップ in 国際医療福祉大学

**臨地実習における
教育上の調整が必要な
医療系学生への支援を考える**

第一部 2019年10月12日(土) 13:00-16:30
第二部 10月13日(日) 9:00-12:30
場 所 国際医療福祉大学 成田キャンパス
(京成本線「公津の杜」駅前)

申込先
9/29締切

医学教育共同利用拠点
岐阜大学医学教育開発研究センター
<https://www1.gifu-u.ac.jp/medc/>

医療系大学には、障がいや有する等の学生の状況に応じた「教育上の合理的配慮あるいは調整（教育上の調整）」のもとに学生に学習機会を保障し、多様な能力の発揮を支援することが求められています。

看護学教育における臨地実習では、実習施設の看護の質、他の学生の教育の質保証等も考慮して教育上の調整を行う必要がある。こうした調整に困難を感じる看護系教員・看護学生も多い状況です。

第一部（10/12）では、企画者らが開発したFD・SDプログラムを紹介し、対人関係が難しい学生等の事例に関するグループワークなどを体験していただきます。

第二部（10/13）では、教育上の調整の基盤となるテクニカルスタンダードや学生・医療系教員への組織的支援のあり方について、シンポジストの川上ひろ先生（岐阜大学）、佐々木麗月先生（筑波大学）とともに考えたいと思います。

今回は看護学教育での実践を紹介しますが、どの医療系養成教員の方さまもご参加いただけます。

<企画>
吉本原子(千葉大学) 飯岡由紀子(埼玉県立大学) 遠藤和子(山形県立保健医療大学)
小川純子(淑徳大学) 松岡千代(康教大学)

HOME サイトマップ 交通アクセス お問い合わせ

FD・研修 教育 大学院・研究 国際交流 学務事務

ホーム > FD・研修 > 医学教育セミナーとワークショップ・事務研修 > 第74回医学教育セミナーとワークショップ in 国際医療福祉大学

第74回医学教育セミナーとワークショップ in 国際医療福祉大学

台風による中止のお知らせ

令和元年10月12日(土)から10月13日(日) 国際医療福祉大学(成田市)にて開催を予定しておりました第74回医学教育セミナーとワークショップですが、台風接近の予報を受まして、参加者の皆様の安全及び交通機関の計画遅延による遅延を考慮しました結果、中止とさせていただきますのでお知らせいたします。

御多忙の中、申し込みいただきました受講者及び開催にむけてご準備いただきました講師の皆様には、多大なご迷惑をおかけしますことともに、開催直前のご案内となりましたことを心より深くお詫言申し上げます。

令和元年10月8日
岐阜大学医学教育開発研究センター長
藤 崎 和 彦

広報用チラシ

FD企画者研修、国公立大学病院
副看護部長研修等にて配布

第74回医学教育セミナーとワークショップ
in 国際医療福祉大学

本研究はJSPS科研費JP16K15888（研究代表者：飯岡由紀子）の助成および本センター予算にて実施した。

6) 共同研究6：組織の現状を踏まえた研修企画を支援する方法の開発

(※令和2年度 共同研究5「組織の現状を踏まえた研修企画を支援する方法の開発」)

共同研究6では、「新人看護師教育責任者支援プログラムの開発—到達目標、必要なコンテンツの明確化によるプログラムの精錬—」の研究を、以下の体制ですすめた。

(1) 研究組織

黒田 久美子 (看護実践研究指導センター・准教授)
和住 淑子 (看護実践研究指導センター・教授)
鈴木 康美 (埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科・教授)
西山 ゆかり (聖泉大学看護学部看護学科・教授)
三谷 理恵 (兵庫医療大学看護学部看護学科・講師)
室屋 和子 (佐賀大学医学部看護学科・准教授)
杉原 多可子 (社会医療法人純幸会関西メディカル病院・看護部長)

(2) 背景

2010年4月、新人看護職員研修が努力義務化された。研究者らは、努力義務化の前から新人看護師の実地指導者を支援する教育担当者に着目し、研究を行ってきた(佐藤他, 2009; 和住他, 2010)。

これまでに「自施設完成型新人看護師教育担当者育成プログラム」(和住他, 2012)、教育担当者が必要な能力を自己評価できるツールの妥当性・信頼性の検証を行ってきた。(黒田他, 2019)。

「自施設完成型新人看護師教育担当者育成プログラム」に対しては、複数の施設から活用希望が出されたものの、研修に参加する教育責任者が、研修前にどのような課題をもち、研修の必要性があるのか、また、研修後にその課題がどのように解決したのか(もしくはしていないのか)については、明らかになっていない。1つの研修は万能ではなく、到達目標により内容が異なる。到達目標、必要なコンテンツの明確化により、プログラムの精錬を図る必要がある。

(3) 目的

本研究の目的は、「新人看護師教育責任者支援プログラム」を活用した研修の実施を通して、受講した新人看護師教育責任者の、①研修ニーズ、②研修への反応、③研修内容を活かして何を実践したのかを明らかにし、「新人看護師教育責任者支援プログラム」の到達目標、必要なコンテンツを明確化し、プログラムの洗練を図ることである。

(4) 研究方法

所属機関の倫理審査委員会の承認後、以下の方法で行っている。

データ収集方法

① 「新人看護師教育責任者支援プログラム」を活用した研修

研究者らのネットワークを通じて、「新人看護師教育責任者支援プログラム」を活用した研修（以下、本研修と略す）を実施し、受講者を募集した。次年度の企画に活かせることを考慮し11月3日、4日に研修を実施した。

② 対象者

本研修の受講者であり、新人看護師研修を含む施設内研修の企画・運営・実施・評価において責任を負う立場にある者、またはその予定のある者のうち、研究協力に同意した者

③ データ内容

1) アンケート調査

本研修終了時に、以下の内容のアンケートを無記名で実施する。研究への利用の諾否について確認するチェック欄を設けて、承諾を確認する。

- ・ 本研修で学んだこと
- ・ 研修企画への意識、認識、知識、企画力をつけるニーズの変化

2) インタビュー調査

本研修後、1～2か月の時期に、インタビューガイドを用いて、対象者の施設の背景情報、研修受講動機、本研修での学びを自施設での研修企画立案にどのように活かしたか（活かそうと考えているか）、本研修での学びのうち、自施設での研修企画立案に活かしきれないと感じた部分があるか。ある場合、それはどのような内容か、本研修で不足していると感じた内容があるか。ある場合、それはどのような内容か、本研修を受講しても、自施設での研修を企画立案する上で困難なことは何かをインタビューした。なお、インタビュー調査とメール調査の回答は対応して分析するため、インタビュー調査時点でID番号を付与し、対象者が識別できるための対応表を作成した。

3) メール調査

通常、新人看護師教育に関する研修は、年度末の3月までに立案される。そこで、インタビュー調査後の状況を確認するために、インタビュー調査の協力者に対して、3月上旬に以下の内容でメール調査を実施する。メール調査は、調査用紙のファイルに、インタビュー調査時に付したID番号を記載し、メールに添付し送付する。回答したファイルをメール添付で返送してもらう。その際、あらかじめ、調査用紙のファイルにパスワード設定をしておく。

- ・ 本研修での学びを自施設での研修企画立案にどのように活かしたか
- ・ 本研修での学びのうち、自施設での研修企画立案に活かしきれないと感じた部分があるか。ある場合、それはどのような内容か。

- ・本研修で不足していると感じた内容があるか。ある場合、それはどのような内容か。
- ・本研修を受講しても、自施設での研修を企画立案する上で困難なことは何か。

(5) 結果

① 対象者の概要

研修には20名が参加し、インタビュー調査に承諾を得たのは12名であった。

② 進捗状況

12名へのインタビュー調査は終了し、以下の内容で分析、結果を整理している。

- 1) 施設概要と対象者の職位等
- 2) 研修動機、研修での学び
- 3) 研修での学びの活用
- 4) 活かしきれない内容、研修企画立案する上で困難なこと
- 5) 2)～4)から読み取れる対象者の変化のパターン

7. 情報ネットワーク化

看護学教育の継続的質改善（CQI）モデル開発と活用推進プロジェクトの一環として、ネットワーク型CQI相互支援体制を整備した。そのほか、CQIモデルの発信は、おもに看護学教育ワークショップを通して行い、ニュースレター、看護学教育ワークショップの報告書を作成し、全国の看護系大学、関連機関に発信した。このような情報の発信を通して、ネットワーク化をすすめた。

また、HPの見直しでは、特に問い合わせの多いFDマザーマップ関係の情報が得やすく、見やすい構成に修正した。

《ネットワーク型CQI相互支援体制》

当初、ネットワーク型CQI相互支援体制をWEB上に構築し、関心のある人同士が相互支援しあえる場をつくる計画であった。しかし、大学のセキュリティ強化の一環で、実施できなくなった。そこで、SIG（Special Interest Group）の小集団のメーリングリストをつくることとした。

SIGは、特定のテーマについて興味や関心のある人々のグループのことで、メーリングリストは、SIGのテーマごとに開設する。当該のテーマに関して、各大学が困っていることや悩んでいること、あるいは、先行して実践している自大学の取り組み内容や工夫、知恵などについて、自由に、情報や意見を交換することによって、各大学のCQI推進を、相互に支援し合うネットワークとなることを意図した。

開設の試みとして、以下の7つのSIGテーマを設定した。

- ① 若手・中堅教員発信のCQI
- ② 学生の学びの評価に関するCQI
- ③ 地域包括ケアを学ぶ科目に関するCQI
- ④ 自大学のポリシー共有に関するCQI
- ⑤ FDマザーマップ活用に関するCQI
- ⑥ 臨地実習の改革に関するCQI
- ⑦ 新カリキュラム構築に関するCQI

平成30年度・令和元年度年度の看護学教育ワークショップの参加者に参加を呼びかけ、延べ80名強で、令和2年3月下旬から開始した。

Ⅲ. 各研究部における研究内容

1. ケア開発研究部

ケア開発研究部は、全国共同利用拠点（看護教育研究）としての看護実践研究指導センターにある研究部である。

本研究部は、専任教員、特任教授、特任研究員、システム管理学専攻大学院生、博士後期課程（看護管理学）、国際プログラム博士後期課程（看護管理学）および、実践センター共同研究員により構成されている。実践センター事業として、看護学教育研究共同利用拠点の特別経費による教育関係共同実施分「看護学教育の継続的質改善

（Continuous Quality Improvement CQI）モデルの開発と活用促進」（H28～31年度）、文部科学省委託事業「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究」

（H30～32年度）についてのプロジェクト研究に継続して取り組み、その一環として看護学教育ワークショップの企画実施および報告書を編纂した。FDマザーマップ開発に関するFDコンテンツ開発にも引き続き取り組み活用促進に尽力した。センターの独自事業である共同研究、大学病院副看護部長研修その他SDおよびFD研修プロジェクト成果もHPおよび学会発表等を通して公表し、実践と教育研究をつなぐ活動を継続している。本研究科協定校のソウル国立大学（韓国）、コンケン大学（タイ王国）、サンディエゴ大学（米国）、千葉大学海外キャンパスのあるシャリテーベルリン医科大学（ドイツ）と連携し、継続的に学内・国内・国際的研究の拠点づくりを行っている。COVID-19のパンデミックによる海外渡航や国内移動が見合わせられている期間には、オンラインによりWeb会議およびWebinar開催を実施し、科研関連セミナーおよび研修会にはのべ1,000人の看護職参加者がみられた。

野地有子教授は、研究代表者として第1期平成25～28年度JSPS科研基盤（A）「アジア圏における看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する国際比較研究」を終了し引き続き、第2期平成29～33年度 JSPS科研基盤（A）「世界をリードするインバウンド医療展開に向けた看護国際化ガイドライン」を継続した（<http://nglobe.jp>）。令和元年度厚生労働省老人保健事業推進補助金「「リハビリテーションを行う通所事業所における栄養管理のあり方に関する調査研究事業」研究委員として、全国調査と公的介護保険法に関する政策提言を行った。引き続き、令和元年度厚生労働省老人保健事業推進補助金「認知症対応型共同生活介護における栄養管理の在り方に関する調査研究事業」研究委員として、全国調査と公的介護保険法改訂に関する政策提言を行った。本学医学部附属病院臨床栄養部との共同研究である千葉NCM（Nutrition Care and Management）研究会を主催し、病院と地域をつなぐ栄養ケアマネジメントのシステムづくりの研究を継続した。

黒田久美子准教授は、実践センターでの研究の他に、「認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族の援助指針の精練と実装化」（基盤研究C）（研究代表者）、「糖尿病患者セルフケア能力測定ツールを活用した外来患者用ICT看護システムの開発」（基盤研究B）（研究分担者）、「高齢者ケアの継続・連携に関する質指標開発とシ

ステム構築」(基盤研究A)(研究分担者)に取り組んでいる。その他、アジア開発銀行老人看護プロジェクトの協力者として、中国医科大学第一附属医院で、研修立案の基盤となる理論、評価に関する講義を行った。

2. 政策・教育開発研究部

政策・教育開発研究部では、看護対象者の生命力が発揮できるように、その生活調整の看護支援を可能にする看護管理及び政策に関わる現状を構造的に捉え、改善すべき課題を明らかにし、看護基礎教育と連動させた看護職者の生涯にわたる教育・人材・キャリア開発のための研究を行っている。

令和元年度は、看護実践研究指導センターが運営費交付金特別経費により平成28年度より取り組んでいる「看護学教育の継続的質改善(CQI:Continuous Quality Improvement)モデル開発と活用促進プロジェクト」の最終年度にあたり、CQIモデル開発をVer.2にすすめ、看護学教育ワークショップ等で活用推進を実施するとともに、大学間相互支援ネットワークを意識した支援体制の構築を行った。この成果は、最終報告書にまとめ、刊行した。

また、令和元年度、2年度は、平成30年度に3年間の計画で当センターが文部科学省より受託した「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究受託事業 学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究」の事業を継続した。「社会の変化に即した看護系大学の臨地実習指導体制の改革に関する全国調査」「社会の変化に即した学士課程教育の改革—臨地実習指導に関する看護系大学の個別事例研究—」の成果は、日本看護科学学会学術集会において発表した。令和2年度は、これらの成果をまとめ、最終報告書と事例集を刊行した。

令和2年度は、新規に、「“Society5.0看護”創出拠点—ピア・コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略—」事業を立ち上げた。本プロジェクトの目的は、医療分野におけるSociety5.0の実現に向け、最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける健康支援方略＝“Society5.0 看護”を創出・発信することである。令和2年度は、5年間のプロジェクトの初年度であり、翌年までの2年間で行う事業フェーズ第1期：研修型課題解決支援システム構築フェーズとして、集合型研修からピア・コンサルテーション型研修への転換に必要なニーズ調査、及び課題解決型研修のプログラム構築を行った。

この他、和住教授・銭准教授は、共同で、対象者の生命力が発揮できるように、その生活調整の看護支援を可能にする看護モデルや、AI構築のための概念モデル、VR教材、看護高等教育の歴史研究を国際学会で発表した。

また、和住教授は、民間企業と共同で、看護基本技術教育において、技術修得を促す教育システムの開発に向けて導入するVR等画像最新技術を検討する研究を行い、技術修得を促す教育システムの開発に向けて、初めて模擬患者に対する看護技術を適用する場面における看護初学者の対象認識および表現の特徴を明らかにした。この成果は、日本看護シミュレーションラーニング学会学術集会にて発表した。

IV. 看護実践研究指導センター活用実績

平成22年度～令和2年度の拠点利用実績

(単位:人)

北海道・東北ブロック

看護学教育指導者研修	49	FD企画者研修	2
看護学教育ワークショップ	82	FD支援データベース登録	4
国公立大学病院副看護部長研修	25	看護系大学への講師派遣・	7
看護管理者研修	88	コンサルテーション	

関東ブロック

看護学教育指導者研修	133	FD企画者研修	12
看護学教育ワークショップ	178	FD支援データベース登録	13
国公立大学病院副看護部長研修	70	看護系大学への講師派遣・	13
看護管理者研修	370	コンサルテーション	

中部ブロック

看護学教育指導者研修	58	FD企画者研修	2
看護学教育ワークショップ	117	FD支援データベース登録	5
国公立大学病院副看護部長研修	48	看護系大学への講師派遣・	18
看護管理者研修	119	コンサルテーション	

関西ブロック

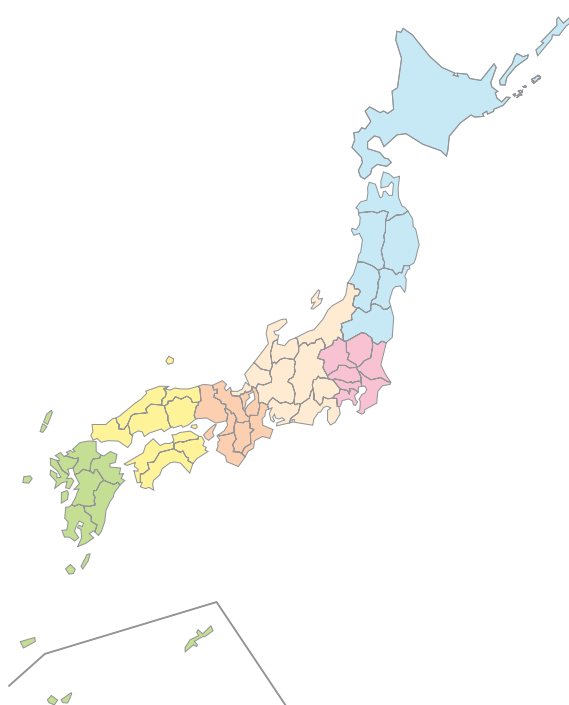
看護学教育指導者研修	38	FD企画者研修	6
看護学教育ワークショップ	91	FD支援データベース登録	8
国公立大学病院副看護部長研修	23	看護系大学への講師派遣・	9
看護管理者研修	106	コンサルテーション	

中国・四国ブロック

看護学教育指導者研修	43	FD企画者研修	4
看護学教育ワークショップ	109	FD支援データベース登録	9
国公立大学病院副看護部長研修	27	看護系大学への講師派遣・	8
看護管理者研修	91	コンサルテーション	

九州・沖縄ブロック

看護学教育指導者研修	47	FD企画者研修	4
看護学教育ワークショップ	84	FD支援データベース登録	6
国公立大学病院副看護部長研修	36	看護系大学への講師派遣・	9
看護管理者研修	128	コンサルテーション	



V. スタッフ紹介

◇センター長



氏 名 和住 淑子（わずみ よしこ）
職 名 教授
学 位 博士（看護学）
所 属 政策・教育開発研究部（看護実践研究指導センター）
兼 継続教育・政策管理学（看護システム管理学専攻）

個々の看護職者が、看護の専門性を発揮しつつ組織に貢献していくことができるような教育体制づくり、政策形成過程について、実践と研究を重ねています。課題を共有できる全国の看護職者、看護教員と積極的に連携したいと考えています。

◇ケア開発研究部



氏 名 野地 有子（のじ ありこ）
職 名 教授
学 位 博士（保健学）
所 属 ケア開発研究部（看護実践研究指導センター）
兼 実践看護評価学（看護システム管理学専攻）
看護管理学（博士後期課程）
International program for Ph.D（国際プログラム）

Society5.0が推進される中、様々な価値観の変換と多様性（ダイバーシティ）に直面している社会において、看護職の役割は人々のつながりを通して益々重要になってきています。新しい看護提供システムの研究と教育から、グローバル・リーダーの育成に取り組みます。



氏 名 黒田（垣本）久美子（くろだ（かきもと）くみこ）
職 名 准教授
学 位 博士（看護学）
所 属 ケア開発研究部（看護実践研究指導センター）
兼 実践看護評価学（看護システム管理学専攻）

「教育－研究－実践をつなぐ」をキーワードに教育研究をすすめたいと考えています。関心のある方は是非、ご連絡をお待ちしております。

◇政策・教育開発研究部



氏名	錢 淑君 (せん しゅくくん)
職名	准教授
学位	博士 (看護学)
所属	政策・教育開発研究部 (看護実践研究指導センター) 兼 継続教育・政策管理学 (看護システム管理学専攻)

Society5.0 になった 21 世紀において、社会現象、環境問題の本質は弁証法の原理原則に則していると検証出来ました。弁証法的に物事を観察し、看護専門職として違う分野の方々と Co-design し、SDGs をどのように進めていくかを皆様と一緒に研鑽していきたいと思ひます。



氏名	高木 夏恵 (たかぎ なつえ) 令和2年度～
職名	講師
学位	修士 (看護学)
所属	看護実践研究指導センター

センターが新たに掲げる「共創」の理念のもと、研修事業を通じて相互に刺激・発展し合いながら、人間中心にテクノロジーを活用する新たな看護を創出すべく取り組んでいます。他者の健康を支援する看護者自身が健康で在れるよう貢献したいと思ひます。

◇特任教員



氏名	大原 裕子 (おおはら ゆうこ) 令和元年度
職名	特任准教授
学位	博士 (看護学)
所属	大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業 (看護実践研究指導センター)

医療にかかわる人材をどう育てていくか、全国の大学が抱えている課題について社会情勢を踏まえつつ分析したうえで、提言に繋げていく取り組みをしています。看護系大学の挑戦を後押しできるような役に立てると嬉しいです。

VI. 資料

1. 教育・研究活動実績

1) 研究活動

【令和元年度 2019.4～2020.3】

〔原著〕

黒田久美子，西山ゆかり，三谷理恵，和住淑子，室屋和子，鈴木康美，杉原多可子：「新人看護師教育担当者能力自己評価票」（SS-CNE） Ver.1 の信頼性・妥当性の検証．日本看護管理学会誌，23(1)，19-27，2019．

〔学会発表抄録〕

野地有子，高橋遥香，中島千佳，田澤敦代，曳地陵子，野本尚子，中野香名，立麻志保，米山晶子，岡本美孝：外来化学療法を受けているがん患者の食事と栄養面の支援について－第2報 通院治療室の管理栄養士と看護師および患者へのインタビューを通して－，日本健康・栄養システム学会誌 Vol.19(1)，69，2019．

堤亮介，高田健人，浅見桃子，藤川亜沙美，長瀬香織，田中和美，遠又靖丈，荻部康子，宇田淳，榎裕美，大原里子，加藤昌彦，高田和子，中村春基，野地有子，小山秀夫，杉山みち子：通所系サービス事業所における低栄養及び摂食嚥下の問題の実態（Ⅰ．事業所実態調査より），日本健康・栄養システム学会誌 Vol.19(1)，74，2019．

浅見桃子，堤亮介，高田健人，藤川亜沙美，長瀬香織，田中和美，遠又靖丈，荻部康子，宇田淳，榎裕美，大原里子，加藤昌彦，高田和子，中村春基，野地有子，小山秀夫，杉山みち子：通所系サービス事業所利用高齢者における低栄養と ADL/IADL 及び要介護度の関連（Ⅱ．利用者個別調査：多変量解析より），日本健康・栄養システム学会誌 Vol.19(1)，74，2019．

高田健人，浅見桃子，堤亮介，藤川亜沙美，長瀬香織，田中和美，遠又靖丈，荻部康子，宇田淳，榎裕美，大原里子，加藤昌彦，高田和子，中村春基，野地有子，小山秀夫，杉山みち子：通所系サービス事業所利用高齢者における低栄養と ADL/IADL 及び要介護度の関連（Ⅱ．利用者個別調査：主成分分析より），日本健康・栄養システム学会誌 Vol.19(1)，76，2019．

A.Noji，A.Nosaki，M.Kondo，S.Iijima，S.Kotera，A.Mizobe，nGlobe：The current situation and problems of nursing care in hospitals caring for international patients in Japan - To make a policy recommendation from the viewpoint of

nursing administration -, International Council of Nurses Congress 2019, Marina Bay Sands Singapore, June 27-July 1, 2019.

橋爪朋子, 野地有子: 日本赤十字社看護部における亜急性期の災害サイクル演習プログラムの開発及び実施評価—災害時病院支援に焦点をあてて—, 第 23 回日本看護管理学会学術集会電子抄録集, 2019.

炭谷大輔, 野地有子: 位置情報ゲーム「Ingress」による健康増進効果—アート・デザインの視点から—, 日本健康科学学会第 35 回学術大会抄録集, 35(3), 190, 2019.

大島紀子, 野地有子: 産業看護職における新入社員への健康管理研修の現状と課題, 日本健康科学学会第 35 回学術大会抄録集, 35(3), 196, 2019.

野地有子, 野崎章子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, 溝部昌子, 浜崎美子, 小林康司, 松岡光: 看護職の多文化対応能力研修ベーシックコースの開発と評価 第 1 報 研修コース開発のプロセスと構造, 第 39 回日本看護科学学会学術集会抄録集, 98, 2019.

溝部昌子, 野地有子, 大友英子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, 野崎章子, 炭谷大輔, 相原綾子: 看護職の多文化対応能力育成を目的とした研修プログラム開発過程について, 第 4 回国際臨床医学会学術集会プログラム抄録集, 41, 2019.

黒田久美子, 清水安子, 内海香子, 正木治恵, 錢 淑君: 認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族への援助指針の開発過程で得た事例のエピソード. 第 24 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会. 21th Sep., 2019. 千葉 査読有.

井下綾子, 樋口恵美, 和住淑子: 急性期病院 ICU で夜勤リーダーを行う熟練看護師の判断過程. 第 50 回日本看護学会 (看護管理), 23rd Oct., 2019.

Shu Chun Chien, Yoshiko Wazumi, Toshie Yamamoto, Y. Kanai, Shinobu Saito : Impact of Lifestyle and Life Balance on Autonomic Nerves for Patients with Myoma of the Uterus. The 45st Biennial Conference of Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing. 18 November 2019, Washington DC, USA.

和住淑子, 荒尾博美, 上野まり, 奥田玲子, 落合亮太, 叶谷由佳, 黒田久美子, 錢 淑君, 武田淳子, 出貝裕子, 中村京子, 野地有子, 堀 律子, 本間昭子, 松浦治代, 吉本照子, 渡邊典子: 社会の変化に即した看護系大学の臨地実習指導体制の変革に関する全国調査. 第 39 回日本看護科学学会学術集会, 30th Nov., 2019.

Atsuko Genda, Misato Ikeda, Jun Kawakami, Ariko Noji: Examination of Nursing Literature on Shared Decision Making in Japan, The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, 2020.

Takako Takahashi, Ariko Noji: Current State of Preoperative Oral Care in A Japanese Public Hospital, The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, 2020.

Kayoko Beppu, Ariko Noji: Current State and Problems of Hospitals Providing care for Foreign Patients by a literature, The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, 2020.

Ariko Noji, Mari Kondo, Sachiko Iijima, Sayaka Kotera, Akiko Mizobe, Akiko Nosaki, Daisuke Sumitani, Ayako Aihara : Study on Evaluating a Cultural Competence Training Program in Japan, The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, 2020.

Hikaru Matsuoka, Sachiko Iijima, Ariko Noji, Mari Kondo: Evaluation of the quality of Nursing care in Japanese hospitals as seen from for foreign staying in Japan, The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, 2020.

Satoko Ueno, Sayaka Kotera, Ariko Noji: Immigrant patients' perceptions of Japanese nursing care , The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, 2020.

<インフォメーション エクスチェンジ>Tong Ling, Ariko Noji: Perceived Transcultural SelfEfficacy Nursing in Third-class General Hospitals, The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, 2020.

<インフォメーション エクスチェンジ>Ariko Noji, Mari Kondo, Sachiko Iijima, Sayaka Kotera, Akiko Nosaki, Hikaru Matsuoka, Judith Heepe, Koji Kobayashi, Yoshiko Hamasaki: Participatory approach in “a training program for enhancing nurses' capability of responding multicultural situations” , The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, 2020.

相原綾子、野地有子、近藤麻理、小寺さやか、飯島佐知子、溝部昌子：外国につながるのある人たちへの看護ケアー異文化との出会い 42 病院マップの開発と活用 第 2 報一，第 10 回日本看護評価学会学術集会抄録集，2020.

鈴木里美，野地有子：看護師と医療通訳士が協働する際の課題ー看護師と医療通訳士の双方の視点からー，第 10 回日本看護評価学会学術集会抄録集，2020.

飯島佐知子，松岡光，野地有子，近藤麻理，小寺さやか，溝部昌子，相原綾子：HCAHPS を用いた日本に滞在する外国人と日本人の日本の病院での入院経験の質の比較，第 10 回日本看護評価学会学術集会抄録集，2020.

Yoshiko Wazumi, Shinobu Saitou, Toshie Yamamoto, Shu Chun Chien : Establishment of nursing discipline through analysis of change of the degree name in Japan. Nursing Education Research Conference 2020 of Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing. 27thMar. 2020, Washington DC, USA. (Conference canceled)

〔シンポジウム・招聘講演〕

(招聘講演/基調講演) Ariko Noji : Innovation for Future Nursing : Convergent Education IPE&W, Reserch Institute of Nursing Science, Hanyang University, 漢陽大学看護学研究所国際学術大会講演集, 3-17, 2019.

(招聘講演) Ariko Noji: Nursing Education and Curriculum Design in Japan Now as the Forefront Aging Socity in the World, International Conference of the 40th Anniversary of AMSKKU Foundation in Conjunction with the 4th Allied Health Sciences Symposium, Khon Kaen University, Thailand, 2019.

(シンポジスト) 野地有子：食べることを治療の一環として支援するための視点と課題ー外来化学療法を受けているがん患者への管理栄養士と看護師の協働ー，第 39 回食事療法学会，2020.

(研修会における基調講演)

野地有子：カルチュラルコンピテンス教育の背景と必要性，nGlobe 研修ベーシックコース千葉大学会場，千葉大学 看護・医薬系総合教育研究棟，2019.

野地有子：カルチュラルコンピテンス教育の背景と必要性，nGlobe 研修ベーシックコース関西医科大学会場，2019.

野地有子：看護職の多文化対応能力ー理論とわが国の現状，nGlobe 研修アドバンスコース，千葉大学けやき会館，2019.

野地有子：nGlobe 研修の成果と課題，nGlobe 研修エキスパートコース，Webinar，千葉大学及びドイツ・シャリテ医科大学，2020.

（研修会講師）野地有子：外国人の方への医療提供を考える～看護職としての心構えや準備～，山武健康福祉センター看護管理者研修会，2019.

（研修会講師）野地有子：世界をリードするインバウンド医療展開に向けた看護国際化ガイドラインー外国につながるのある人たちへの医療提供ー」都立広尾病院 JMIP 研修会，2019.

（研修会講師）野地有子：組織論・組織分析／公的病院におけるエンド・オブ・ライフケア，令和元年度国公立大学病院副看護部長研修Ⅰ，2019.

（研修会講師）野地有子：プレゼンテーション演習，令和元年度国公立大学病院副看護部長研修Ⅱ，2019.

（研修会講師）野地有子：コミュニケーション・人間関係論演習，令和元年度国公立大学病院副看護部長研修Ⅱ，2019.

（研修会講師）野地有子：企画立案演習，令和元年度国公立大学病院副看護部長研修Ⅱ，2019.

（研修会主催）
野地有子：nGlobe 研修看護職の多文化対応能力研修ベーシックコース千葉大学会場，2019.

野地有子：nGlobe 研修看護職の多文化対応能力研修ベーシックコース関西医科大学会場，2019.

野地有子：nGlobe 研修看護職の多文化対応能力研修アドバンスコース，千葉大学 けやき会館，2019.

野地有子：nGlobe 研修看護職の多文化対応能力研修エキスパートコース，Webinar，千葉大学及びドイツ・シャリテ医科大学，2020.

〔報告書〕

吉本照子，野地有子，和住淑子，黒田久美子，銭淑君，赤沼智子，上野まり，稲垣朱美：平成 30 年度看護実践研究指導センター年報．看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター，2019.

野地有子，近藤麻理，小寺さやか，溝部昌子，藤田比佐子，炭谷大輔，相原綾子他：nGlobe 研修ベーシックコース・アドバンスコース・エキスパートコース コンテンツ報告書，千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター，2020.

野地有子，和住淑子，黒田久美子，銭淑君，大原裕子：令和元年度看護学教育ワークショップ報告書，千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター，2020.

和住淑子，野地有子，黒田久美子，銭淑君他：看護実践研究指導センター年報 No. 38，令和元年度.

〔単行書〕

野地有子（監修）：クエスチョンバンク 保健師 国家試験問題解説 2020 第 12 版，メディックメディア，2019.

野地有子（監修）：保健師 国家試験のためのレビューブック 2020 第 20 版，メディックメディア，2019.

野地有子：看護学テキスト Nice 国際看護 国際社会の中で看護の力を発揮するために，第Ⅱ章 看護における文化，3. 文化ケアアプローチ，南江堂，42-49，2019. ISBN:978-4-524-25264-0

野地有子：第 10 章公衆衛生看護の歴史，米国と英国の公衆衛生の発達と公衆衛生看護活動の歴史，標準保健師講座，公衆衛生看護学概論，医学書院，248-256，第 5 版第 2 刷，2020.

〔総説・短報・実践報告・資料・その他〕

野地有子：看護国際化ガイドラインに向けて：看護管理の支援からの政策提言—多文化に育まれたシンガポールの ICN 大会に参加して，看護，71(11)，76-77，2019.

野地有子：The Guide for How to Encounter with Different Culture 2018, English edition February 20, 2020.

【令和2年度 2020.4～2021.3】

〔原著〕

野地有子:看護実践における CPG の位置づけ～看護国際化ガイドラインの軌跡と未来形～
Precision Medicine, 3 (7), 49-52, 2020.

溝部昌子, 野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, マシューポーター, 炭谷大輔, 大友英子, 小林康司, 浜崎美子:看護職の多文化対応能力研修プログラムに用いる教材開発. 国際臨床医学会雑誌, 4(1), 43-49, 2021.

〔学会発表抄録〕

野地有子, 中村彩, 野本尚子, 中野香名:食物アレルギーの児をもつ母親の負担やストレスを軽減する管理栄養士と看護師の関わり方および工夫点. 日本健康・栄養システム学会誌, 20(1), 51, 2020.

相原綾子, 野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, 溝部昌子:外国につながるのある人たちへの看護ケア -異文化との出会い 42 病院マップの開発と活用 第2報-. 第10回日本看護評価学会学術集会抄録集, 48, 2020.

鈴木里美, 野地有子:看護師と医療通訳士が協働する際の課題 -看護師と医療通訳士の双方の視点から-. 第10回日本看護評価学会学術集会抄録集, 47, 2020.

飯島佐知子, 松岡光, 野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 溝部昌子, 相原綾子:HCAHPS を用いた日本に滞在する外国人と日本人の日本の病院での入院経験の質の比較. 第10回日本看護評価学会学術集会抄録集, 49, 2020.

野地有子, 藤田比佐子, 飯島佐知子, 近藤麻理, 小寺さやか, 溝部昌子, 小林康司, 浜崎美子, 大友英子, 野崎章子:ICT を活用した Covid-19 への対応例:看護職の多文化対応能力を高める国際セミナー実施評価 第1報 タイムラインに沿って. 第24回日本看護管理学会学術集会抄録集, 235, 2020.

藤田比左子, 野地有子, 飯島佐知子, 近藤麻理, 小寺さやか, 溝部昌子, 小林康司, 浜崎美子, 大友英子, 野崎章子:ICT を活用した Covid-19 への対応例:看護職の多文化対応能力を高める国際セミナー実施評価 第2報 参加者への導入と共創. 第24回日本看護管理学会学術集会抄録集, 248, 2020.

松田美智代, 野地有子:相互リフレクションによる日常の経験を学びに変える有効性について-相互支援する組織づくり-. 第24回日本看護管理学会学術集会抄録集, 268, 2020.

Noji, A., Fujita, H., Sumitani, D., Narita, T. (2020). Creating Value for Academic Communities by Leveraging the strengths of Online Communication in COVID-19 Pandemic Environments. The 13th International Nursing Research Conference, Seoul National University, Korea.

Tong Ling, Wang Jingping, Li Yao, Li Juan, Noji, A., Kitaike, T. (2020). Self-perceived transcultural self-efficacy in nurses' in third-class general hospitals in Hangzhou, China. The 13th International Nursing Research Conference, Seoul National University, Korea.

溝部昌子, 野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, 炭谷大輔: 看護師の文化能力研修に用いる教材の検討-看護英語ノートの制作 Development of Education Material for Nurses Cultural Competence-English Note for Transcultural nursing-. 第5回グローバルヘルス合同大会, 大阪, 2020.

Noji, A., Fujita, H., Sumitani, D., Narita, T. (2020). Factor Analysis Affecting Online Communication to Healthcare Professional in COVID-19 Pandemic. The 10th Hong Kong International, Nursing Forum, 3rd Sigma Asia Region Conference, Hong Kong.

Fujita, H., Noji, A., Sumitani, D., Iijima, S., Kondo, M., Kotera, S., Mizobe, A., Kobayashi, K., Hamasaki, Y., Ootomo, E., Nosaki, A. (2020). Web-based Seminar as an Effective Way of Learning Including Interactive Experiences in COVID-19 Pandemic (Part 1). The 10th Hong Kong International, Nursing Forum, 3rd Sigma Asia Region Conference, Hong Kong.

Sumitani, D., Fujita, H., Noji, A., Iijima, S., Kondo, M., Kotera, S., Mizobe, A., Kobayashi, K., Hamasaki, Y., Ootomo, E., Nosaki, A. (2020). Web-based Seminar as an Effective Way of Learning Including Interactive Experiences in COVID-19 Pandemic (Part 2). The 10th Hong Kong International, Nursing Forum, 3rd Sigma Asia Region Conference, Hong Kong.

Haraikawa, K., Noji, A., Yoshinaga, K. (2020). Relation between Skin Trouble and Due to Nurses' Wearing of Personal Protective Equipment in Response to Covid-19. The 10th Hong Kong International, Nursing Forum, 3rd Sigma Asia Region Conference, Hong Kong.

Ikuta, K., Noji, A., Genda, A. (2020). A Literature review of spiritual care

practices by nurses on general wards - Focusing on the situations and processes, and the difficulties and challenges in practice-. The 10th Hong Kong International, Nursing Forum, 3rd Sigma Asia Region Conference, Hong Kong.

野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, 溝部昌子, 野崎章子, 浜崎美子, 小林康司, 松岡光:医療通訳士と看護師の協働 -看護師・病院として準備しておくべきこと-. 第40回日本看護科学学会学術集会, 東京, 2020.

和住淑子, 荒尾博美, 上野まり, 奥田玲子, 落合亮太, 叶谷由佳, 黒田久美子, 錢淑君, 武田淳子, 出貝裕子, 中村京子, 野地有子, 堀律子, 本間昭子, 松浦治代, 渡邊典子:社会の変化に即した学士課程教育の改革ー臨地実習指導に関する看護系大学の個別事例研究ー. 第 40 回日本看護科学学会学術集会, 2020, オンライン開催.

小菅南美, 黒田久美子:看護管理者が捉えるナースコール対応の現状と課題, 第 26 回千葉看護学会学術集会, 千葉, 2020

Wazumi, Y., Saitou, S., Yamamoto, T., Chien, S. C. (2020). The development of a new nursing technique education system through visualization of “vital power”. NETNEP2020 – 8th International Nurse Education Conference, 2020, Sitges, Spain. Conference Canceled.

Kajiware, A. *, Wazumi, Y., Chien, S. C., Ogawa, Y. (2020). Development of an Innovative Model for Perinatal Care Focusing on the Family's Vital Power From the Perspective of Male Nurses. Taiwan International Nursing Conference 2020, Taipei City, Taiwan.

Ogawa, Y., Chien, S. C., Wazumi, Y., Kajiware, A. (2020). A Fundamental Artificial Intelligence Concept for Apprehending Daily Life Needs of Discharge Patients in Japanese Society 5.0. Taiwan International Nursing Conference 2020, Taipei City, Taiwan.

Chien, S. C., Wazumi, Y., Katagiri, T., Maruyama, K., Saitou, S., Udagawa, Y. (2020). Relationships of lifestyle and life balance on autonomic nerves for middle age working women with presymptomatic disease. Taiwan International Nursing Conference 2020, Taipei City, Taiwan.

Udagawa, Y., Chien, S. C., Wazumi, Y., Yamamoto, T. (2020). A Paradigm Case in the Field of Nursing for Intractable Neurological Diseases. Taiwan International

Nursing Conference.
2020, Taipei City, Taiwan.

野地有子, 梅田麻希, 溝部昌子, 近藤麻理, 小寺さやか, 浜崎美子, 大友英子, 飯島佐知子, 藤田比左子:外国につながるのある人たちへの看護ケア-看護学生における「異文化との出会い 42 病院マップ」の活用-. 第 25 回聖路加看護学会学術大会, 東京, 2021.

斉藤しのぶ, 和住淑子, 飛世眞理子:初めて模擬患者に対して看護技術を適用する場面における看護初学者の対象認識 および表現の特徴. 第 2 回日本看護シミュレーションラーニング学会学術集会学術集会, 2021, オンライン開催.

〔シンポジウム・招聘講演〕

野地有子:第 20 回日本健康・栄養システム学会大会長講演「人生 , 100 年令和の時代を支える NCM」日本健康・栄養システム学会誌, 20(1), 9-1, 2020.

野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, 溝部昌子, 野崎章子, 藤田比左子, 炭谷大輔:nGlobe セミナー/ナイチンゲール・チャレンジナウ!「看護職の多文化対応能力-対立・葛藤の対応」, 2020.

野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, 溝部昌子, 野崎章子, 藤田比左子, 炭谷大輔:nGlobe セミナー/ナイチンゲール・チャレンジナウ!「看護職の多文化対応能力-差別・格差の対応」, 2020.

野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, 溝部昌子, 野崎章子, 藤田比左子, 炭谷大輔:nGlobe セミナー/ナイチンゲール・チャレンジナウ!「インターカルチャー・コミュニケーション-外国人患者の臨床とコミュニケーション」, 2020.

野地有子:看護管理者のための TCN (異文化看護). 福井県看護協会, 2020.

野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, 溝部昌子, 野崎章子, 藤田比左子, 炭谷大輔:nGlobe セミナー/ナイチンゲール・チャレンジナウ!「多文化環境における医療倫理」1. 看護および医療倫理入門 2. 多文化環境における倫理的対立 3. 倫理相談/倫理委員会のための異文化スキル 4. 終末期の意思決定における異文化的視点, 2021.

〔論文等 (査読なし) 〕

日本糖尿病教育・看護学会 政策委員会 (2018 年 9 月~2020 年 9 月) 餘目千史, 飯田直子, 金子佳世, 黒田久美子, 高橋良幸, 永渕美樹, 任和子, 肥後直子, 古山景子, 水野美華, 村田中, 森山美知子, 柳井田恭子, 横山悦子:遠隔モニタリングを用いた看護支援と「糖尿病透析

予防指導管理料」の算定状況に関する実態調査. 日本糖尿病教育・看護学会, 24(2), 145-151, 2020

〔報告書〕

野地有子:世界をリードするインバウンド医療展開に向けた看護国際化ガイドライン. 平成 29 年度～令和 3 年度 科学研究費助成事業（基盤研究 A）研究成果報告書, 2020.

野地有子:シャリテ IPIKA-CHIBA プロジェクト:シャリテ医科大学と千葉大学の協働による国際化に能力を発揮できる若手リーダーの育成, 令和元年度千葉大学国際交流公募事業『海外との組織的教育研究交流支援プログラム』報告書, 2020.

野地有子, 飯島佐知子, 大友英子, 小粥美香, 谷井真弓, 小寺さやか, 小林康司, 近藤麻理, 坂元真奈美, 野崎章子, 浜崎美子, 別府佳代子, 松岡光, 水野雅子, 溝部昌子, 藤田さやか, 宮越幸代, 本杉樹子, 若園尚美, 相原綾子, 藤田比左子, 炭谷大輔, 中山健夫:令和 2 年度共同研究看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究 コンテンツ報告書 nGlobe セミナー. 看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター, 1-134, 2021.

野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 溝部昌子, 相原綾子, 炭谷大輔:看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の推進 平成 31 年度～令和 2 年度 看護学教育 FD マザーマップ・コンテンツ開発 10 年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進 コンテンツ報告書. 看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター, 4, 1-21, 2021.

杉山みち子, 小山秀夫, 野地有子, ほか:令和 2 年度厚生労働省老人保健事業推進等補助金（老人保健健康増進等事業分）『認知症対応型共同生活介護における栄養管理のあり方に関する研究事業』報告書. 一般社団法人日本健康・栄養システム学会, 2021.

野地有子, 正木治恵:ナイチンゲール・チャレンジナウ! シャリテ・千葉大学共同による若手リーダーの育成, 令和 2 年度千葉大学国際交流公募事業『海外との組織的教育研究交流支援プログラム』報告書, 2021.

溝部昌子, 野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, マシューポーター, 炭谷大輔, 大友英子, 小林康司, 浜崎美子:グローバル化する看護の現場に役立つ English Note 看護英語ノート. JSPS 基盤研究(A)野地有子「世界をリードするインバウンド医療展開に向けた看護国際化ガイドライン (17H01607)」西南女学院大学, 1-28, 2021.

野地有子, 和住淑子, 黒田久美子, 銭淑君, 高木夏恵:令和 2 年度 看護学教育ワークショップ報告書「看護学教育支援における ICT 活用の可能性」. 看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター, 1-71, 2021.

和住淑子, 野地有子, 黒田久美子, 銭淑君, 高木夏恵, 吉本照子, 稲垣朱美, 上野まり, 大原裕子, 荒尾博美, 奥田玲子, 落合亮太, 叶谷由佳, 武田淳子, 出貝裕子, 中村京子, 堀律子, 本間昭子, 松浦治代, 渡邊典子:大学における医療人養成の在り方に関する調査研究受託事業 学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究最終報告書(平成 30 年度ー令和 2 年度). 看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター, 1-126, 2021.

和住淑子, 野地有子, 黒田久美子, 銭淑君, 高木夏恵, 吉本照子, 稲垣朱美, 上野まり, 大原裕子, 荒尾博美, 奥田玲子, 落合亮太, 叶谷由佳, 武田淳子, 出貝裕子, 中村京子, 堀律子, 本間昭子, 松浦治代, 渡邊典子:社会の変化に即した看護系大学学士課程教育の改革 事例集ー自大学や地域社会のもつ潜在的な力の発見ー. 看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター, 1-56, 2021.

〔単行書〕

野地有子 (監修):クエスチョンバンク保健師国家試験問題解説 2021 第 13 版, メディックメディア, 2020.

野地有子 (監修):保健師国家試験のためのレビューブック 2021, 第 21 版, メディックメディア, 2020.

黒田久美子:セルフケア. 酒井郁子, 金城利雄, 深堀浩樹編, リハビリテーション看護 障害のある人の可能性とともに歩む. 改訂第 3 版, 72-78, 南江堂, 2021

野地有子:米国と英国の公衆衛生の発達と公衆衛生看護活動の歴史. 標準保健師講座 1, 公衆衛生看護学概論. 医学書院, 第 5 版第 4 刷, 248-256, 2021

2) 教育活動（学外）

【令和元年度 2019.4～2020.3】

	日時・期間	講師	用務先・活動内容
1	R1.4月～R2.2月	和住淑子	千葉県救急医療センター 看護研究個別指導・発表会指導
2	6月2日	和住淑子	春日井市民病院 春日井市民病院研修会（管理者コース）講師
3	6月7日	野地有子	漢陽大学（韓国） Convergent Education 講師
4	6月28日	和住淑子	千葉大学医学部附属病院 「シニアプリセプター実践研修」 講義「課題解決のために必要な能力ー事例の問題の構造的把握のために必要なシニアプリセプターとしての視点ー」, グループワークファシリテーター
5	7月20日	野地有子	関西医科大学 nGlobe 研修看護職の多文化対応能力研修 講師
6	8月3日	和住淑子	能美市立病院 看護管理者研修 講師
7	8月5日	和住淑子	埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科看護学専修 「看護理論」非常勤講師
8	8月7日	和住淑子	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 「看護理論」非常勤講師
9	8月7日～11日	野地有子	サンディエゴ大学（米国） 大学院生（看護管理者）短期留学 講師
10	8月24日	和住淑子	岐阜県立看護大学大学院看護学専攻 「看護政策論」非常勤講師
11	9月1日	野地有子	千葉県山武健康福祉センター（山武保健所） 看護管理者研修 講師

12	9 月 9 日	野地有子	東京都立広尾病院
			J M I P 研修会 講師
13	10 月 25 日	和住淑子	東京慈恵会医科大学教育センター
			「2019 年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル」講師（「組織管理論Ⅰ」組織マネジメント概論 担当）
14	11 月 7 日	野地有子	コンケン大学（タイ）
			看護教育とカリキュラム構築 F D 講師
15	12 月 8 日～11 日	野地有子	シャリテーベルリン医科大学（ドイツ）
			大学院生短期留学 講師
16	12 月 23 日	和住淑子	湘南医療大学
			F D マザーマップ研修会「カリキュラム編成と外部指針（指定規則など）の活用について」講師
17	R2.3 月 16 日	野地有子	北海道大学
			北海道大学大学院保健科学研究所 外部評価委員

【令和2年度 2020.4～2021.3】

	日時・期間	講師	用務先・活動内容
1	R2.6月～R3.3月	和住淑子	千葉県救急医療センター 看護研究個別指導・発表会指導
2	8月4日	和住淑子	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 「看護理論」非常勤講師（Zoom）
3	8月18日	和住淑子	埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科看護学専修 「看護理論」非常勤講師（Zoom）
4	8月21日	野地有子	福井県看護協会 看護管理能力育成研修 「看護管理者のための TCN（異文化看護）研修」講師 （双方向オンライン）
5	8月28日	和住淑子	岐阜県立看護大学大学院看護学専攻 「看護政策論」非常勤講師（Teams）
6	9月13日	和住淑子	看護科学研究学会 関東研修会（A コースステップ1，2）講師
7	9月19日	野地有子	nGlobe 研修看護職の多文化対応能力研修Ⅱ 「異文化環境における対立の対応」講師 （双方向オンライン）
8	9月26日	野地有子	nGlobe 研修看護職の多文化対応能力研修Ⅲ 「病院における差別・格差への対応」講師 （双方向オンライン）
9	10月1日	野地有子	日本健康・栄養システム学会 令和2年度臨床栄養師認定講座 講師 （双方向オンライン）
10	10月31日	野地有子	nGlobe 研修看護職の多文化対応能力研修Ⅳ 「外国人患者の臨床とコミュニケーション」講師 （双方向オンライン）
11	R3.1月23日	野地有子	nGlobe 研修看護職の多文化対応能力研修Ⅴ 「多文化環境における医療倫理」講師 （双方向オンライン）

2. 職員配置

附属看護実践研究指導センター

研 究 部	職 名	氏 名
セ ン タ ー 長	教 授	和住 淑子
ケア開発研究部	教 授 准教授	野地 有子 黒田 久美子
政策・教育開発研究部	准教授	錢 淑君
	講 師	高木 夏恵 (令和2年度より着任)

大学院看護学研究科看護システム管理学

領 域	職 名	氏 名
病院看護システム管理学	教 授	手島 恵
地域看護システム管理学	教 授 准教授 講 師	吉本 照子 (令和元年度をもって定年退職) 杉田 由加里 (令和2年度より着任) 飯野 理恵
ケア施設看護システム管理学	教 授	酒井 郁子

外部資金等（令和元年度のみ）

名 称	職 名	氏 名
大学における医療人養成の在り方に関する 調査研究委託事業	特任准教授	大原 裕子

3. 看護実践研究指導センター運営協議会記録

《令和元年度センター運営協議会》

運営協議会委員名簿

委員区分	氏 名	職 名 等
1号委員 (看護学研究科長)	中村 伸枝	千葉大学大学院看護学研究科長
2号委員 (センター長)	和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科附属 看護実践研究指導センター長
3号委員	諏訪 さゆり	千葉大学大学院看護学研究科教授 (千葉大学評議員)
	手島 恵	千葉大学大学院看護学研究科教授
	野地 有子	千葉大学大学院看護学研究科附属 看護実践研究指導センター教授
	吉本 照子	千葉大学大学院看護学研究科教授
4号委員	市川 智彦	千葉大学大学院医学研究院教授
	習田 由美子	厚生労働省医政局看護課看護サービス推進室長
	小見山 智恵子	東京大学医学部附属病院看護部長
	小宮山 伴与志	千葉大学教育学部長
	佐藤 美穂子	日本訪問看護財団常任理事
	武田 淳子	宮城大学看護学研究科理事・副学長
	上泉 和子	青森県立保健大学学長・理事長

令和2年2月17日現在

第39回看護実践研究指導センター運営協議会次第

1. 日 時 令和2年2月17日（月）17時30分～
2. 場 所 千葉大学看護学部 大会議室（管理棟2階）
3. 出席委員 中村会長（看護学研究科長）、和住委員（看護学研究科附属看護実践研究指導センター長）、諏訪委員、手島委員、野地委員、吉本委員、佐藤委員、武田委員、上泉委員、小見山委員、習田委員、市川委員、小宮山委員

4. 議 題

- (1) 令和元年度センター事業報告及び令和2年度センター事業計画（案）について
令和元年度看護実践研究指導センター事業実施状況

I. 事業・プロジェクト

- ① 看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement:CQI）モデルの開発と活用促進（2019年度まで）
- ② “Society5.0看護”創出拠点－ピア・コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略－（2020～2024年度）
- ③ 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究事業－学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究－（2020年度まで）

II. 研修事業

- ①看護学教育ワークショップ（センター独自事業）
- ②看護系大学FD企画者研修（センター独自事業）
- ③看護学教育指導者研修（センター独自事業）
- ④国公立大学病院副看護部長研修（センター独自事業）
- ⑤看護管理者研修（委託事業）

III. 研究活動

- ①共同研究

IV. FD・SDの推進

- ①FDコンテンツ開発
- ②FD（Faculty Development）マザーマップの活用を含む個別FDコンサルテーション
- ③CQI関連情報の共有とネットワーク化促進のためのWebシステムの整備

V. 広報活動

情報発信

- ①活動内容掲載（HP）
- ②センターパンフレット
- ③センター年報
- ④ニュースレター
- ⑤拠点インフォメーションメール

（2）その他

5. 報 告

- （1）教育関係共同利用拠点再々認定の際に付された特記事項への対応について
- （2）千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程
- （3）その他

《令和2年度センター運営協議会》

運営協議会委員名簿

委員区分	氏 名	職 名 等
1号委員 (看護学研究科長)	中村 伸枝	千葉大学大学院看護学研究科長
2号委員 (センター長)	和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科附属 看護実践研究指導センター長
3号委員	諏訪 さゆり	千葉大学大学院看護学研究科教授 (千葉大学評議員)
	手島 恵	千葉大学大学院看護学研究科教授
	野地 有子	千葉大学大学院看護学研究科附属 看護実践研究指導センター教授
4号委員	市川 智彦	千葉大学大学院医学研究院教授
	小宮山 伴与志	千葉大学教育学部長
	井上 史子	帝京大学高等教育開発センター教授
	川本 利恵子	湘南医療大学保健医療学部教授
	小見山 智恵子	東京大学医学部附属病院看護部長
	佐藤 美穂子	日本訪問看護財団常務理事
	島袋 香子	北里大学学長
	習田 由美子	厚生労働省医政局看護課看護サービス推進室 長
	武田 淳子	宮城大学看護学研究科理事・副学長
	山本 則子	東京大学大学院医学研究科教授長

令和3年2月19日現在

第40回看護実践研究指導センター運営協議会次第

1. 日時 令和3年2月19日（金）17時30分～

2. 開催方法 ZOOMによるオンライン開催

3. 出席委員 中村会長（看護学研究科長）、和住委員（看護学研究科附属看護実践研指導センター長）、諏訪委員、手島委員、野地委員、井上委員、川本委員、小見山委員、佐藤委員、島袋委員、武田委員、山本委員、市川委員、小宮山委員、習田委員

4. 議題

（1）令和2年度看護実践研究指導センター事業実施状況

I. 事業・プロジェクト

- ① “Society5.0看護”創出拠点ーピア・コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略ー（2020～2024年度）
- ② 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究事業ー学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究ー（2020年度まで）

II. 研修事業

- ① 看護学教育ワークショップ（センター独自事業）

III. 共同研究

IV. 広報活動

情報発信

- ① 活動内容掲載（HP）
 - ② センターパンフレット
 - ③ センター年報（HP掲載）
 - ④ ニュースレター
 - ⑤ 拠点インフォメーションメール
 - ⑥ 各種報告書発行（HP掲載）
- （2）令和3年度看護実践・教育・研究共創センター事業計画（案）
- （3）その他

5. 報告

- （1）その他

4. 看護実践研究指導センター運営委員会記録

《令和元年度センター運営委員会》

運営委員会委員名簿

委員区分	氏 名	職 名 等
1 号委員 (センター長)	和住 淑子	看護実践研究指導センター長 教 授 (看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
2 号委員	野地 有子	教 授 (看護実践研究指導センターケア開発研究部)
	黒田 久美子	准教授 (看護実践研究指導センターケア開発研究部)
	銭 淑君	准教授 (看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
3 号委員	吉本 照子	教 授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	手島 恵	教 授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	酒井 郁子	教 授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	飯野 理恵	講 師 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
4 号委員	諏訪 さゆり	教 授 (大学院看護学研究科看護学専攻)

看護実践研究指導センター運営委員会

- | | |
|-----|---|
| 年月日 | 平成31年4月10日（水） 16:30～16:55 |
| 議題等 | <ul style="list-style-type: none"> 1. 2019年度共同研究員の採否について 2. 2019年度国公立大学病院副看護部長研修受講者の採否について 3. 2019看護学教育指導者研修の募集について 4. 2019年度看護管理者研修の募集について 5. 2019年度看護系大学FD企画者研修の募集について 6. 2019年度会議開催予定日について |
| | |
| 年月日 | 令和元年5月22日（水） 15:00～15:45 |
| 議題等 | <ul style="list-style-type: none"> 1. 令和元年度予算案について 2. 2019年度共同研究員採否について（追加分） 3. 2019年度看護系大学FD企画者研修受講者の採否について 4. 令和元年度看護学教育ワークショップについて 5. 令和元年度運営協議会委員の選考について 6. 平成30年度会計報告 |
| | |
| 年月日 | 令和元年6月19日（水） 16:20～16:50 |
| 議題等 | <ul style="list-style-type: none"> 1. 2019年度看護学教育指導者研修の採否について 2. 2019年度看護管理者研修の受講者の採否について 3. 2019年度FD企画者研修プログラムについて 4. 2019年度看護学教育指導者研修のプログラムについて 5. 2019年度看護管理者研修のプログラムについて 6. 令和元年度看護学教育ワークショップについて 7. 教育関係共同利用拠点の申請について |
| | |
| 年月日 | 令和元年9月2日（月）～9月5日（木） 持ち回り審議 |
| 議題等 | <ul style="list-style-type: none"> 1. 令和元年度 看護学教育ワークショップの参加者決定について |
| | |
| 年月日 | 令和元年9月11日（水） 13:10～13:25 |
| 議題等 | <ul style="list-style-type: none"> 1. 特任教員の採用について 2. 令和元年度 看護学教育ワークショップの参加者決定について |
| | |
| 年月日 | 令和元年11月27日（水） 16:00～16:25 |
| 議題等 | <ul style="list-style-type: none"> 1. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程改正（案）について |
| | |
| 年月日 | 令和2年1月15日（金） 16:20～16:50 |
| 議題等 | <ul style="list-style-type: none"> 1. 令和2年度看護実践研究指導センター事業計画（案）について 2. 令和2年度共同研究員の募集要項（案）について 3. 令和2年度国公立大学病院副看護部長研修実施要項（案）について 4. 令和元年度センター運営協議会議題（案）について |

《令和２年度センター運営委員会》

運営委員会委員名簿

委員区分	氏 名	職 名 等
1 号委員 (センター長)	和住 淑子	看護実践研究指導センター長 教 授 (看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
2 号委員	野地 有子	教 授 (看護実践研究指導センターケア開発研究部)
	黒田 久美子	准教授 (看護実践研究指導センターケア開発研究部)
	銭 淑君	准教授 (看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
	高木 夏恵	講 師 (看護実践研究指導センター)
3 号委員	手島 恵	教 授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	酒井 郁子	教 授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	杉田 由加里	准教授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	飯野 理恵	講 師 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
4 号委員	諏訪 さゆり	教 授 (大学院看護学研究科看護学専攻)

看護実践研究指導センター運営委員会

年月日 令和2年4月9日（木） 持ち回り審議

議題等 1. 共同研究員の採否について

年月日 令和2年4月30日（木） 持ち回り審議

議題等 1. 令和2年度副看護部長研修について

2. 令和2年度開催予定の研修について

年月日 令和2年8月5日（水） 持ち回り審議

議題等 1. 令和2年度看護学教育ワークショップ（募集要項・申込書・案内チラシ）について

年月日 令和2年10月5日（月） 持ち回り審議

議題等 1. 令和2年度看護学教育ワークショップ受講者の選考について

年月日 令和2年10月13日（火） 持ち回り審議

議題等 1. 附属看護実践研究指導センター名称変更について

年月日 令和2年11月6日（金） 持ち回り審議

議題等 1. 附属看護実践研究指導センター運営協議会委員名簿（案）について

2. 改組に係る規程（案）について

年月日 令和3年2月2日（火） 持ち回り審議

議題等 1. 令和2年度センター運営協議会資料について

2. 令和3年度共同研究員募集について

5. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程

平成16年4月1日

制定

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人千葉大学の組織に関する規則第16条に定める千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター（以下「センター」という。）の管理運営に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、教育関係共同利用拠点として、看護学の実践的分野に関する調査研究、専門的研修その他必要な専門的業務を行い、かつ、国立大学法人の教員その他の者で、この分野の調査研究に従事するものの利用に供することを目的とする。

(研究部)

第3条 センターに、次の研究部を置く。

- 一 ケア開発研究部
- 二 政策・教育開発研究部

(職員)

第4条 センターに、次の職員を置く。

- 一 センター長
- 二 教授、准教授、講師、助教、助手及びその他の職員

(センター長)

第5条 センター長は、センターの管理運営に関する業務を総括する。

2 センター長の選考は、看護学研究科の専任の教授の中から研究科長の推薦により学長が行う。

3 センター長の任期は2年とし、1回を限度として再任することができる。

(運営協議会)

第6条 センターに、センターの事業計画その他運営に関する重要事項を審議するため、センター運営協議会（以下「協議会」という。）を置く。

(組織)

第7条 協議会は、次に掲げる者をもって組織する。

- 一 看護学研究科長
- 二 センター長

三 看護学研究科教授会（以下「教授会」という。）構成員の中から研究科長が選出した者若干名

四 看護学研究科外の学識経験者若干名

2 前項第3号及び第4号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 第1項第4号の委員は、看護学研究科長の推薦により学長が選考し、委嘱する。

4 委員の過半数は、原則として学外の学識経験者をもって構成する。

（会長）

第8条 協議会に会長を置き、看護学研究科長をもって充てる。

2 会長は、協議会を召集し、その議長となる。

（運営委員会）

第9条 センターに、次の事項を審議するため運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

一 センターの事業計画に関すること。

二 センターの予算の基本に関すること。

三 その他センターの管理運営に関すること。

（組織）

第10条 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

一 センター長

二 センター所属の教授、准教授及び講師

三 看護システム管理学専攻専任の教員

四 教授会構成員（前2号に掲げる者を除く。）の中から研究科長が選出した者3名

（委員長）

第11条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を召集し、その議長となる。

（会議）

第12条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開き議決することができない。

2 委員会の議決は、出席委員の過半数の同意をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

3 委員長は、必要と認めるときは、委員以外の者を会議に出席させることができる。

（共同研究員）

第13条 センターは、国立大学法人の教員その他の者で看護学の実践的分野に関する調査研究に従事するものを共同研究員として受け入れることができる。

2 共同研究員に関し必要な事項は、別に定める。

(研修)

第14条 センターは、必要に応じ看護教員及び看護職員の指導的立場にある者に対し研修を行うものとする。

2 研修に関し必要な事項は、別に定める。

(事務処理)

第15条 センターの事務は、亥鼻地区事務部総務課において処理する。

(細則)

第16条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施に関し必要な事項は、研究科長が定める。

附 則

1 この規程は、平成16年4月1日から施行する。

2 この規程の施行の際国立大学法人法（平成15年法律第112号）附則別表第1の上欄に掲げる千葉大学（以下「旧千葉大学」という。）において定められた千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター規程第7条第1項第3号及び第4号の規定により任命された委員である者は、この規程の施行の日において、それぞれ第7条第1項第3号及び第4号により任命されたものとみなす。この場合において、その任命されたものとみなされる者の任期は、第7条第2項の規定にかかわらず、それぞれ旧千葉大学において付された任期の末日までとする。

附 則

この規程は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成21年4月1日から施行する。

2 この規程の施行の際千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター規程（以下「旧規程」という。）第7条第1項第3号及び第4号の規定により任命された委員である者は、この規程の施行の日において、それぞれ第7条第1項第3号及び第4号により任命されたものとみなす。この場合において、その任命されたものとみなされる者の任期は、第7条第2項の規定にかかわらず、それぞれ旧規程において付された任期の末日までとする。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成 27 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、平成 27 年 10 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、令和元年 7 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、令和 2 年 4 月 1 日から施行する。

看護実践研究指導センター年報
No. 38 (令和元年度・2年度合併号)
令和3年3月発行

編集兼発行者 千葉大学大学院看護学研究科
附属看護実践研究指導センター
〒260-8672
千葉市中央区亥鼻1丁目8番1号
TEL 043-226-2464

印刷所 三陽メディア(株) 千葉営業所
千葉市中央区浜野町1397
TEL 043-266-8437

千葉大学大学院看護学研究科 附属看護実践研究指導センター

〒260-8672

千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1

TEL 043-226-2464

URL <https://www.n.chiba-u.jp/center/>